新潟県埋蔵文化財調査報告書第38

北陸自動車道

上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅰ

57年度発掘調査

池田遺跡

（付編）
一之口遺跡4区　河川跡出土遺物

1985

新潟県教育委員会

序

新潟県教育委員会は，昭和47年８月以来北陸自動車道の建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を，事業主体である日本道路公団と協議を進めながら実施してきた。

北陸自動車道は新潟市から上越市まではすでに供用されている，上越市以南においても富山県朝日町までの連結を目ざして着々と工事が進められ，新潟県は今や高速交通時代に入ったと言える。

本書は，北陸自動車道建設に伴い新潟県教育委員会が日本道路公団の委託を受けて実施した上越市春日・木田地区における発掘調査の記録である。

この調査により，沖積地における郷土の先人たちの文化や生活の一端を明らかにすることができた。当地方においては沖積地における考古学的研究は，まだその緒についたばかりである。

本調査の結果及びこれから予定されている調査の成果が，将来の関連分野の研究を進める一助となれば幸いである。

本調査を進めるに当って，多大なる御協力をいただいた地元上越市及び上越市教育委員会並びに市民の方々，また，格別の御配慮をいただいた日本道路公団に対し，深甚なる謝意を表する次第である。

昭和60年３月

新潟県教育委員会

教育長　久　間　健　二

例　　言

1．本書は，上越市春日・木田地区の北陸自動車道法線内における昭和57年度の発掘調査（試掘調査分）及び昭和58年度の池田遺跡の発掘調査に係る報告書である。調査は，北陸自動車道建設に伴ない，新潟県が日本道路公団から受託して実施したものである。

2．発掘調査は新潟県教育委員会が主体となり実施された。調査体制は以下のとおりである。

〈調査体制〉

昭和57年度

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　久間健二）

管　理	総　括	南　義昌	（新潟県教育庁文化行政課長　）
	管　理	歌代荘平	（新潟県教育庁文化行政課長補佐　）
	庶　務	飯口　猛	（新潟県教育庁文化行政課主任　）
		若杉幸三	（新潟県教育庁文化行政課主事　）
		伊藤和子	（新潟県教育庁文化行政課主事　）
調　査	調査指導	金子拓男	（新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係長）
	調査担当者	横山勝栄	（新潟県教育庁文化行政課文化財主事　）
	調査員	寺崎裕助	（新潟県教育庁文化行政課学芸員　）
		田海義正	（新潟県教育庁文化行政課学芸員　）
		高橋　勉	（新潟県教育庁文化行政課嘱託　）

調査作業員　藤新田・中屋敷・岩木・薄袋・藤巻・木田地区などの有志

昭和58年度

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　久間健二）

管　理	総　括	高橋　安	（新潟県教育庁文化行政課長　）
	管　理	歌代荘平	（新潟県教育庁文化行政課長補佐　）
	庶　務	飯口　猛	（新潟県教育庁文化行政課主任　）
		高橋幸治	（新潟県教育庁文化行政課主事　）
		藤枝セツ	（新潟県教育庁文化行政課主事　）
調　査	調査指導	中島栄一	（新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係長）
	調査担当者	木村宗文	（新潟県教育庁文化行政課文化財主事　）
	調査員	戸根与八郎	（新潟県教育庁文化行政課学芸員　）
		寺崎裕助	（新潟県教育庁文化行政課学芸員　）
		北村　亮	（新潟県教育庁文化行政課学芸員　）
		田海義正	（新潟県教育庁文化行政課学芸員　）

調査員　鈴木俊成　（新潟県教育庁文化行政課嘱託）
高橋　勉　（新潟県教育庁文化行政課嘱託）
丸山謙司　（新潟県教育庁文化行政課嘱託）
肥田野弘之　（新潟県教育庁文化行政課嘱託）
調査作業員　藤新田・中屋敷・岩木・薄袋・藤巻・木田・大豆・五智・正善寺地区などの有志

3．須恵器の実測図及び拓本の断面は黒ぬりとした。

4．発掘調査による出土遺物は，一括して新潟県教育委員会が保管している。遺物の注記は昭和57年度発掘調査出土遺物を「春カク」，池田遺跡発掘調査出土遺物を「ＩＫ」とした。

5．昭和57年度発掘調査の第Ｉ章第２節中の『越史』とは『越佐史料』の略である。

6．中・近世陶磁器及び舶載磁器については，伊藤正義・小野正敏・大橋康二・小島幸雄・吉岡康暢の５氏から御指導を賜った。

7．プラント・オパールの分析は宮崎大学・藤原宏志助教授，花粉分析は県立高田高校・高野武男教諭に依頼した。

8．本書の図版作成，執筆は分担して行った。昭和57年度発掘調査では，第Ｉ章第１節は岡本郁栄・第２節は木村宗文・第II章第１節は横山勝栄・他は寺崎裕助が執筆を行った。池田遺跡では，第Ｉ章は寺崎裕助・第II章第１節は肥田野弘之・第VI章は高野武男・他は鈴木俊成が執筆を行った。なお，第Ｖ章のプラント・オパール分析については，藤原宏志助教授の了解を得て「分析結果に関するコメント」を掲載した。付編は田海義正が執筆した。

9．一之口遺跡４区の河川跡から，木製品を伴う多量の土器が検出された。県内に類例をみない資料のため報告書作成途中であるが，その一部を付編として報告する。木製品については文化庁・黒崎直氏から御教示を得た。

10．発掘調査から本書の作成に至る迄，下記の方々から多大な御教示，御協力を得た。厚く御礼申し上げる。（敬称略・五十音順）
伊藤正義　大橋康二　大森勉　小野正敏　金子拓男　黒崎直　小島幸雄　齊藤基生　高野武男　中村美恵子　花ヶ前盛明　藤原宏志　吉岡康暢　渡辺誠　県警上越南警察署　上越市教育委員会

目　　次

昭和57年度発掘調査

第Ⅰ章　周辺の環境……1
　第1節　地理的環境……1
　　A　高田平野概観……1
　　B　周辺の地形と遺跡……6
　第2節　歴史的環境……7
　　A　古代頸城郡と直江津……7
　　B　上杉氏と春日山の動向……7
第Ⅱ章　発掘調査……10
　第1節　調査に至る経過……10
　第2節　調査の経過……11
　第3節　グリッドの設定と確認調査の方法……12
　第4節　層序……13
　第5節　確認された遺跡……14
　　A　木田遺跡……14
　　B　池田遺跡……15
　　C　一之口遺跡……16
　　D　八反田遺跡……19
　　E　鉄砲町遺跡……21
　　F　高畑遺跡……23
　第6節　まとめ……24
引用文献……25

池田遺跡

第Ⅰ章　調査に至る経過……27
第Ⅱ章　調査の経過と方法……28
　第1節　調査の経過……28
　第2節　調査の方法……28
第Ⅲ章　遺跡の層序……29
第Ⅳ章　遺構と遺物……30
　第1節　Ⅳ層上面の検出遺構とⅣa層出土遺物……30
　　A　水田跡……30

B　土坑……32
C　出土遺物……32
第2節　VI層上面の検出遺構と出土遺物……37
A　畝状遺構……37
B　土坑……38
C　溝状遺構……40
第3節　VI層出土遺物……42
第4節　VIIa層の検出遺構と出土遺物……43
第V章　プラント・オパール分析（分析結果に関するコメント）……44
第VI章　花粉分析……46
第VII章　まとめ……50
引用文献……52
付編　一之口遺跡4区河川跡出土遺物
河川跡出土遺物

挿　図　目　次

第1図　遺跡周辺の地形区分図……3
第2図　周辺の地形と遺跡……4・5
第3図　春日・木田地区周辺の小字……9
第4図　グリッド表示方法……12
第5図　グリッド設定図……折込み
第6図　基本層序模式図……13
第7図　木田遺跡土層柱状図……14
第8図　木田遺跡試掘範囲……折込み
第9図　木田遺跡出土遺物……15
第10図　池田遺跡試掘範囲……15
第11図　池田遺跡土層柱状図……15
第12図　池田遺跡出土遺物……16
第13図　一之口遺跡土層柱状図……16
第14図　一之口遺跡試掘範囲……折込み
第15図　一之口遺跡出土遺物……18
第16図　八反田遺跡土層柱状図……19

第17図　八反田遺跡出土遺物……20
第18図　八反田遺跡試掘範囲……折込み
第19図　鉄砲町遺跡土層柱状図……21
第20図　鉄砲町遺跡試掘範囲……22
第21図　鉄砲町遺跡出土遺物……23
第22図　高畑遺跡遺物採集範囲……23
第23図　春日・木田地区における遺跡の動態……24
第24図　池田遺跡層序……29
第25図　池田遺跡水田跡……31
第26図　池田遺跡土坑（Ⅳ層）……33
第27図　池田遺跡Ⅳａ（水田耕作土）層出土遺物(1)……35
第28図　池田遺跡Ⅳａ（水田耕作土）層出土遺物(2)……36
第29図　池田遺跡畝状遺構出土遺物……37
第30図　池田遺跡Ⅵ層上面確認遺構……38
第31図　池田遺跡土坑（Ⅵ層）……39
第32図　池田遺跡１・２号溝断面……40
第33図　池田遺跡４・６～８号溝断面……40
第34図　池田遺跡１号溝出土遺物……41
第35図　池田遺跡３・４号溝出土遺物……42
第36図　池田遺跡Ⅵ層出土遺物……42
第37図　池田遺跡集石（Ⅶａ層）……43
第38図　池田遺跡プラント・オパール柱状図（20Ｅ14）……44
第39図　ａ　木本種の花粉分析図……48
　　ｂ　草本種の花粉分析図と花粉・胞子……48
第40図　イネ科花粉粒径頻度分布図……49
第41図　池田遺跡水田跡高低図……51
付　編
第１図　一之口遺跡４区河川跡出土土器
第２図　一之口遺跡４区河川跡出土土器
第３図　一之口遺跡４区河川跡出土木器
第４図　一之口遺跡４区河川跡出土木器

表　目　次

第１表　池田遺跡畦畔分類表……32
第２表　池田遺跡土坑属性表……33
第３表　池田遺跡土坑属性表……39
第４表　池田遺跡（20Ｅ14）におけるプラント・オパール定量分析結果……45
第５表　池田遺跡（20Ｅ８）におけるプラント・オパール定量分析結果……45

図　版　目　次

図版１　発掘風景（池田遺跡・一之口遺跡）
図版２　発掘風景（八反田遺跡），トレンチ完掘状態（一之口遺跡）
図版３　遺構検出状態（鉄砲町遺跡）
図版４　春日・木田地区出土遺物
図版５　池田遺跡遠景・土層断面
図版６　池田遺跡水田跡
図版７　池田遺跡水田跡
図版８　池田遺跡水田跡・畝状遺構
図版９　池田遺跡畝状遺構・土坑
図版10　池田遺跡溝状遺構・集石
図版11　池田遺跡水田跡出土遺物
図版12　池田遺跡水田跡出土遺物・６号土坑出土遺物
図版13　池田遺跡１号溝出土遺物・VI層出土遺物
図版14　プラント・オパール
図版15　花粉

付　編
図版１　一之口遺跡４区河川跡出土土器
図版２　一之口遺跡４区河川跡出土木器

昭和57年度発掘調査

第I章　周辺の環境

第1節　地理的環境

A　高田平野概観

高田平野は新潟県南西部に位置する不等辺三角形をした平野である。面積は約210㎢で平野の大部分は沖積平野から成り立っている。平野北部は日本海に面し，東と西は山地・丘陵に限られている。平野と山地・丘陵の境は地質構造に支配され直線状である。

平野東部は関田山地と東頸城丘陵が北北東から南南西に延びており，高田平野と信濃川の分水嶺を形成している。これらの山地及び丘陵は，新第三系と前期更新統の魚沼層からなり，その延長方向は本県の油田構造方向と一致する。平野北東部には米山山地が存在し，柏崎平野との境界となっている。

平野西部は前面に西頸城丘陵，背後に西頸城山地が連なり，海岸から南へ次第に高度をあげ標高2,462mの火打山へと続いている。これらの山地・丘陵も平野東部と同じく主に新第三系の地層からなっている。

平野東西両側の丘陵地は起伏量も小さく緩傾斜であるが，全国有数の新第三紀層地すべりの発達地である。

平野の南側信越国境には妙高・黒姫・飯縄の各火山が南北に並ぶ。妙高火山の西側には昭和49(1974)年に噴火した本県唯一の活火山である焼山が存在する。また妙高火山の北側と東側の山麓には，同火山の火砕流・軽石流・泥流が形成した広大な高原が広がっている。

平野の東西縁辺部には洪積段丘が存在するが発達は悪い。比較的平坦面の発達するのは，上越市平山の露頭を標式とする平山段丘である。

平野西部で平山段丘は上越市平山を中心に分布し，海岸部では平山層の堆積物が一部整合一部不整合で古砂丘砂と重なる。段丘先端部は北東に緩く傾斜し沖積面に埋没している。

一方，平野東部では浦川原村・三和村にかかる山本山，清里村菅原神社に平山層に対比できる地層と段丘が認められる。平野北東部では，吉川町原の町周辺に分布する原の町面が平山面に対比されている。

平山段丘と山本山・菅原神社の段丘は上部に1～1.5mのローム層をのせており，頸城ローム層とよばれる。頸城ローム層は，信濃川流域の段丘を覆う信濃川ローム層，長野県野尻湖周辺の野尻ローム層との対比が行われている。

平山層中の花粉化石は針葉樹種のマツ属・モミ属・トウヒ属・ツガ属が優占し，それに広葉樹種のブナ属・ナラ属を若干伴っている。このような花粉組成は，亜高山帯下部の冷涼湿潤な気候を推定させる。

他に，平山段丘より高位の愛の風面が，平野西部では上越市愛の風，東部では前述した山本

山，板倉町などに分布する。しかし，それぞれ規模も小さく断続的であり，平坦面の発達は悪い。また平野南部で関川，北東部で柿崎川，西部で正善寺川の各河川谷口に後述する高田面より１段高い面が存在する。

平野と海を限る砂丘は潟町砂丘と呼ばれ北東から南西方向に延びている。古砂丘を新砂丘が覆って形成された古砂丘型砂丘（新潟古砂丘グループ1967）である。下位の古砂丘は硬く固結した砂層からなり，砂層上位は粘土化し褐色を呈している。新砂丘砂との間には黒色腐植土が存在する。新砂丘は未固結の灰白色砂からなり完新世に入って堆積したものである。新砂丘は内部に存在する黒色帯を境にして下位の新砂丘Ｉと上位の新砂丘IIに区分される。

砂丘の黒色土や黒色帯は旧地表面と考えられ遺跡の存在することが多い。古砂丘最上位の黒色腐植土からは，吉川町長峰（室岡他1984）で縄文時代早期，柿崎町鍋屋町（寺村他1960）・上越市善光寺浜(室岡1972)で縄文時代前期末葉の遺跡が報告されている。この腐植層について，^{14}C年代を測定した結果，6200±110Ｙ．Ｂ．Ｐという値がでている。新砂丘砂中の黒色帯からは，大潟町小舟津浜・柿崎町西の脇（岡本他1980）で縄文時代後期の土器片，平安時代の土師器片が採集されている。

高田平野を流れる大小の河川で海に直接流入するのは関川と柿崎川である。関川は高田平野最大の河川で火打山南側に源をもつ。高田平野に入り，火打山北側から流出する矢代川や平野東側の関田山地・東頸城丘陵から流れ出る大熊川・別所川・保倉川を合流し，平野の西よりをほぼ南北に流れ日本海に注いでいる。

関田山地・東頸城丘陵から平野に流入する各河川は谷口に扇状地を発達させ，平野東部の地形面に大きな影響を与えている。保倉川は丘陵山麓のほぼ中央から平野に流入し激しく蛇行しながら西へ流れ，関川河口付近で関川に合流する。しかし，現在の河道以前はまったく別の河道を谷口から北西へ流れ潟町砂丘にぶつかっていた。柿崎川は米山山地・東頸城丘陵北部の谷あいの水を集め，柿崎町出羽で日本海に注ぐ。

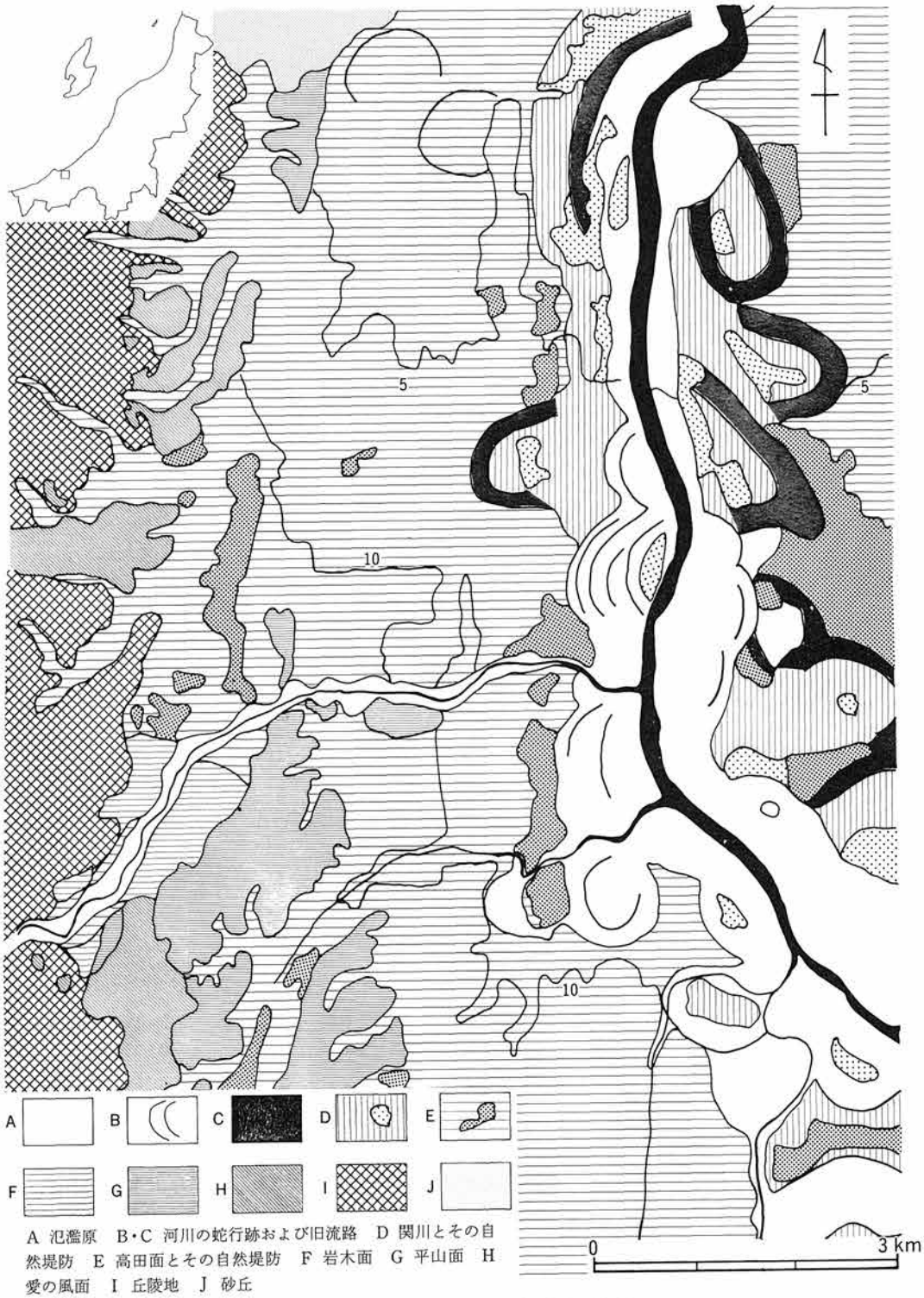
関川左岸では矢代川以外に大きな河川が存在せず青田川・儀明川・正善寺川など中小の河川が西頸城山地・丘陵から関川に合流している。

高田平野の大部分を占める沖積面は上位から高田面・関川面・氾濫原の３つに区分できる。

高田面は沖積面の大部分を占め，関川の氾濫原の面からの比高は平野南部の新井市・板倉町で6m，北部の直江津で２～3mである。関川右岸は保倉川以南地域で扇状地が発達し，扇状地を形成した別所川・櫛池川・飯田川は谷口周辺に明瞭な浸食崖が存在する。保倉川は谷口周辺に比高5mの段丘崖が認められる。

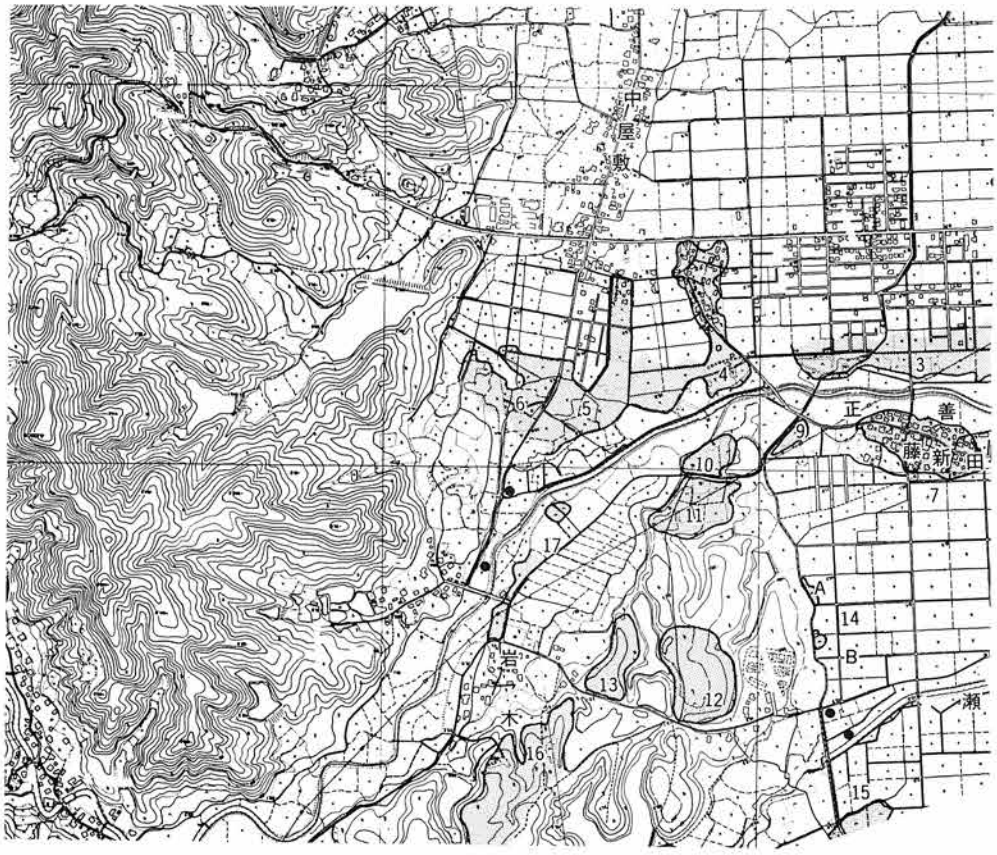
一方，高田面に分布する遺跡は地域により異なった存在状態を示し，高田面上に立地するほか関川に合流する中小河川の堆積作用により埋没したものも多い。

関川・矢代川合流点より下流の右岸では，現在の集落に付随する畑や自然堤防上に遺跡の存在する例が多い。合流点近くの上越市今池では奈良時代の遺構が地表下30～50cmに存在し，遺



A 氾濫原　B・C 河川の蛇行跡および旧流路　D 関川とその自然堤防　E 高田面とその自然堤防　F 岩木面　G 平山面　H 愛の風面　I 丘陵地　J 砂丘

第1図　遺跡周辺の地形区分図
（高田平野団体研究グループ：高田平野の第四系と形成史，1980より）



第2図　周辺の地形と遺跡

物が地表に散布している（新潟県教育委員会1983）。

平野東麓の飯田川扇状地の扇頂地域では地表下1.5mに黒色帯が存在する。黒色帯の下位10～15cmからは古式土師器が出土し，黒色帯の上面には古墳時代後期に属する古墳が構築されている（関他1976，高田平野団体研究グループ1980）。

関川と矢代川に挟まれた地域では古墳時代後半の遺構・遺物包含層が地表下1.5mに，平安時代と中世の包含層が地表下50cm～1mに存在する（新潟県教育委員会1980，秦他1984）。

関川左岸の今回の調査地域周辺では古墳時代・平安時代・中世の各遺物包含層が地表下50～60cmから1mに存在する。また池田遺跡・八反田遺跡では縄文土器が確認調査時に沖積面下及び微高地から出土している。

つぎに高田面下の表層をみると，地表下約数10cmから2mの深さに腐植層が認められることが多い。また^{14}C年代は上越市小泉の地表下2.5mで2200～2800Y. B. P，新井市原・同市小出雲の地表下約3.5mで1500～1600Y. B. Pである（高田平野団体研究グループ1980）。

以上の事実から高田面が陸化するのは，弥生時代末期から古墳時代初頭と考えられる。その後，数回の堆積が行われ，完全に乾陸化したのは奈良時代以降であった。しかし，その後も関川支流の氾濫によって部分的には堆積作用が続いたと考えられる。一方，縄文土器の出土は縄

1 木田遺跡　13 出雲遺跡
2 池田遺跡　14 A・B江向遺跡
3 一之口遺跡　15 滝寺遺跡
4 八反田遺跡　16 岩木遺跡
5 鉄砲町遺跡　17 グランド脇遺跡
6 高畑遺跡　（15、16、17は仮称）
7 藤新田遺跡　●遺物散布地
8 本郷新田遺跡
9 小西野遺跡
10 池山遺跡
11 山畑遺跡
12 山屋敷遺跡

（上越市役所発行「上越市街図」1:10,000原図）

文時代後期後葉から始まる小海退による高田面の陸化の開始期，あるいは埋没段丘の存在を予想させる。

関川面は高田面より下位の沖積面である。高田面とは1m以上の比高があり，関川の氾濫原との比高は1～2m程度である。面は関川と矢代川の合流点周辺にやや広く分布するほか，関川とそれに合流する河川の流路沿いに分布するにすぎない。

また，関川面には関川の旧河道が刻まれ蛇行の痕跡をしるしている。蛇行の範囲は現在の関川本流の両岸それぞれ0.5～1kmに及ぶ。

関川面に分布する遺跡は数少ないが上越市箱井で珠洲系陶器・五輪塔など中世の遺物が出土している。これらの遺物から関川面は中世末に陸化したと考えられる。また，高田城築城に伴う関川・矢代川の河道付替工事により陸化が進んだ可能性もある。

平野北方の潟町砂丘の背後には長峰池・朝日池などの湖沼群が存在する。湖沼群の南側に自然堤防に囲まれた標高2～3mの低地が広がり，かつて存在した大潟(江戸時代末期に干拓され消滅）の痕跡をとどめている。

高田面を形成する堆積物は高田層といわれ最下部高田層・下部高田層・中部高田層・上部高田層に区分される。最下部高田層から中部高田層の基底には礫層が存在し，海面低下時の扇状

地堆積物の可能性が強い。その上位のシルト層・粘土層は気候の温暖化によって堆積したと考えられるが，資料に乏しく堆積環境は不明である。

上部高田層は地表下約70mに基底面をもつ礫層と，その上に堆積する砂・シルト・粘土の互層からなり，下部・中部・上部に3分される。

花粉化石組成をみると，下部はトウヒ属・モミ属がブナ属より優占し氷期直後の様相を示している。中部はブナ属が優占する時代で，最も温暖な気候を示す。上部はブナ属・ツガ属が多くやや寒冷化の様相を呈し，弥生小海退時の堆積と考えられる。またこの時期，妙高山麓ではツガ属・トウヒ属・モミ属が増加し亜高山帯的様相を呈していた（岡本1982）。

高田層の堆積した水域は，珪藻化石の分析から後背地からの陸水が卓越する不安定，流動的な河川・湖沼であったと考えられる。ただ柿崎川河口に近い馬正面のボーリング試料では，上部高田層中部から汽水棲種の珪藻が検出されている。このことは上部高田層中部堆積時に若干の海水の進入があり，河口周辺に汽水域を形成したことを示している。この海進は花粉化石や^{14}C年代の分析から縄文海進と考えられる。

B　周辺の地形と遺跡

本遺跡群は上越市高田・直江津両市街地のほぼ中央に位置し，高田面と一部平山段丘面に存在する。また，関川の氾濫原近くから西頸城丘陵の山麓まで東西に長く分布している。

本遺跡群東側で関川は蛇行の痕跡を関川面及び氾濫原に明瞭にとどめ，木田北方の薄袋では大きく蛇行した旧河道が現河道より西へ1kmほど入り込んでいる。

また遺跡群のすぐ南側を正善寺川が東流し木田で関川に合流している。さらに南西方向には平山段丘が分布し，北東に緩く傾いて調査地域近辺で沖積面に接している。このため八反田遺跡では埋没段丘面及び化石土壌が沖積面下に残存する可能性が高い。

西方には春日山・愛の風・金谷山など西頸城山地・丘陵の東縁を形成する標高100～150mの丘陵が南北に連なっている。

西頸城丘陵と平山段丘に挾まれた正善寺川谷口には高田面より1段高い面が分布する。ここでは岩木面と仮称する。

高田面には自然堤防が分布し，その上に集落の立地することが多い。遺跡群周辺では木田・藤巻・中屋敷・大豆の集落である。このうち中屋敷・大豆は西頸城丘陵との位置関係，延長方向からみて埋没段丘の可能性もある。また高畑遺跡ののる自然堤防も浸食された丘陵もしくは段丘の可能性がある。

調査地域周辺の平山段丘・高田面にはほかにも多くの遺跡が分布する。平山面には山屋敷・山畑（小島他1978，1979）など縄文時代中期や古墳時代末期の遺跡が存在する。ほかにも岩木・滝寺の集落周辺で縄文時代遺跡がいくつか確認されている。高田面では，微高地上の藤新田・本郷新田の各遺跡で奈良・平安時代の遺物が出土し，水田からも遺物が出土する。水田での遺物出土は，調査地域周辺になおいくつかの埋没した遺跡が存在することを示している。

第2節　歴史的環境

A　古代頸城郡と直江津

頸城郡が越後国に編入されたのは大宝2年（702）のことである（米沢1980）。『和名類聚抄』には，郡内に「沼川・都宇・栗原・原木・板倉・高津・物部・五公・夷守・佐味」の10郷が存在したことを示すが，このうち都宇郷が直江津付近にあったと推定されている。10世紀前半に越後国府が頸城郡に存在したことは，『和名類聚抄』に「越後国国府在頸城郡行程上二十四日下十七日」と記されることによって明らかである。しかし設置時期については，成立当初の越後の国域がしばらく流動的であったために，断定することは困難であり，所在地についても諸説ある。（註1）ただ発掘調査の結果，上越市今池地区で巨大な掘立柱建物跡が検出され（坂井他1984），隣接する本長者原地区で寺院遺構の存在も推定されている（坂井1983，小島1984）ことから，この地域に対する関心が高まっている。古代における春日山周辺では，水門（みなと）駅と居多（こた）神社も注目される。水門駅は『延喜式』に記され，馬5疋が置かれていた。所在は直江津に比定され，その名の通り湊としての機能を有し，国府の外港としての役割も担っていたと推定される。居多神社は貞観3年（861）に従四位下を授かったことが『三代実録』に記され，居多神社文書「神祈権大副ト部兼員宿祢勘状」に弘仁3年（813・寛平9年（897）の昇叙を記す。のちには弥彦神社とともに，越後一の宮を称するようになるが，古代において国司の保護をうけた神社と推定される。

B　上杉氏と春日山の動向

文治元年（1185），越後国は源頼朝の知行国となり，甲斐源氏の安田義資が越後守に任ぜられた。そして承久の乱がおこると北条朝時が国府に入り，小国頼継・会津資義らを率いて京に向った。朝時以後，越後国は北条氏一門によって世襲的に支配されていった。

鎌倉幕府滅亡後は新田義貞が越後守に任ぜられた。しかしまもなく足利尊氏が自立すると，上杉憲顕が越後守護に任ぜられた。観応の擾乱に際して，上杉憲顕は足利直義側に立ったが，尊氏の死後，再び関東管領，上野・越後の守護に任ぜられた。これを支えたのが長尾高景であり，ここに越後における上杉氏および長尾氏の基盤がつくられてゆく（井上1970）。その創始については諸説あるが，「長尾系図」には高景が上杉憲方の子房正を新守護として迎え，自身は鉢ヶ峰（春日山城）に住したと記す（『越史』2）。永正4年（1507），長尾為景は上杉定実を擁して守護上杉房能を天水越えで滅ぼした。その後関東管領上杉顕定が報復のために進入すると，一旦は越中にのがれたものの，永正7年には顕定を長森原で破り，実質的に国主の座を獲得した。このころに春日山の要害化もはかられた（註2）。永正10年，定実の実家の上条定憲や宇佐美房忠が挙兵すると，定実は府内を出て春日山にたてこもったが，この時宇佐美を攻囲していた為景は即刻帰城し，定実を自らの館に幽閉した。これについて伊藤正一氏は，「上杉定実の春日山城占拠は，これを根拠と定めた為景をして（中略）急拠帰城せしめるだけの脅威だったのであろう」とする（伊藤1966）。為景のあと，晴景・景虎（謙信）と続くが，上杉定実没後名実ともに国主の座につき，弘治3年（1557），関東管領上杉憲政から上杉家の家督を譲られた。この謙信の

時代に春日山城及び城下の充実がはかられた。以下，記録に残る主なできごとを列挙してみると次のようになる。

(1) 永禄3年(1560) 8月　関東出陣に際して，桃井右馬助ら5人の留将に春日山要害の普請を怠りなく行い，万一のことがおこった場合は頸城郡の地下人を春日山城に入れることなどを命じた（『越史』4）。

(2) 永禄5年（1562）2月　関東から，府内・春日町の火の用心，春日山城の普請などを命じた（『越史』4）。

(3) 永禄7年(1564) 3月　武田信玄が国境に迫ったとの報に接して，関東から，春日山城の普請と「しものくら」に置いた代物を実城に移すことを命じた（『越史』4）。これについて小村弐氏は，「従前は山麓根小屋の地に武器弾薬食糧などを収めた倉庫があったこと，ひいては居館の存在をも推定できる。そしてこの時，本丸を中心に倉や屋敷が建ち，山麓の物資が山上に移されたのである」とする（小村1983)。

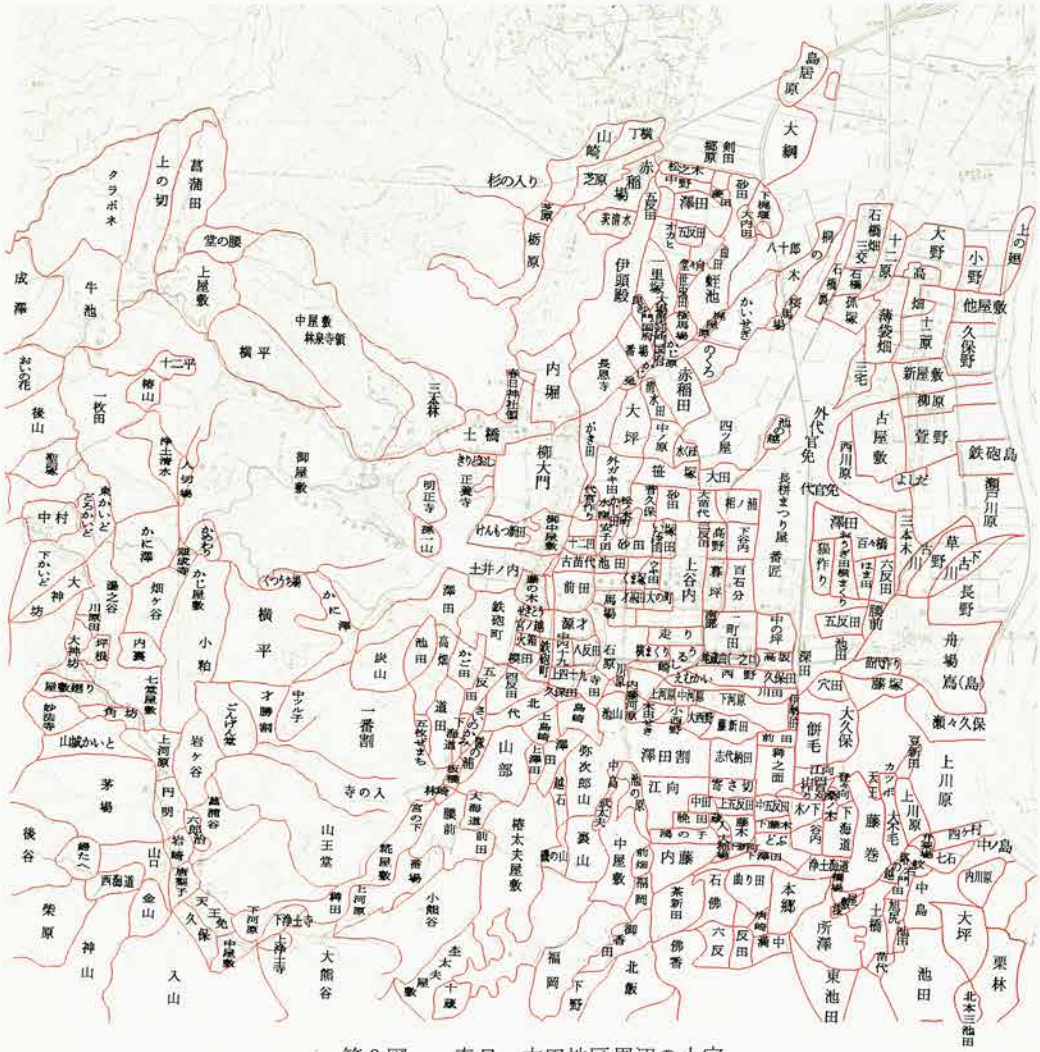
(4) 同年8月　信玄と対陣中の信濃から，府内・春日町の火の用心と大門・大手門の造営（もしくは普請）を命じた（『越史』4）。大門・大手門は古絵図にみえる千貫門・黒金門のことであろうか。

(5) 元亀元年(1570) 3月　北条氏秀を養子(景虎と改名)にむかえ，二の丸に置いた(『越史』5)。

(6) 天正元年（1573）5月　関東出陣に際して，「みちやうハ申におよはす，二のくるわ，三のくるわまで，へいに申つけへく候」として（『越史』5），春日山城強化のために塀普請を命じた。

謙信の死後，御館の乱を経て景勝が支配するようになるが，慶長2年(1597) 2月，山田雅楽助を普請奉行として「春日山御城普請，黒上・岩備其外少給人迄，百石ニ付而五人役之分ニ申付」，「所々御門橋以下破損之所」の修築を行わせた（『越史』稿本)。そして景勝移封後春日山城に入った堀秀治の時代に，矢倉などの普請が行われ（『越史』稿本），「監物堀（けんもつぼり）」も掘られた。しかし堀氏はまもなく福島城を築き，さらに松平忠輝が高田城を築くと政治の中心は春日山を離れた。

春日山城下町として春日町があったことは上のいくつかの記事によって知られる。そしてそれが塀で囲まれていたことは，天正10年正月，上条宜順が直江兼続にあてた書状に「春日町などをも如前々屏被成御付」とある（『上杉家文書之二』）ことによって推測される。春日町は春日神社を中心にした地域に比定され，その居住者については「景勝の直臣団すなわち五十騎衆・長柄衆・御手明衆・春日山城諸役方衆を考えなければならない」といわれる（小村1983)。春日町以外については，本願寺教如が越後府内講中にあてた礼状の中に，大町・春日・中屋敷・井ゝ村・ツチハシ・アヤノ小路・ヤスイ・日本小路の8地名が記されているのが注目される（浄興寺文書)。最初の5つのうち，大町は北国街道と春日山・木田を結ぶラインの交点にある字大ノ町と推定されており，他の4つは大字として名をとどめている（註3)。そして中屋敷は御館の乱で戦場となった所（『越史』5）であり，その中心の字御中屋敷は謙信の館跡とも伝えられてい



第３図　　春日，木田地区周辺の小字
（『高田市文化財調査報告書第８集』春日山城下地名より転載）

る（中沢1966ａ）。なお，鉄砲町は天和３年（1683）の検地帳にみえるものの，上杉時代に由来するものか堀氏時代のものか定かではないという（小村1983）。このほか，御館の乱で木田も戦場になったが，天正６年６月には武田勝頼がこの方面に進出し（註４），景勝と景虎の和解をはかった（『越史』５）。ここは交通上の要衝で，府内からは「大字轟木・高畠・石橋・薄袋（すすきぶくろ）を通って木田に入り，ここで春日山下の中屋敷からの道とまじわり，さらに南方藤巻を経て」信濃に向った（中沢1966ｂ）。また字船場島に「木田渡」があったと推定され（中沢1964），ここを経て関東への道が通じていた。四ツ屋には景勝方の付城があったが，天正７年，上杉憲政が守兵によって殺されている（『越史』５）。文献にみえる春日山城及びその周辺の動向の概要は以上である。これと一連の発掘調査の結果がどうかわるかは，今後慎重な検討が必要となろう（註５）。

第II章　発　掘　調　査

第1節　調査に至る経過

北陸自動車道は総延長480kmに及ぶもので，起点を新潟市におき，日本海沿岸の新潟・富山・石川・福井の各県を経由し滋賀県米原町で名神高速道に接続する一大高速自動車道である。この路線は各県の主要都市を連絡し，さらに関西方面に直結させるものであり，関連する地区はもとより地域の開発促進に係る役割はきわめて大きいものがある。

昭和45年8月，この一大事業に対して文化財保護部局である県教育委員会は在地研究者に依頼して，新潟から長岡間の埋蔵文化財包蔵地の調査を行った。長岡から上越までの区間の埋蔵文化財については昭和46年1月20日付で在地研究者である室岡博，中村考三郎，金子拓男，花ヶ前盛明の各氏に自動車道建設及びそれに係る可能性のある遺跡について現況調査を依頼し文書による回答を提出してもらった。上越市（当時，直江津市・高田市）を担当した花ヶ前氏はこのなかで15遺跡を報告している。

昭和48年4月25日，長岡から上越までの路線発表があり，県教育委員会は逐次遺跡の分布調査を実施した。上越市については国指定史跡春日山城跡が関連することになり，その取扱について昭和52年7月12日，53年3月27日，4月18日，7月11日，54年4月18日，6月11日に県教育委員会は日本道路公団と協議し，路線や施工方法等について話を進め，保護に万全を期した。

春日山城に係ることが予想された法線近接の通称御馬山地区が昭和55年上越市教育委員会によって発掘されたが，遺構等の存在は確認されなかった。また，平地部については，法線内の宅造地域及び法線に近い畑地の一部が試掘され，後者からは古代・中世の遺物が出土した。また，この調査期間中に随時行なわれた付近の遺跡分布調査によって，法線内の岩木地区から木田地区までの畑地の大部分には古代・中世の土器類が散布していることが知られるに至った。この地区にはまた鉄砲町，一之口等中世の民衆生活に由来すると考えられる小字名が散見されることは，研究者からつとに指摘されていたところでもあった。このように，現在の微高地には土器類が散布している事実及び文献上の研究成果等の考察から，この地区一帯は微高地はもとより，現在畑地として使用されている地域にも遺物，遺構が埋在していることが想定されるに至ったのである。そこで，昭和56年2月2日の協議で「春日山城の本城は解決したが，山地から木田部落までの平地は調査が必要である」旨県教育委員会が提示し，同年10月1日の協議で「春日山城下の調査を実施してほしい」との依頼が日本道路公団から出され，昭和57年2月10日付で昭和57年度発掘調査遺跡として文書依頼された。昭和57年8月12日，県教育委員会は日本道路公団上越工事々務所庶務課長，同担当工事長と現地で立合い協議し，調査方法，面積等について打合わせを行い，調査用基準杭打設を指示した。調査は法線内の微高地で土器散布の多い中屋敷地区の畑地一帯を発掘調査し，同時に調査期間内に木田地区北端から春日山城の

山地までの法線内全地域の試掘を実施することとし，８月23日から11月６日までを調査期間とした。

第２節　調査の経過

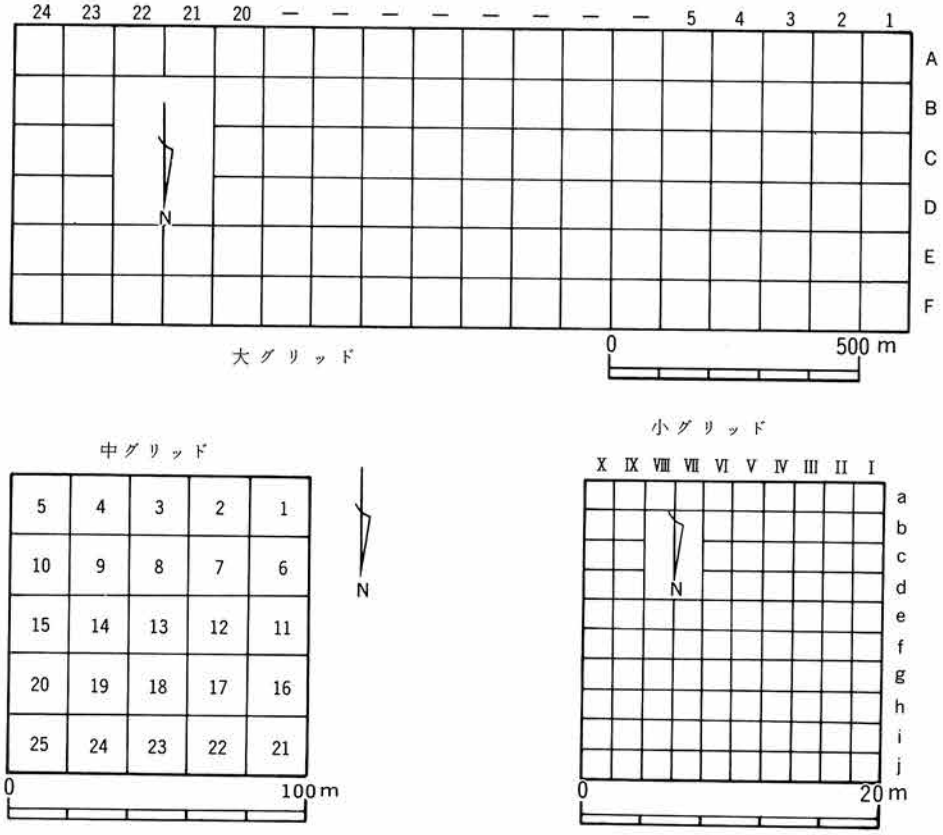
上越市春日・木田地区における北陸自動車道法線内の発掘調査(昭和57年度分)は，昭和57年８月23日～同年11月６日までの延55日間にわたって行われた。発掘範囲は広大で，丘陵・自然堤防・沖積地と地形的にも変化に富んでいた。また今回の調査では人力のほかにバックホーなども投入して発掘の効率化に努めた。調査の具体的な経過は下記に示すとおりである。

８月23日午後，調査員３名が発掘機材を伴い到着する。機材整理後，日本道路公団上越工事々務所（以下工事々務所とする）へ，調査開始のあいさつに出向いた。24日，係長が来跡し，発掘方法と安全管理について指示を行った。発掘方法については，トレンチ幅はバックホーの法面バケットの３倍とし，中央を深くすること(図版２の下)。発掘深度は１～1.2mとし，20mおきに深掘りを行い，柱状図を作成すること。遺跡でないと判断した箇所は直ちに公団に引き渡すことの３点であり，安全管理については，トレンチにそって長さ２mの単管パイプを打設し，それに虎縄を三段に張り廻らす等々であった。また同日，調査員２名が遺跡周辺の表面採集，微地形・植生・地表の傾斜観察を行った。８月25日，遺跡の分布及び範囲確認のための発掘（以下試掘調査とする）を開始する。バックホーで16Dから発掘に着手する。９月１日，発掘が自然堤防上に及んだため，作業員を投入してグリッド発掘も開始する。９月３日，発掘が13ＣＤまで及び，16D～13ＣＤまでの間がほとんど遺跡であることが確認された。９月20日，調査の進ちよく状況から記録保存を前提とした本年度分の調査（以下本調査とする）は，予定どおり10月から開始できる旨を本庁に連絡する。９月21日，係長が来跡し，発掘状況を視察した後調査員と内部協議を行った。協議の結果，本調査区域は中屋敷地区(14D)とし，調査期間は10月の第２週から11月10日頃までということで決定をみた。９月29日，本庁から，確認された各遺跡の名称を決定し，遺跡の範囲は1,000分の１の図面に明示せよとの指示があった。遺跡の名称は，小字又は大字を用いて木田遺跡・池田遺跡・一之口遺跡・八反田遺跡・鉄砲町遺跡・高畑遺跡と呼称した。10月５日，春日・木田地区の試掘調査の結果を工事々務所に提示し，先行盛土がされている信越線両脇の地区にも遺跡が広がる可能性が生じたため，試掘調査を行いたいとの希望を工事々務所に伝えた。工事々務所からは了承したとの回答を得たが，木田高架工事区で摩擦杭鉛直載下試験を行いたいので，約220m²の範囲を11月中に本調査して欲しい，高畑地区の調査は来年度にしてもらいたいとの要望も出された。内部協議の結果要望を満たすことに決定した。10月６日，中屋敷地区（14D）での本調査を開始する。この調査では畝状遺構・掘立柱建物跡などが検出されたが11月４日に終了した。10月７日，信越線西側の盛土部分に，19ヵ所の試掘グリッドを設定し，10月12日には同線東側の盛土部分の確認調査も開始する。西側12ヵ所のグリッドからは古式土師器を主体とした遺物が，東側からは少量であるが確実に遺物が出土した。10月18日，木田高架工事摩擦杭鉛直載下試験地区(22E11)の本調査を開始する。この調

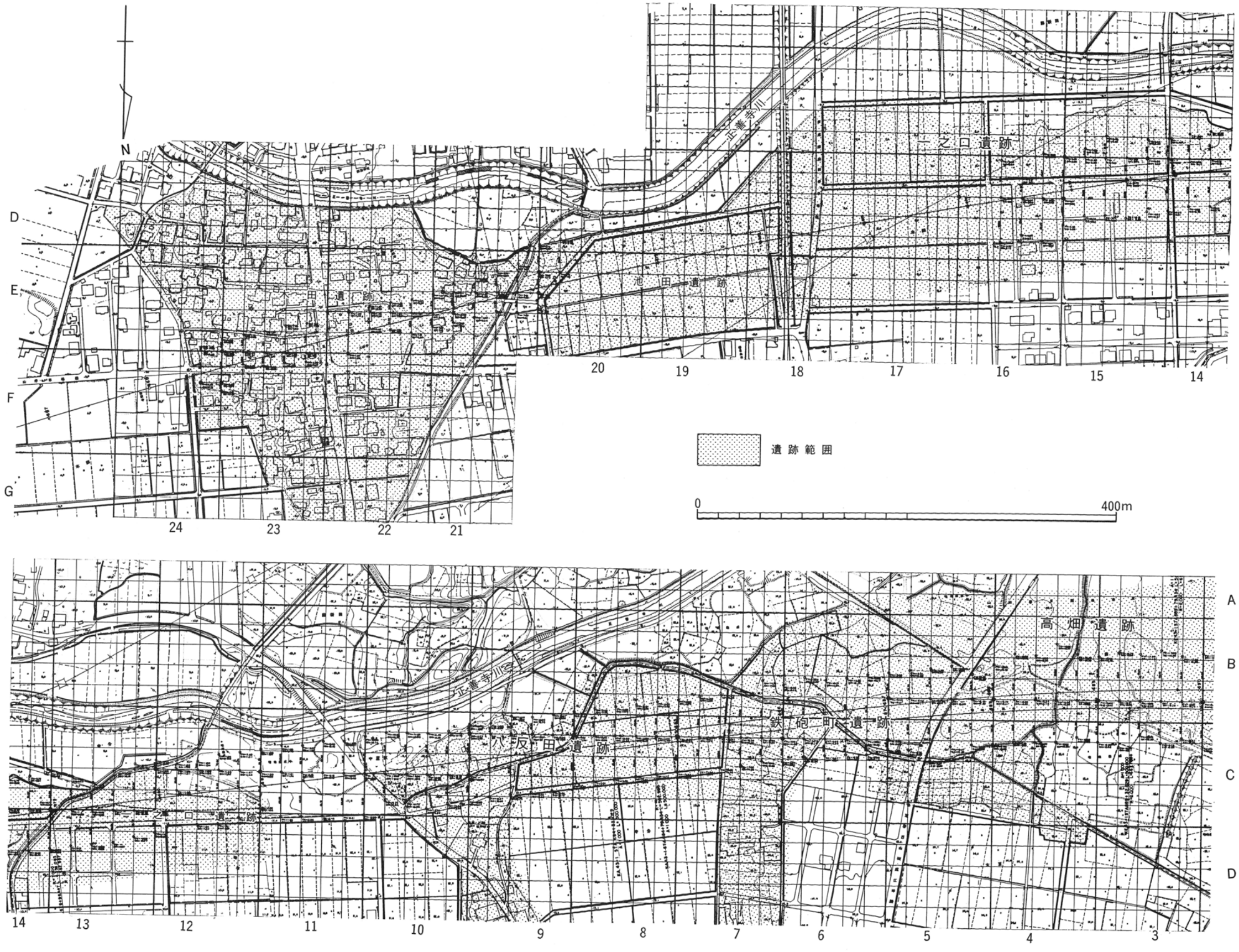
査は荒天に悩まされながらも11月6日終了し，この時点で今年度の現地作業を完了する。

第3節　グリッドの設定と確認調査の方法

本調査は，北陸自動車道木田・春日山トンネル工事区における遺跡の記録保存と遺跡存在の有無及びその範囲確認のため実施した。グリッドは，自動車道センター杭STA679を基準にし，南西端に原点を置き，東西をx軸・南北をy軸とした。しかし，調査対称範囲が南北70m・東西2,200mあまりと広大なため，グリッドを大・中・小に区分した。大グリッドは100m×100mを1区画とし，西から東へ1・2……24，南から北へA・B……Fとした（第4図上）。中グリッドは20m×20mを1区画とし，大グリッドの南西すみを1，北東のすみを25とした(第4図左下)。小グリッドは2m×2mを1区画とし，中グリッドの西から東へI・II……X，南から北へa・b……jとした（第4図右下)。そして5D15Vfのように呼称し，大・中・小グリッドの順で表示したが，表示方法が煩雑になり，遺物整理の注記作業で不都合が生じた。確認調査はトレンチ発掘とグリッド発掘を併用して行った。トレンチ発掘では法面バケット着装のバックホーを用い，幅2mのトレンチを階段状に発掘した(図版2下)。グリッド発掘では原則として100m²に4m²の割合で試掘グリッドを設定し，人力で発掘を行った（図版1下)。そして遺物が出土又は遺構が検出(図版3）された時点で遺跡と認定して発掘を停止した。しかしその結果，沖積地な



第4図　　グリッド表示方法


N
D
E
F
G
24
23
22
21
20
19
18
17
16
15
14
正善寺川
一之口遺跡
池田遺跡
遺跡
遺跡範囲
0
400m
A
B
C
D
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
高畑遺跡
鉄砲町遺跡
八反田遺跡
一之口遺跡

第5図　グリット設定図

どで最も重要とされている層序の把握が不充分となり，その後の調査に支障をきたした。

第4節　層　　序

春日山地区における試掘調査の範囲は，正善寺川左岸に位置し，南北約70m（高速道法線幅），東西約2,200mで延面積は約154,000m²にのぼった。標高は約7m～約17m測り，その比高は約10mである。地形も西から東へと傾斜し沖積―丘陵―沖積―段丘？―沖積―段丘―沖積―自然堤防―沖積―自然堤防と目まぐるしい変化を示している。土層は，色調・粘性・含有物・出土遺物の観点から0からⅦまでの8層に分層を行った（第4図）。しかし今後，各遺跡の発掘調査が進むにしたがい，さらに層序の細分や訂正がなされる可能性が大きいことから，本節ではその概略説明にとどめておきたい。各層の概略は下記のとおりである。

0層――黄褐色又褐色の粘質土，礫・ビニール・金属製品等が含まれている場合もある。

Ⅰ層――黒褐色又は暗灰色の粘質土，近世陶磁器が出土することもある。

Ⅱ層――灰黄褐色の粘質土，近世陶磁器が出土する。

Ⅲ層――青灰色又は黄褐色の砂質土，洪水堆積物とも考えられる。中世陶磁器が出土する。

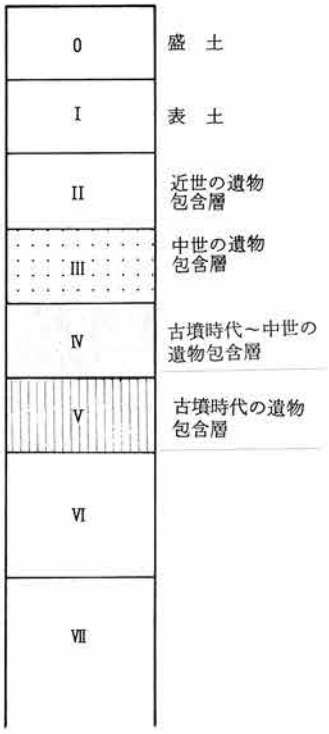
Ⅳ層――黒褐色又は黄灰色の粘質土，ところにより炭化物の含有が目立つ。奈良・平安時代の遺物が出土する。

Ⅴ層――暗茶褐色の粘質土，Ⅳ層よりも粘性は強く，炭化物を含有する。古墳時代の遺物が出土する。

Ⅵ層――黄褐色の粘質土，Ⅱ層よりも粘性が強い。

Ⅶ層――青灰色の粘質土，場所によってはシルト質に変化する。縄文晩期の土器が出土している。Ⅵ層が還元されたものである。

このように，8層に分層を行ったが，0層は宅地・畑地造成のために近・現代に行なわれた盛土。Ⅰ層は表土。Ⅱ層は近世，Ⅲ層は中世，Ⅳ層は古代，Ⅴ層は古墳時代の遺物包含層である。Ⅶ層からは縄文晩期の土器が出土しているが一個体のため遺物包含層とするか否かは今後の調査を待ちたい。Ⅵ層からは遺物は出土していない。しかし今後の調査によって遺物が出土する可能性が充分ふくまれている。



第6図　　基本層序模式図

第5節　確認された遺跡

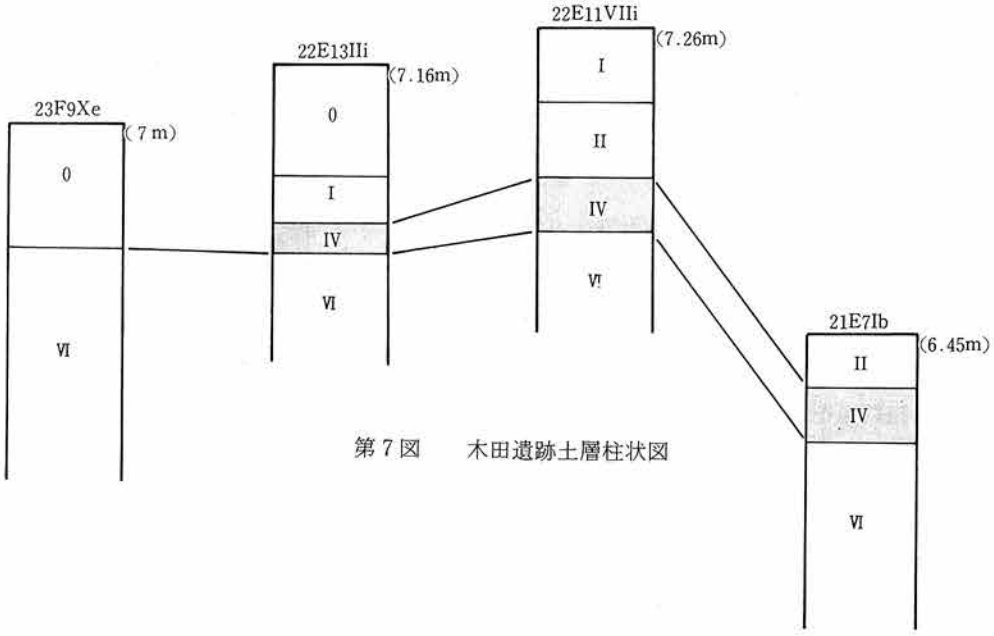
A　木田遺跡

木田遺跡は，上越市大字木田字苗代割1530番地ほかに所在し，現状は住宅地で，おそらく関川によって形成されたと考えられる自然堤防上に立地する。遺跡の範囲(註6)は東西約300m・南北約30～60mで面積は約12,000m²である。トレンチは5ヵ所に設定し，発掘面積は1,200m²におよんだ。

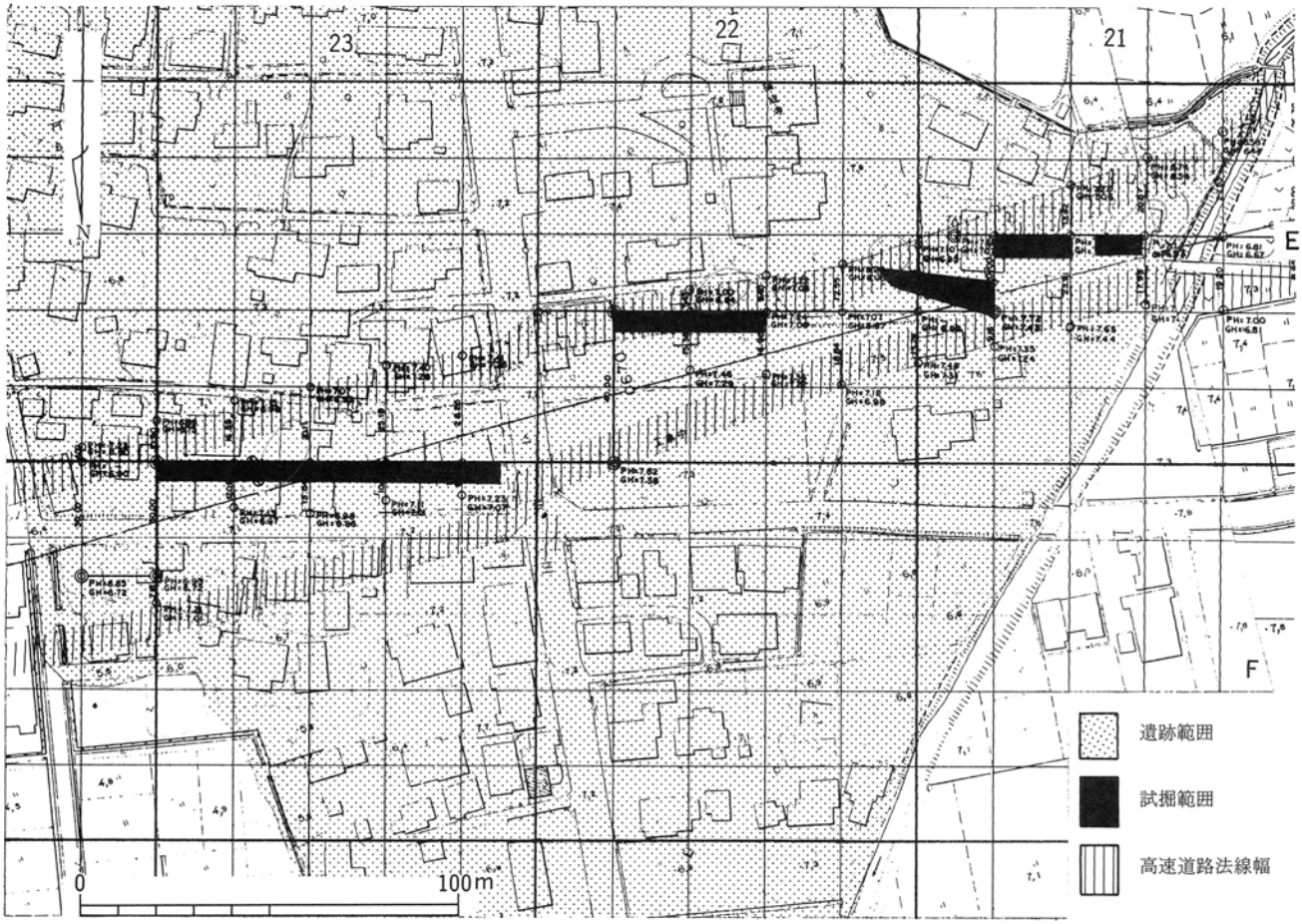
層序（第7図）は0・I・II・IV・VIの5層からなる。II層は灰黄褐色を呈し，近世陶磁器を包含することもある。同層は22E11VIIi及び21E7Ib付近では確認されたが22E13IIiや23F9Xe付近では認められなかった。IV層は黒褐色又は黄灰色を呈し，古代・中世の遺物が包含されていたが，23F9Xe付近では確認されなかった。VI層は黄褐色を呈し，上面で遺構が明りょうに検出された。遺構としては，溝・ピット・井戸などが確認され，土師器・須恵器・中・近世陶磁器など下記のような遺物も出土していることから古代～近世にかけての集落跡の可能性がうかがえる。

出土遺物（第9図，図版4）

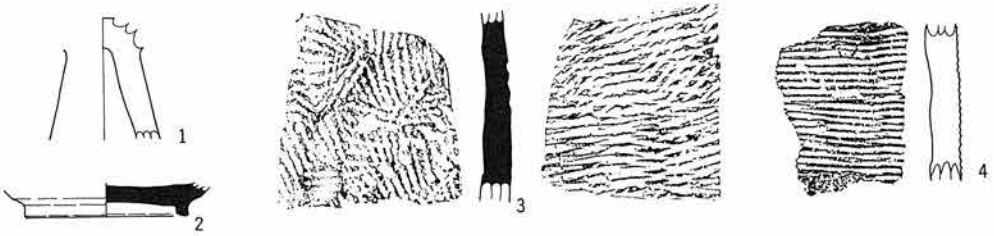
第9図1は土師器高坏の脚部で，茶色を呈し，焼成は良好であるが，器の表裏面の磨滅が著しく器面調整は不明である。2は須恵器の有台坏の底部破片で，焼成は良好である。底部の切り離しは回転糸切りである。3は須恵器の甕の胴部破片で，内・外面に叩きがみられ，内面の叩きは放射状である。4は珠洲系陶器の甕の胴部破片である。図版4—15は伊万里焼の小皿の底部破片で17世紀前半に比定される。



第7図　木田遺跡土層柱状図



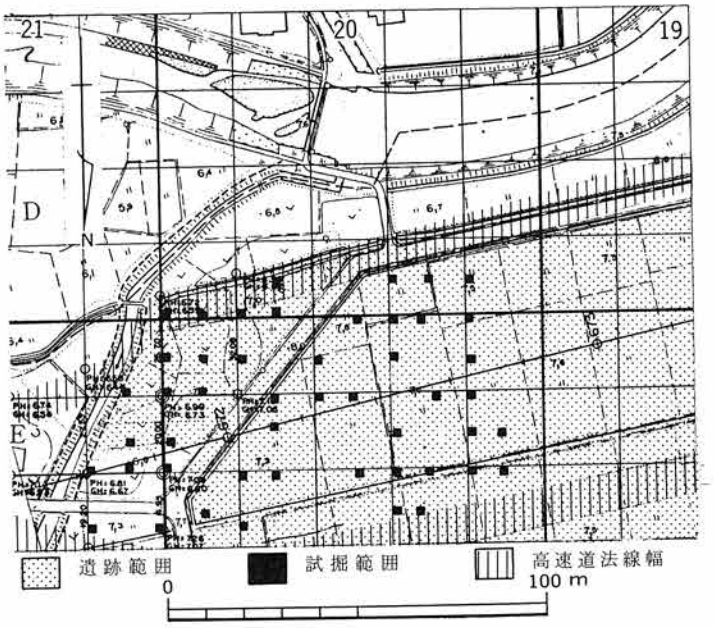
第８図　　木田遺跡試掘範囲



第9図　木田遺跡出土遺物（1/3）

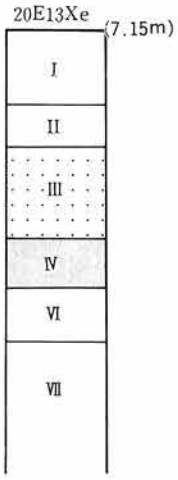
B 池 田 遺 跡

池田遺跡は，上越市大字木田字池田1238番地ほかに所在し，現状は畑地及び水田で，正善寺川によって段丘化しつつある沖積地に立地する。標高は約7mを測り，範囲は東西約240m・南北約70mで，面積は約15,000m²である。試掘グリッドは48ヶ所に設定し，発掘総面積は192m²である。なお，今回の調査では遺跡北限の推定は不可能であった。



第10図　池田遺跡試掘範囲

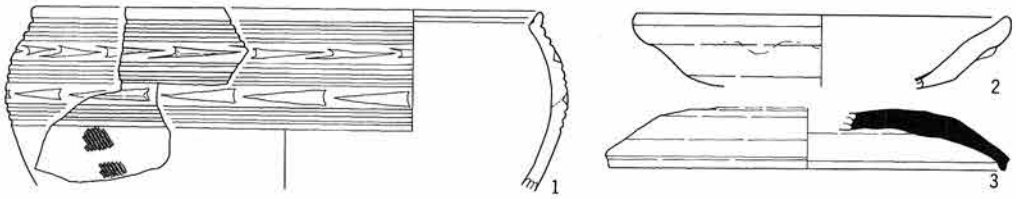
層序（第11図）は，Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅶの6層からなり，Ⅲ層は青灰色を，Ⅳ層は灰色を帯びた黒褐色を呈する。Ⅳ層には古代の遺物が包含されていた。Ⅵ層は灰色を帯びた黄褐色を呈し，Ⅶ層からは縄文晩期の土器が一個体出土した。遺構は検出されなかったが，下記のような縄文晩期の土器・土師器・須恵器・中世陶器が出土していることから縄文晩期・古代・中世の遺物包含地と考えられる。



第11図　池田遺跡土層柱状図（1/30）

出土遺物（第12図，図版4）

第12図1（図版4－3）は，20E12Xaから出土した縄文晩期後半の鉢で，口径20cmと推定される。口縁部には9条の沈線が巡り，その3条目と4条目の間と6条目と7条目の間に三叉状の文様が施されている。外面は赤褐色を呈し，内面には炭化物がおこげ状に付着している。3は20E5Xeから出土した須恵器の坏蓋で，口径16cmと推定される。器面全体にロクロナデによる調整がなされている。2は20E13Vaから出土した古瀬戸系施釉陶



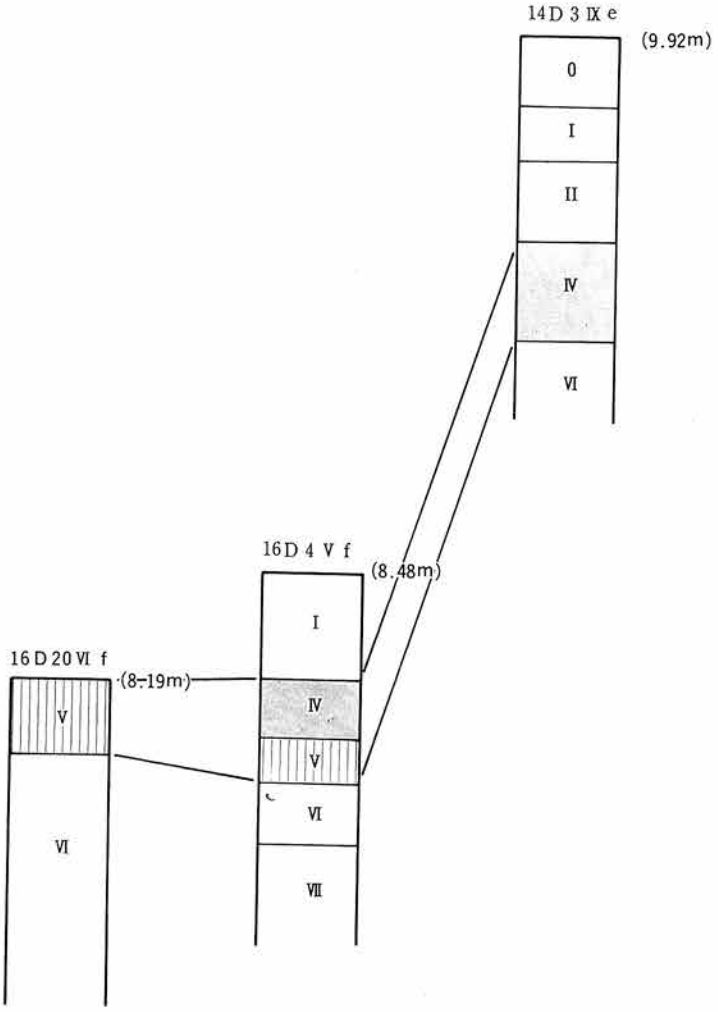
第12図　池田遺跡出土遺物（1・3は1/3　2は1/2）

器の縁釉皿である。口縁はやや外反し，口径10cm・器高2cmと推定され内面及び口縁部外面に施釉されている。15世紀に比定される。

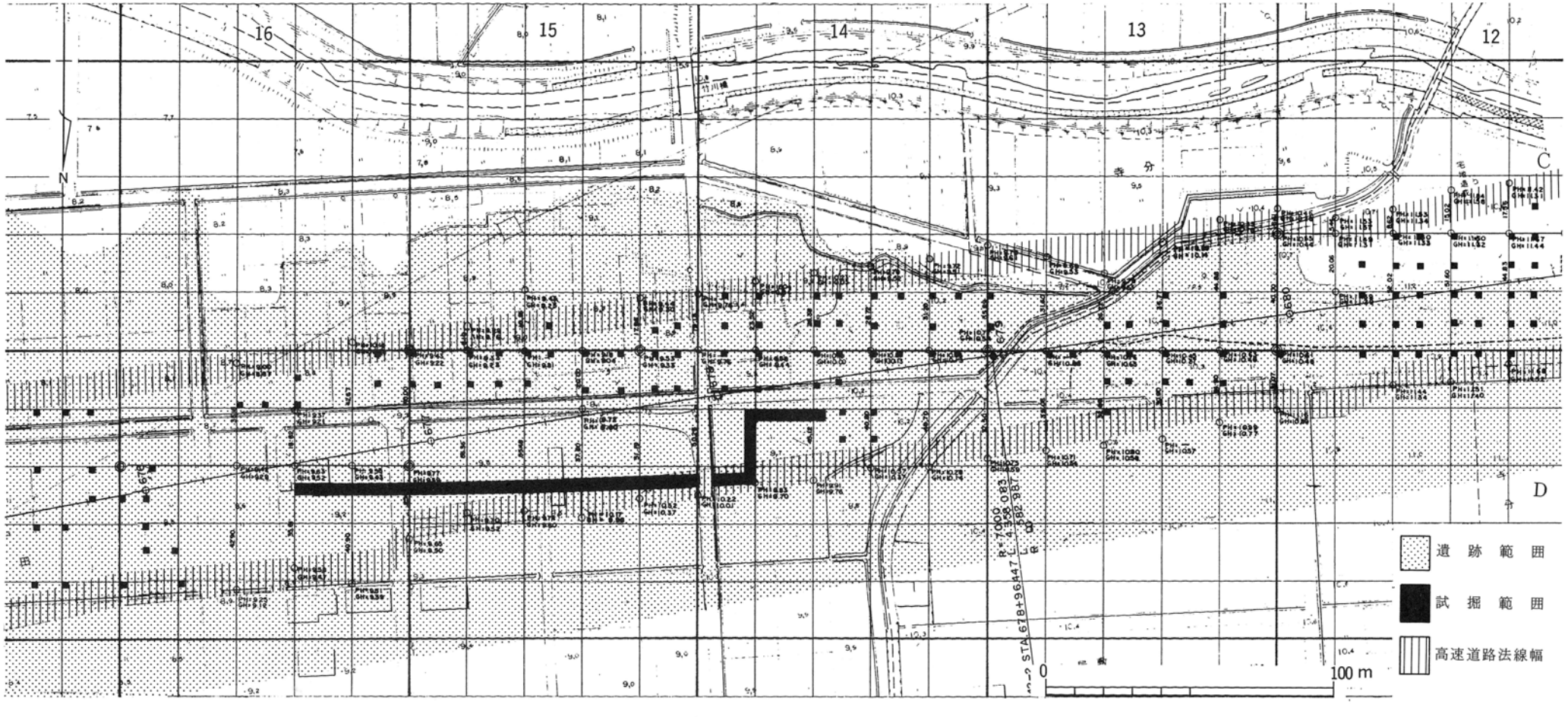
C　一之口遺跡

本遺跡は上越市大字木田字一之口988―2番地ほかに所在し，現状は宅地・畑地・水田で，正善寺川によって段丘化しつつある沖積面及び正善寺川によって形成された自然堤防上に立地する。標高は8～10mを測り，範囲は東西約600m，南北約70mで面積は約46,000m²である。なお，今回の調査では遺跡の北限の推定は不可能で，東限は池田遺跡と接するものと推定される。設定した試掘グリッド及びトレンチは73ヶ所で，発掘面積は908m²である。

層序（第13図）は0・I・II・IV・V・VI・VIIの7層からなる。IV層は遺跡東側では黒褐色，西側では黄灰色を呈し，奈良・平安時代の遺物を包含する。V層は暗茶褐色を呈し，古墳時代の遺物を包含する。明確な遺構は確認されなかったが，下記のような古式土師



第13図　一之口遺跡土層柱状図（1/30）

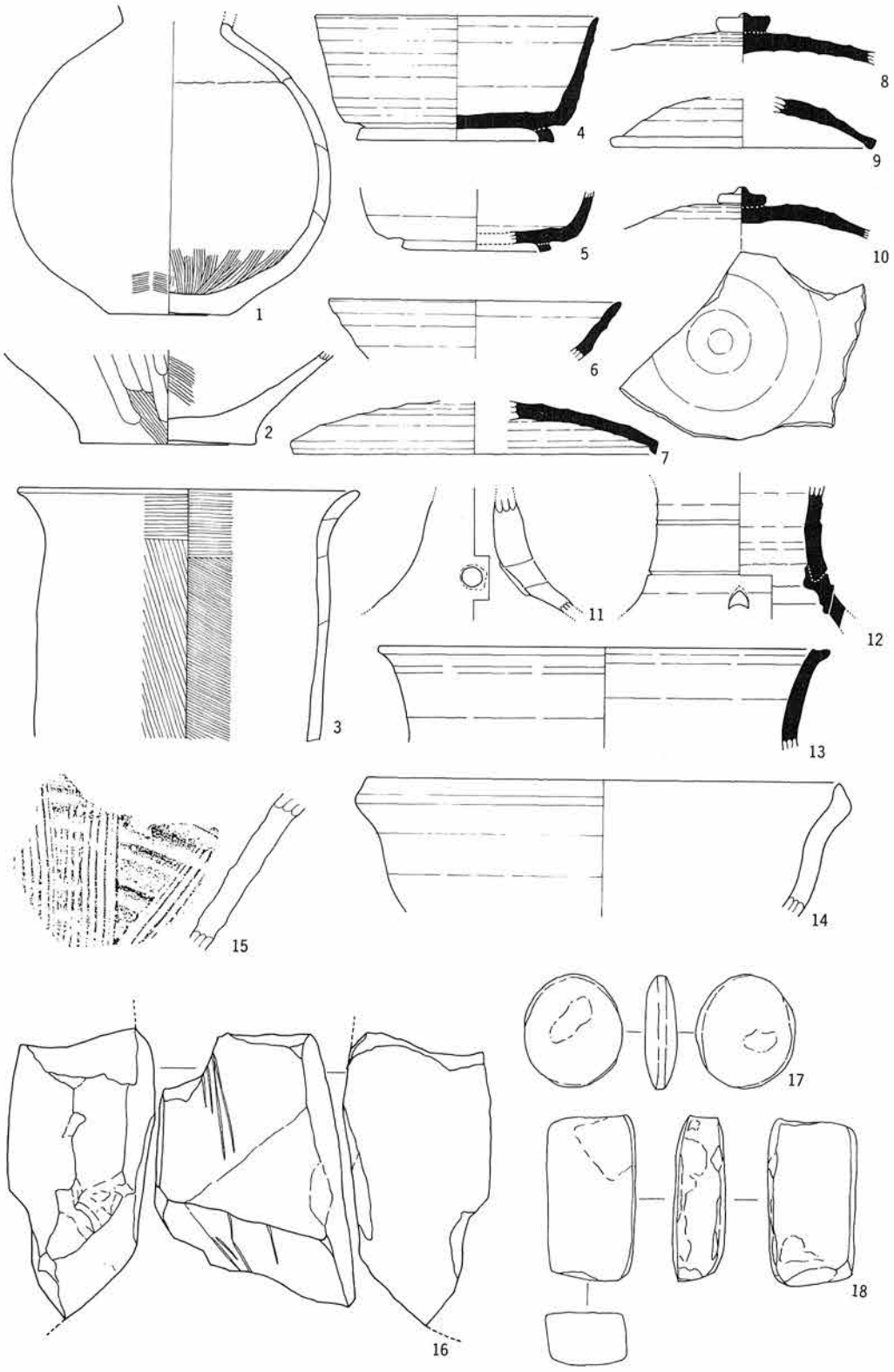


第14図　一之口遺跡試掘範囲

器・土師器・須恵器・中世陶器等が出土していることから古墳時代～中世の遺物包含地と考えられ，遺構の存在も十分に予想される。

出土遺物（第15図，図版４）

第15図１・２は16D14Xaから出土した古式土師器の壺の胴部及び底部破片で，１の胴部最大径は14.5cmで，下半に位置する。底径は5.4cmと８cmである。両者とも外面は刷毛目調整後篦磨き，内面は刷毛目調整がなされ，胎土には砂を多く含んでいる。11は古式土師器の器台又は高坏の脚部で，円形の透しが３ヵ所に穿かれている。器面は磨滅が著しく，調整は不明であるが，胎土は灰白色を呈し緻密で，焼成は良好である。４・５は14D15Vfと16D15Vfから出土した須恵器の有台坏である。４は口径12.8cm・底径8.8cm・器高5.7cm，５は底径6.7cmと推定される。４の底部には回転糸切り痕が，内外面にはロクロナデによる調整痕が認められる。６は14D3Vabから出土した須恵器の坏で，口径は13.2cmと推定される。色調は青味を帯びた灰褐色を呈するが，口縁部及び口唇部は明褐色である。７・10は14D3Vab，８は14D5Vb，９は14D5Vfから出土した須恵器の坏蓋である。７・９は口径16.6cmと12.2cmと推定され，７の縁部及び端部は屈曲せずに尖っているが，９のそれは屈曲し，丸くなっている。８も中央部と縁部が突出したつまみをもち，裏面には墨又は炭化物の付着痕がみられた。10は偏平で中央が突出するつまみをもち，裏面には墨のかすかな付着痕と中央部には磨滅痕がみられる。また，表面にも焼成後に加えられた擦れなどで生じたと思われる痕跡が丸く円を描くように認められることから，坏蓋転用の硯と考えられる。12(図版４－４)は14D5Vbから出土し，須恵器と考えられるが，瓦質土器ではないかとの指摘もなされている。器形も不明で，表面には３条の沈線が巡り，その下方には長円形の透しが穿孔され，裏面では粘土帯がひさし状に突出している。内・外面ともロクロナデによる調整がなされ，色調は灰白色を呈し，胎土には細い砂を含み，焼成は良好である。13は14D3IXabから出土した須恵器の甕の口縁部破片で，口径は20.6cmと推定される。14は16D2Xfから出土した土師器の鍋で，口径23cmと推定される。口縁は直立し，頸部はややくびれている。胴部にはカキ目調整が施され，外面には煤が付着している。３は15D２IXaから出土した土師器の甕で，口径は16cmと推定される。口縁は外反し，長胴で，表・裏面全体に刷毛目調整がなされている。色調は灰白色を呈し，焼成は良好で，胎土のきめは細かいが黒っぽい小礫を含んでいる。15は珠洲系陶器の擂鉢片で卸し目は８条１単位である。色調は灰色を呈し，焼成は良好で，胎土中に小礫を含んでいる。16・18（図版４－21）は14C23IXaと15D15から出土した凝灰岩製の砥石である。16は18よりも大形の砥石の破片で，側面には磨滅痕とは別に断面Ｖ字状で，幅が狭い擦痕がみられる。色調がやや赤味を帯びた灰白色を呈しているのは，火熱をうけたためであろう。18は完形で，縦５cm・横2.7cm・厚さ1.6cmの直方体をなし，重量は40gを測る。色調は浅い黄色を呈し，測面と上面にはタール状の炭化物が付着している。17（図版４－９）は15C23Xfから出土した用途不明の石製品である。長径3.5cm・短径３cm・厚さ１cm・重さ15.4gを測り，表面に擦痕と打痕，側面に擦痕が認められる。石質は不明で灰白色を呈している。



第15図　一之口遺跡出土遺物（1～15は1/3、16～18は1/2）

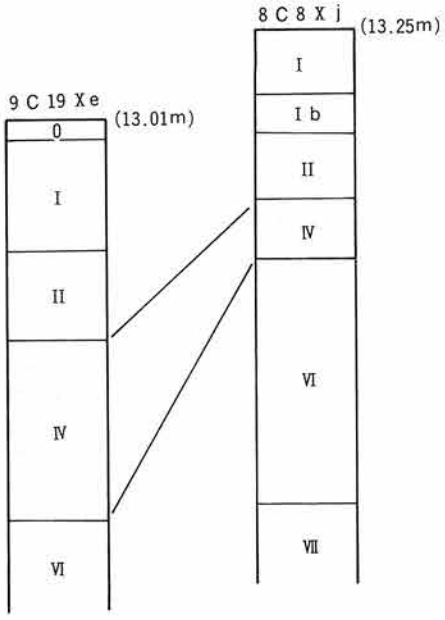
D　八反田遺跡

八反田遺跡は上越市大字寺分字寺田1521番地ほかに所在し，現状は宅地・畑地・水田で，段丘上や正善寺川によって段丘化しつつある沖積地に立地する。標高は12～14mを測り，遺跡の範囲は東西約330m・南北約70mで面積は23,000m²である。トレンチ及び試掘グリッドは107箇所に設定し，発掘面積は2,093m²である。なお，遺跡は法線外にも広がっている。遺跡の南限は自然堤防上では堤防がとぎれるまでと考えられるが，沖積地では推定不可能であった。しかし，法線の南側に遺跡がのびることは確実である。

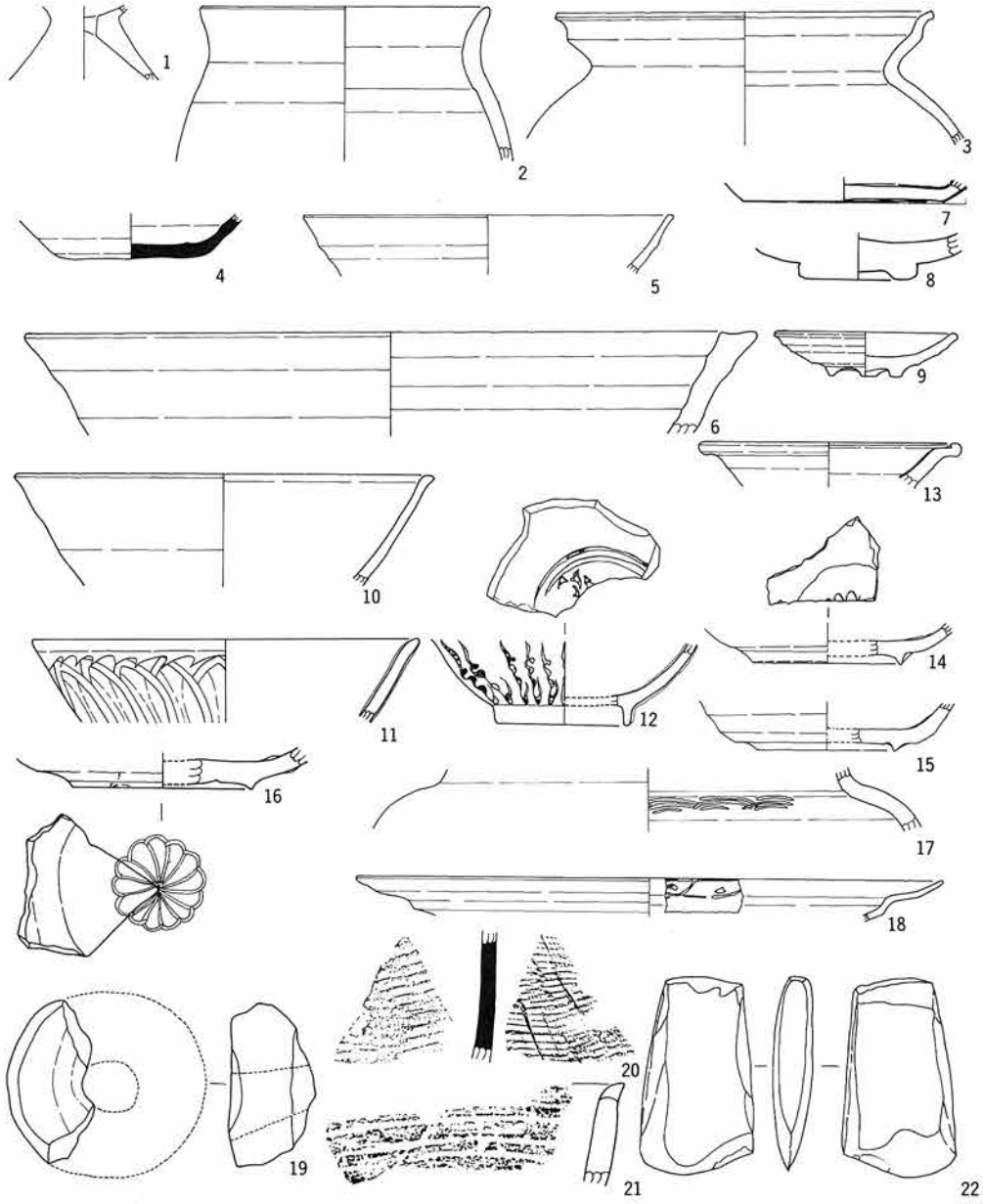
層序（第17図）は0・Ⅰ・Ⅰb・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅶの7層からなっている。Ⅰb層は黄色を帯びた黒褐色を呈する。Ⅳ層は黄灰色で，遺物包含層と考えられる。遺構は確認されなかったが，縄文土器・古式土師器・須恵器・中・近世陶磁器などが出土していることから，縄文時代・古墳時代～近世にかけての遺物包含地と考えられる。

出土遺物（第18図，図版4）

第18図21（図版4－1）は9C15Ⅸfから出土した縄文土器の深鉢の口縁部破片である。口唇部に小突起を持ち，断面V字形の細い沈線が四条認められる。胎土は赤茶色を呈し，白っぽい細礫を含んでいる。22（図版4－20）は10C11Ⅸfから出土した蛇文岩製の小形磨製石斧である。長さ5.6cm・刃部幅3.2cm・厚さ1.1cm・重さ36.4gを測り，刃部は両刃の斜刃である。1は器台の台部と脚部の接合部分である。色調は灰褐色を呈し，胎土には細かい砂を含み，焼成は良好である。2は口縁が外弯し，頸部がややくびれ，胴部が張り出す甕である。口径は12cmと推定され，頸部内面に刷毛目調整がみられる。しかし，他の箇所は器面の風化が著しく，詳細は不明である。色調は赤褐色を呈し，胎土には砂を多く含んでいる。3は口縁部に有段状の稜線をもち，頸部がくびれ，胴部が張り出す甕である。口径16cmと推定され，口縁部にタール状の炭化物が付着している。色調は灰褐色を呈し，胎土中に，1～2mmの礫を多く含んでいる。なお，1・2・3は古式土師器で，10C6Ⅸfから一括して出土している。4は8C4付近から出土した須恵器の無台坏で底径6cmと推定される。底部の切り離しは回転糸切りである。20は7c9Ⅰfから出した須恵器の甕の胴部破片で，表面にはすだれ状の，裏面には平行沈線状の叩きがみられる。5は7C4から出土した灰釉の碗で，口径16cmと推定される。内外面に灰白色の釉が施されている。6は珠洲系陶器の擂鉢で，口径31cmと推定され，色調は

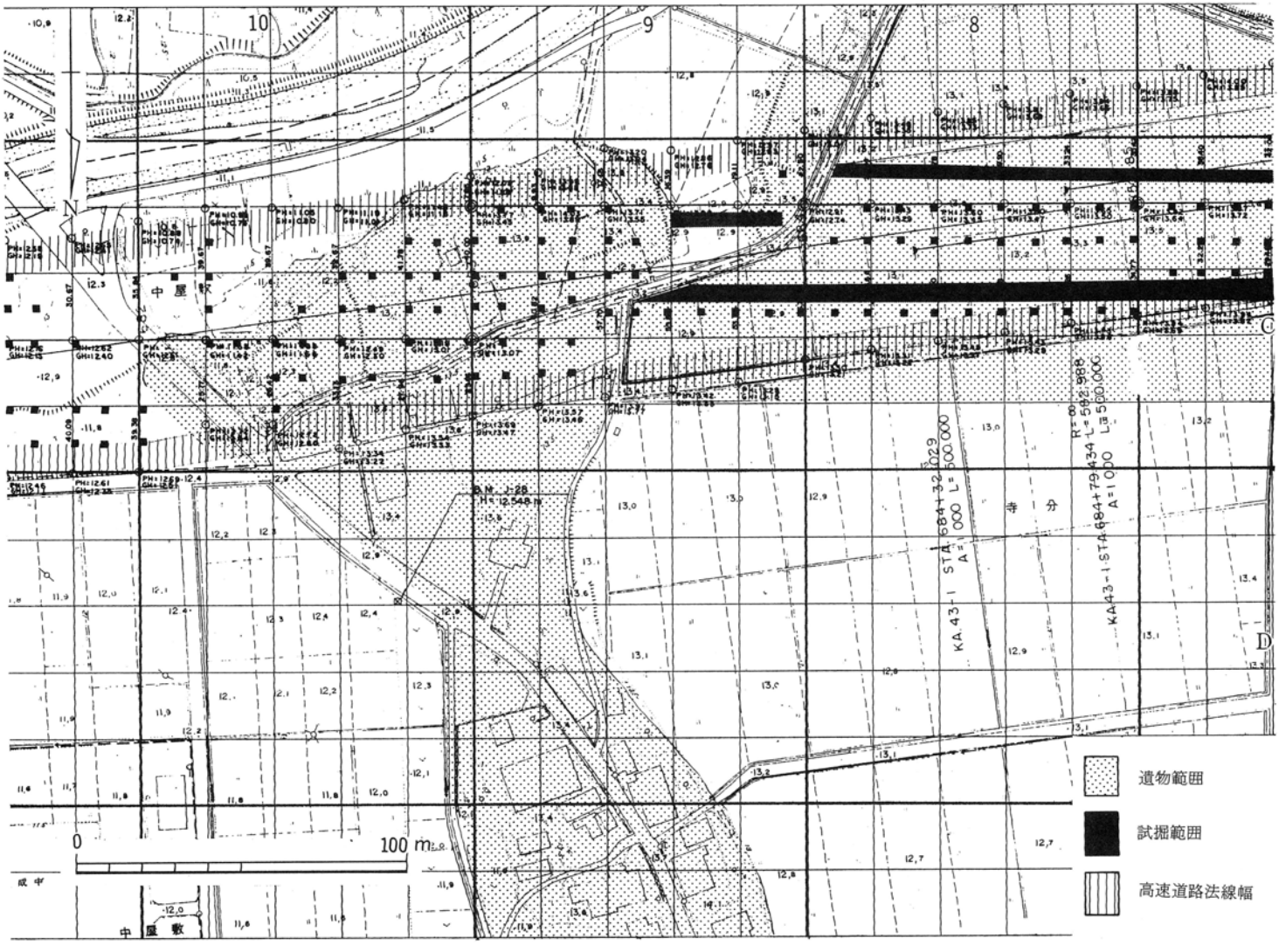


第16図　八反田遺跡土層柱状図（1/30）



第17図　　八反田遺跡出土遺物

青灰色を呈している。7～12・図版4－12は舶載磁器である。7～10は白磁で，7（図版4－9）は8C13から出土した口禿の白磁坏で15世紀前半に，8（図版4－8）は8C15から出土し，削り出し高台を持ち，15世紀前半に，9（図版4－6）は8C13から出土し，口径約8cm・底径約3cm・器高2cmを測る小皿で15世紀前半に，10（図版4－10）は8C15から出土し，口径18cmと推定される口禿の碗で13世紀末～14世紀前半にそれぞれ比定される。11（図版4－11）は8C



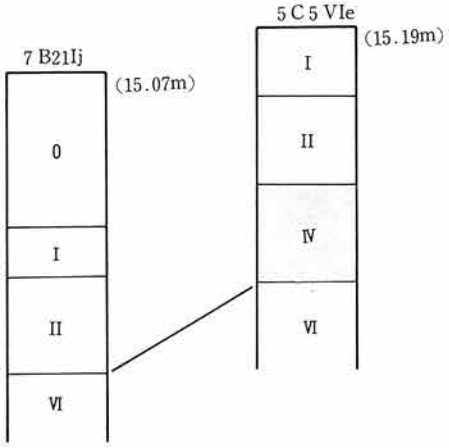
第18図　　八反田遺跡試掘範囲

15から出土し，片切彫の鎬蓮弁文をもつ青磁碗である。口径16cmと推定され，13世紀中葉に比定される。12(図版4－13)は8C11から出土した染付の碗で，底径6cmと推定される。高台内・畳付は共に露胎で，外面の腰部及び見込に文様が描かれている。図版4－12も染付の破片で，内側に文様が描かれている。双方とも16世紀前半に比定される。13～16は美濃・瀬戸の施釉陶器である。13は8C12IIIfから出土し，口径11cmと推定される折縁皿である。器の内外面には灰釉が施され，胎土は緻密で灰白色を呈している。14は8C12から出土し，底径6cmの皿と推定される。底裏及び見込み部分を除く器の内外には黄緑色の釉が施されている。高台は削り出し，胎土は緻密で灰白色を呈している。14・16(図版4－14)は8C4付近及び7C14Iaから出土し，底径が6cm，5cmと推定される菊皿である。内面底部中央には印花が押され，底裏や内はげのみこみ部分を除く器の内外面には淡緑色の釉が施されている。13～16は17世紀前半に比定される。18(図版4－17)は8C6Iaから出土し，口径25cmと推定される絵唐津の段皿である。器の内外面には灰色の釉が施され，口唇部と口縁部内面には鉄釉で文様が描かれている。器厚はうすく，胎土は緻密で灰色を呈している。17(図版4－16)は8C12IIIbから出土した唐津焼の壺で，頸部外面及び肩部内面に鉄釉状の釉が施されている。肩部内面には青海波状の叩きが施され，胎土は緻密で灰赤色を呈している。16世紀末～17世紀前半に比定される。19は10C18Xfから出土した吹子の羽口である。外径7.8cm，内径2.6cmと推定され，内側は熱をうけて橙色に変色している。

E　鉄砲町遺跡

本遺跡は上越市大字寺分字藤の木60番地ほかに所在し，自然堤防上もしくは正善寺川によって段丘化しつつある沖積地に立地する。現状は宅地・畑地・水田で，遺跡の範囲は東西約210m・南北約700mで面積は約15,000m²である。トレンチ及び試掘グリッドは66箇所に設定し，その延面積は648m²である。なお，今回の発掘調査では遺跡南西側の範囲推定は不可能であった。

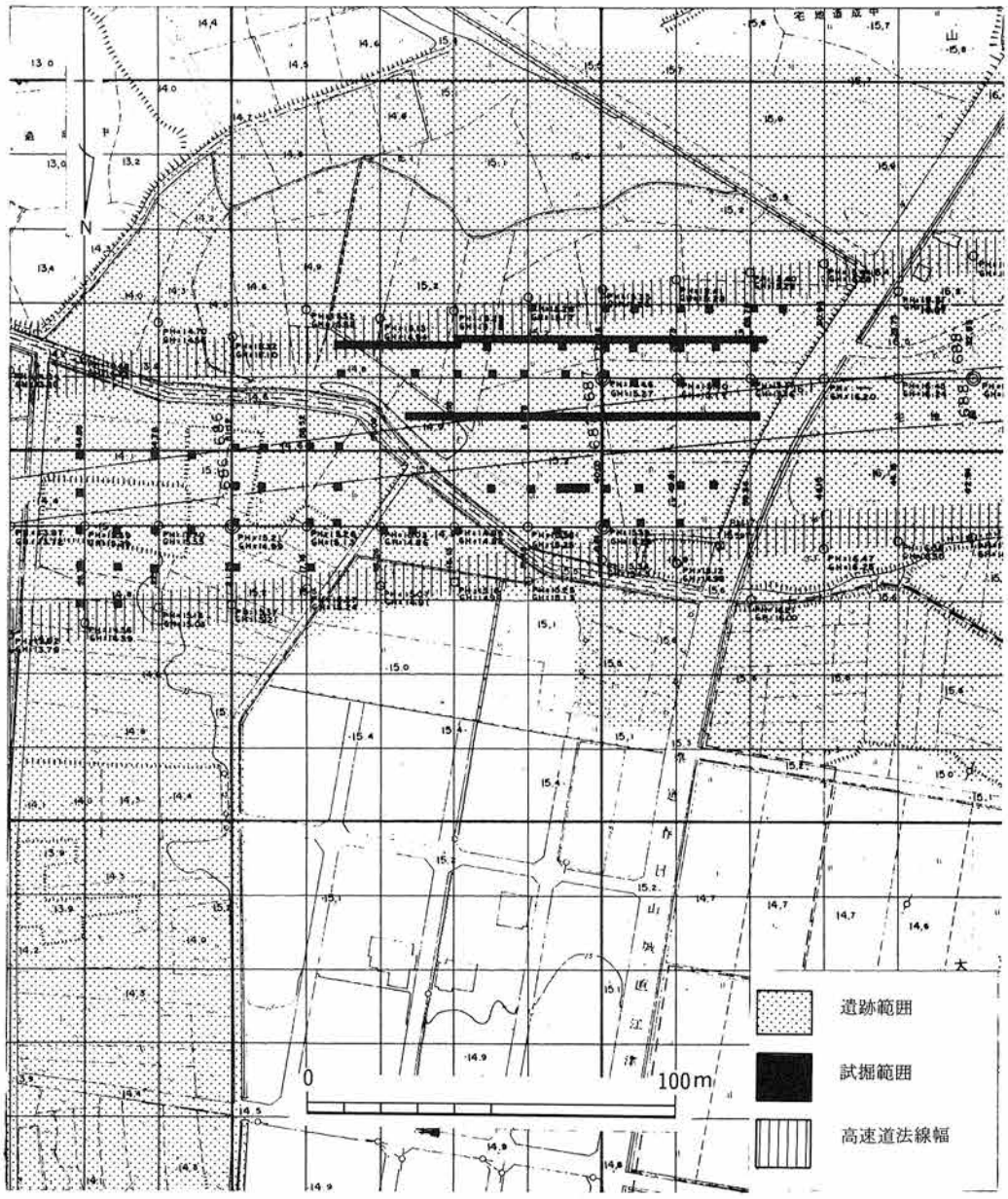
層序（第19図）は0・I・II・IV・VIの5層からなる。IV層は灰黄褐色を呈し，炭化物を多く含み，土師器・須恵器などが出土することから遺物包含層と考えられる。ピットが検出され，縄文土器・土師器・須恵器・中世陶器なども出土していることから縄文時代・古代～中世にかけての遺物包含地と考えられる。



第19図　鉄砲町遺跡土層柱状図（1/30）

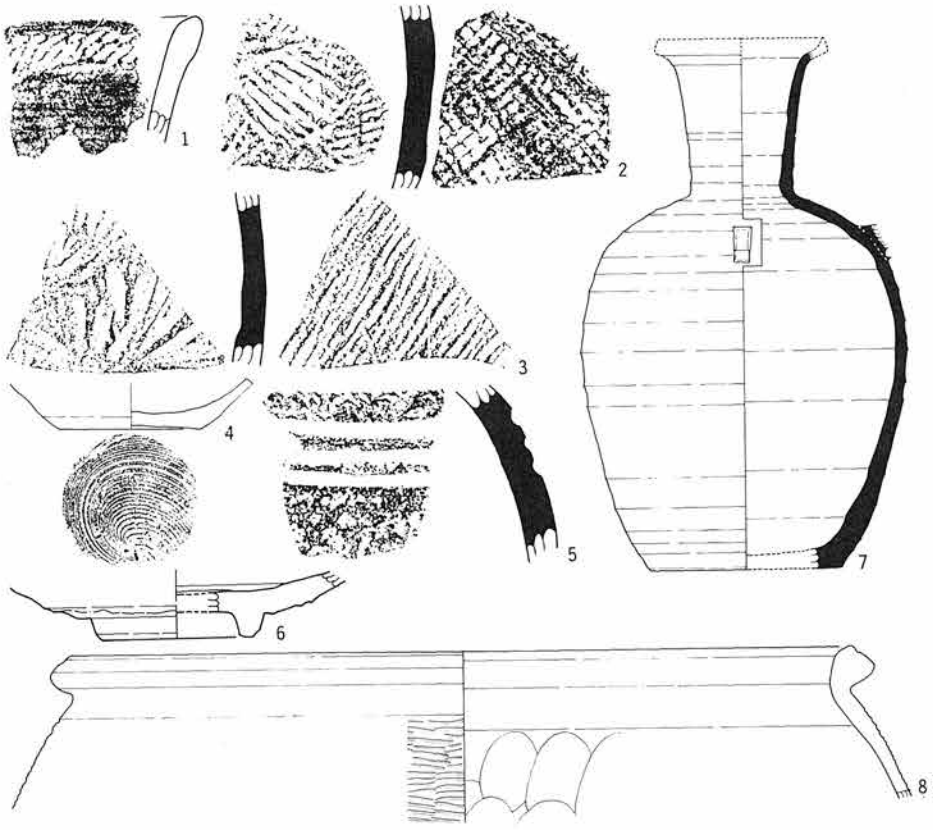
出土遺物（第21図，図版4）

第21図1（図版4－2）は7C8Ifから出土した縄文土器の深鉢の口縁部破片である。口縁最上部にはLRの縄文が施され，器の内外



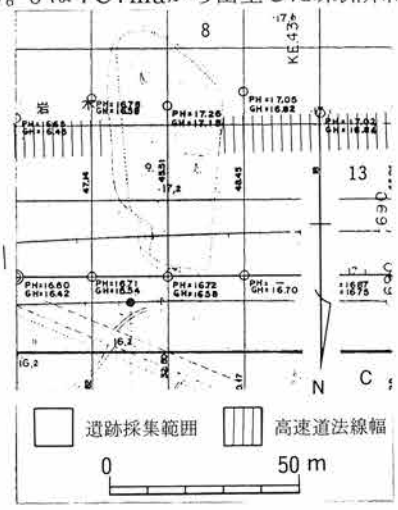
第20図　鉄砲町遺跡試掘範囲

面は磨かれている。縄文後期後半以降に比定される。7は6C9Xeから出土し，口径4.4cm・底径5cm・器高28cmと推定される須恵器の双耳瓶である。胴最下部は箆削り，それ以外はロクロナデ整形がなされている。焼成は良好で，胎土は小礫を含むが緻密である。2・3は6B17Viと7C8Ifから出土した須恵器の甕の胴部破片で，器の外面には格子状及び平行沈線の，内面には放射線状の叩きが施されている。5は6B4Vjから出土した須恵器の壺の肩部破片と考えられ



第21図　　鉄砲町遺跡出土遺物

る。3条の平行沈線が巡り，その上部にカキ目が認められるが，時期等の詳細は不明である。4は5B23から出土した土師器の無台坏である。底径は5.6cmを測り，底部には回転糸切りの痕跡が認められる。色調は灰褐色を呈し，胎土は緻密である。8は7C7IIIaから出土した珠洲系陶器の大甕の口縁部破片である。口径43cmと推定される。胴部の外面には平行沈線，内面には長円形の叩きが施されており，口縁部の内部はロクロナデ整形がされている。焼成は良好で，色調は青みがかった黒褐色をなし，胎土には白い砂を多く含んでいる。15世紀前半に比定される。6（図版4－7）は5C4Xeから出土した近世磁器である。底径約4cmで，胎土は灰白色を呈し，緻密である。内面の釉削り取り部分及び底部外面に炭が付着している。



第22図　　高畑遺跡遺物採集範囲

F　高畑遺跡

本遺跡は上越市大字岩木字高畑に所在し，現状は宅地・畑地などである。用地買収が未終了のため試掘調査

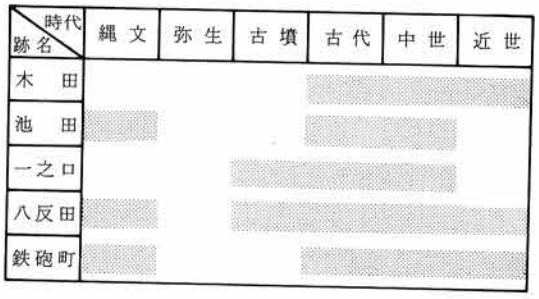
は行なわれなかった。しかし，以前に中世陶器などが第21図に示した箇所から採集されている。その箇所は宅地面などより1m余り高くなっており，現在は杉が植林されている。来年度当初に試掘調査をこの高まりを中心とした付近一帯で行う予定である。

第6節　ま　と　め

昭和57年度に実施した，上越市春日・木田地区の北陸自動車道法線内における調査は，記録保存を前提とした調査と遺跡の分布及び範囲確認のための調査に2分される。前者は一之口遺跡と木田遺跡の一部で，後者は木田～大豆地区までの法線内のほぼ全域にわたった。本節では後者の調査で新たに発見された遺跡の総面積・時期・遺構・遺物及び発掘調査の技術的な問題点について若干ふれてみたい。

確認された遺跡は木田・池田・一之口・八反田・鉄砲町の5遺跡であった。それらの総面積は約111,000㎡に及び，木田～大豆地区の法線総面積の約87%を占めるに至った。また，来年度当初に調査が行なわれる予定の高畑地区にも遺跡が存在することが確実視されており，遺跡の総面積はさらに増えるものと見込まれる。

各遺跡の時期は出土した遺物から推定して第23図のとおりである。遺跡数は縄文3・古墳2・古代5・中世5・近世3となり，古代以降遺跡が急増する傾向がうかがえる。また，木田・池田・一之口遺跡は3時期，八反田遺跡は5時期，鉄砲町遺跡は4時期の遺物包含層が存在する可能性が予想される。



第23図　　春日・木田地区における遺跡の動態

遺構が検出された遺跡は木田と鉄砲町の2遺跡のみである。しかし，一之口遺跡をはじめとした他の遺跡においても，今後調査が進むにしたがい遺構が検出されることはほぼ確実である。

遺物は縄文土器，古式土師器，須恵器，土師器，中・近世陶磁器，舶載磁器等が出土している。縄文土器は晩期後半に比定されるものが1個体，後期後半～晩期に比定されるものが1片，時期不明が1片であった。須恵器では坏・坏蓋・甕・双耳瓶などが認められるが，奈良期のものと平安期のものに大きく2分される。中世陶磁器では珠洲系陶器・古瀬戸系施釉陶器，青磁・白磁・染付の舶載磁器が出土しており，前者は15世紀，後者は13～14世紀前半に比定されよう。近世陶磁器では美濃・瀬戸・唐津・伊万里焼などが出土しており，17世紀前半～18世紀前半に比定されよう。今回の調査では木器の出土例は少なかったが，本地区には沖積地に立地する遺跡が多く，今後の調査において，質・量とも豊富に出土することが予想される。個々の遺跡の内容及び性格の言及は今回の調査資料では不可能である。しかし，来年度以降の各遺跡の発掘調査によって必ずや明確にされるであろう。

最後に，発掘調査の技術的な問題として排水・排土処理をあげておきたい。今回確認された遺跡では，沖積地などの低湿地の占める割合が多く，降雨・湧水などの排水処理にはかなりの時間が費されるものと推定される。それゆえ，排水の効率化は来年度以降の発掘調査の進ちよく状況に大きな影響を及ぼすものと考えられる。また，確認された遺跡は，沖積地という立地状況から埋没深度が深く，来年度以降の調査における表土処理にさいしては，バックホー・ブルトーザーなど，重機の有効的な活用が望まれる。

註

1　主な説としては，直江津説，新井市国賀説，上越市今池説などがある。

2　永正10年，春日山城は「要害」と記される（『上杉家文書之一』）

3　ヤスイの所在は不明であるが，直江津に小路のつく地名が多いことからすれば，アヤノ小路も直江津にあったかもしれない。

4　「景勝一代略記」は武田勝頼が天正6年6月23日「休息有，春日山へ向て藤牧原（上越市藤巻）に御軍有，鉢嶺其間五里也，お館七里也，（中略）申刻に本陣大出雲原（新井市出雲）へ御帰陣有，九月上旬まで御在陣被成，其内に景勝様と勝頼公御一和被成，御納馬也」とするが，6月29日付武田信豊書状では「随時屋形（武田勝頼）今日当地著陣，明日者少々出人数路次普請可被申付候」とし（「歴代古案」），同日の景勝書状では「然而甲州一和之儀落着，既，勝頼，典厩，誓司相調被越候，館へ為手合，昨今甲衆木田迄一手二手差越候」とする（「景勝公御書留」）。

5　報告書作成中に，県道春日山停車場・春日山城線の両側を中心に条理遺構的な地割もみえることに気づいたが，これが耕地整理によるものか，古代・中世の何らかの地割をとどめているものかなども さらに検討を加えてゆきたい。

6　発掘調査は，北陸自動車道法線内に限って行われたため，法線外への遺跡の広がりは表面採集，地形変化等を参考にして推定した。それゆえ，本書で示す遺跡の面積は法線内に限っての数値である。

引 用 文 献

井上鋭夫（1970）：新潟県の歴史，山川出版社

伊藤正一（1966）：春日山城跡について一遺構を中心に一，高田市文化財調査報告書第8集，pp.1～16

岡本郁栄・長谷川　正・松浦敏夫・渡辺吉和（1980）：潟町砂丘の新砂丘から縄文土器の発見，新潟県地学教育研究会誌14号，p.62

岡本郁栄（1982）：奥の城（西峰）遺跡　第2次発掘調査概報，中郷村教育委員会

小村　弐（1983）：幕藩制成立史の基礎的研究，吉川弘文館

小島幸雄・岡本郁栄（1978）：新潟県上越市岩木地区遺跡群発掘調査概報，上越市教育委員会

小島幸雄（1979）：新潟県上越市岩木地区遺跡群発掘調査報告書，上越市教育委員会

————（1984）：本長者原廃寺確認調査概要，上越市教育委員会

坂井秀弥（1983）：新潟県上越市本長者原廃寺の再検討，新潟史学16号

関　雅之・戸根与八郎（1976）：宮口古墳群，新潟県東頸城郡牧村宮口古墳群発掘調査報告，牧村教育委員会

高田平野団体研究グループ（1980）：高田平野の第四系と形成史，新潟大学教育学部高田分校研究紀要第25号，pp.209～281

寺村光晴・室岡　博（1960）：鍋屋町遺跡，柿崎町教育委員会

中沢　肇（1964）：高田市文化財調査報告書第７集

————（1966ａ）：城下町，高田市文化財調査報告書第８集，pp.28～38

————（1966ｂ）：街道，————————————，pp.39～77

新潟県教育委員会（1980）：栗原遺跡（第２次調査概報）

新潟県教育委員会（1984）：今池遺跡の調査，上新バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ

新潟古砂丘グループ（1967）：日本海側の古砂丘について，第四紀研究６巻１号，pp.19～28

秦　繁治・伊藤　裕・花積哲夫（1984）：月岡遺跡発掘調査報告書，新井市教育委員会

室岡　博（1972）：頸域地方の海と海底・海浜遺跡，上越市総合博物館教養選書第１編

室岡　博・関　雅之・本間信昭（1984）：長峰遺跡Ⅱ　新潟県中頸城郡吉川町長峰遺跡第３次発掘調査報告，吉川町教育委員会

米沢　康（1980）：大宝２年の越中国四分割をめぐって，信濃32巻６号

池　田　遺　跡

第Ⅰ章　調査に至る経過

本遺跡は，昭和57年８月23日～同年11月６日の間に実施された上越市春日・木田地区における北陸自動車道法線内の発掘調査によって確認され，縄文晩期・古代・中世の遺物包含地として周知された。法線内の面積は約16,800㎡であるが，そのうちの14,800㎡は先行盛土がされている。

昭和57年度の発掘調査によって確認された遺跡は，57年10月５日，春日・木田地区発掘調査の結果として，日本道路公団上越工事事務所（以下工事事務所とする）へ提示された。これを受けて，日本道路公団新潟建設局（以下建設局とする）は58年２月22日に58年度発掘調査の要望を県教育委員会（以下県教委とする）に提出した。それによると，春日・木田地区の遺跡については木田・池田・一之口遺跡の一部の発掘調査と高畑遺跡の範囲確認を上半期（７月まで）に，下半期は八反田・鉄砲町遺跡の発掘の実施を要望し，58年度中に法線内の文化財の問題を解決したいとのことであった。３月22日，県教委と建設局は58年度調査計画について協議を開始した。協議の中で県教委は58年度調査計画書を提示し，春日・木田地区については信越線両脇の先行盛土の排土及び遺跡の排水処理を依頼した。これに対して建設局は，盛土については即答をさけ，排水処理は実施する方向で検討すると回答した。先行盛土された地区は，ボックスカルバート盛土（約8,000㎡）と砂敷盛土（約6,800㎡）に２分される。前者については諸般の事情により調査は不可能で，後者のみが調査の対象となった。３月28日～29日にかけて，県教委職員が工事事務所に出向き，発掘調査の具体的な打合わせを行なった。その内容は，排水処理は公団が行い，より効果的な方式がないか検討する。ブルドーザー・バックホーなどを用いた排土（以下表土処理とする）については公団が行ってもよい。しかし，その費用については内部検討を加えたいとのことであった。４月１日，58年度における春日・木田地区の発掘調査の協議を再度建設局と行った。本遺跡については次のような合意・要望事項が示された。①表土処理・排水処理は公団で行う。②今年度上半期に発掘調査を終了して欲しい。③信越線東側の盛土の排土については公団としては行いたくない。これに対して県教委では，①，②については了解したが，③については，排土を行っても発掘を実施しなければならないと考えている。しかし，大きな問題なので今日は保留にして，更に協議を重ねてゆきたいと回答するにとどまった。なお，排水処理については，遺跡の周囲に幅約30cm・深さ1.2～1.5mの溝をトレンチャーで掘削し，溝の内部に径10cm余りのドレーンホースを敷設し，その上部に砂利を詰め，遺跡の最も低い地点に集水升を設置し，溜った水を水中ポンプで排水するという地下排水工法を用いることにした。４月６日，工事事務所の担当工事長と現地で打合わせを行い，本遺跡東側の排水処理は４月８日～11日までの間に実施し，表土処理は４月７日から開始すること。先行盛土された個所の調査については，建設局で検討中のため現在の調査計画には含まないこととした。そして，本遺跡の調査は58年４月11日から20日余りの予定で実施することに決定した。

第II章　調査の経過と方法

第1節　調査の経過

池田遺跡は，排水処理の都合で，東側が池田遺跡2区，西側が池田遺跡1区に区分された。調査は池田遺跡2区を先行し，昭和58年4月11日から5月18日まで実稼動日数18日を費して行われた。発掘総面積は1,808m²である。池田遺跡1区は，同年6月24日に調査が開始された。県内初の水田遺構の発見（註1）などで調査期間の延長が必要とされ，終了は同年10月21日，実稼動日数40日であった。発掘総面積は3,190m²である。以下，池田遺跡1区・2区に分けて経過の概要を順に記す。

池田遺跡2区

4月11日　調査開始。調査区南側のIV層上面において東西に走る道路状遺構を検出する。

14日　調査範囲を南東から北西へ貫く1号溝のプラン確認作業を実施する。

25日　1号溝発掘開始。道路状遺構の実測を開始する。

5月9日　調査区西壁の土層観察用のセクションを記録する。

13日　遺構実測。遺跡完掘状態を写真撮影する。

18日　調査終了。

池田遺跡1区

6月24日　調査開始。発掘調査範囲の25%の試掘に着手する。数本の溝状遺構を検出する。

28日　池田遺跡2区からの延長と考えられる道路状遺構のプランを検出する。

30日　調査区北側で畝状の小溝を数10本検出する。

7月6日　水田遺構を確認。発掘作業の主体を重機から人力へと切り替える。

7日　水田跡畦畔に沿って足跡と思われるプランを多数検出する。

9日　県警上越南警察署において，水田跡足跡の石膏型採取の指導を受ける。

14日　遺跡の現地説明会を開く。

26日　高田高校高野教諭を招請し，現地で花粉分析用の試料を採取する。

8月2日　宮崎大学藤原助教授を招請し，現地でプラント・オパール分析用の試料を採取する。

8月4日～29日　遺跡詳細分布調査と他遺跡の確認調査のため調査を中断する。

9月12日　水田跡発掘終了。VII層以下の調査を開始する。

18日　VII層以下の発掘の結果，集石と旧正善寺川の河道を検出する。

21日　調査終了。

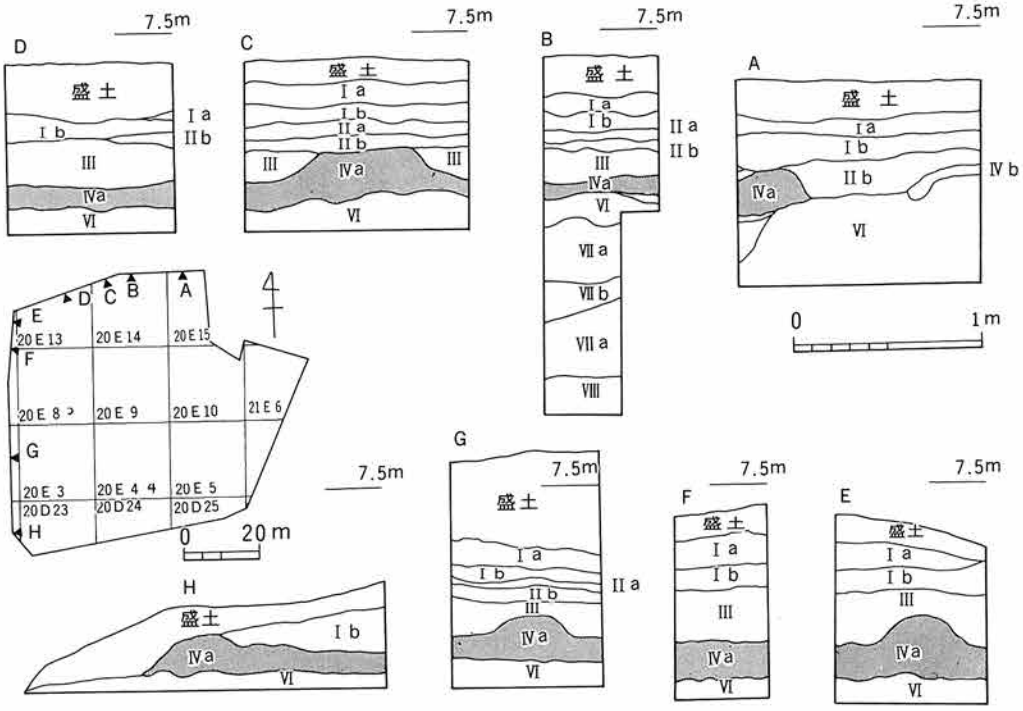
第2節　調査の方法

昭和57年度に実施された確認調査の結果，上層よりI層　黒色土（近・現代の水田耕作土）・II層　灰白色砂質土・III層　黒褐色土（遺物包含層）・IV層　黄褐色粘土・V層　青灰色粘土とおお

まかな層序関係がとらえられた。そして各層からの出土遺物は，Ⅰ層で近・現代の陶磁器類が，Ⅲ層で珠洲系陶器・須恵器・土師器，Ⅴ層で縄文時代晩期の土器がそれぞれ発見されている。これらの結果を踏まえ，中世以前の遺構・遺物が調査の対象とされた。したがって，該期の遺物が発見されていないⅠ・Ⅱ層に関しては重機による掘削をおこない，Ⅲ層はベルトコンベアーと人力の併用による調査が実施された。なお，Ⅳ層以下は当初より遺物包含の可能性が少ないと考えられていたため，発掘は，重機により調査区の25％を目標に実施された（第37図参照）。出土遺物の処理に関しては，遺構内出土のものは別として，各層序毎に２×２ｍの小グリッド単位で取り上げを実施した（註２）。なお調査区は沖積面に位置し，含水量の多い土質と降雨時の水たまり等，調査に支障をきたす場合が多くあり，ドレーンホースによる排水施設と水中ポンプ併用による地下排水工法で排水にあたった。

第Ⅲ章　遺跡の層序

調査区の北壁と西壁に沿い，柱状図をもって各層の堆積状態を表わすものとする。また，各柱状図の位置は，調査区略図の記号と一致する。なお，前項で述べた昭和57年度確認調査段階での層序区分は，今回の発掘調査において以下に示すように変更されている。つまり，確認調査時でⅠ層としたものはⅠａ・Ⅰｂ層。Ⅱ層としたものはⅡａ・Ⅱｂ・Ⅲ層。Ⅲ層としたものは



第24図　池田遺跡層序

Ⅳa・Ⅳb層。Ⅳ層としたものはⅥ層。Ⅴ層としたものはⅦa・Ⅶb・Ⅷ層とそれぞれ細分された（註3）。以下，各層について説明を加える。

Ⅰa層　暗褐色土　粘性が強く，酸化鉄の粒子を含む。現代の水田耕作土である。

Ⅰb層　暗灰色土　砂質の土壌であり，色調はⅠa層よりやや明るく下部で酸化鉄が著しく認められる。上層同様，現代の水田耕作土である。

Ⅱa層　黄褐色土　砂質の土壌であり，酸化鉄の沈殿が観察される。水田床土と考えられる。

Ⅱb層　灰白色土　砂質の土壌であり，粘性が強い。酸化鉄の沈殿が所々観察される。プラント・オパール分析の結果，水田跡の可能がある。

Ⅲ　層　青灰色土　砂質の土壌であり，径1cmほどのチャートの円礫をわずかに含有する。また，炭化物粒を少量含む。洪水堆積物と考えられる。

Ⅳa層　暗灰色土　粘性に富む土壌であり，炭化物を少量含む。珠洲系陶器・須恵器・土師器が包含される。プラント・オパール分析の結果，水田跡と考えられる。

Ⅳb層　暗褐色土　粘性に富む。黄灰色粘土を鹿子斑状に含有する。珠洲系陶器・須恵器・土師器が包含される。

Ⅵ　層　黄灰色土　粘性に富む砂質の土壌。酸化鉄粒が観察される。

Ⅶa層　青灰色土　土質はⅥ層と同様であるが，水の影響により色調に変化をきたしたものと考えられる。

Ⅶb層　茶褐色土　茶褐色の粒子が果粒状に混入する。

Ⅷ　層　暗青灰色土　砂質の土壌であり，含水量がきわめて多い。下部にいくほど粘性が失われ粒子の粗い砂となる。

第Ⅳ章　遺構と遺物

池田遺跡1・2区は，調査期間を別にそれぞれ調査を実施したが，内容・地形においても同一の遺跡と考えられ，今回の報告では両者を合わせ池田遺跡として報告する。また，ここでは便宜的に水田跡耕作土中（Ⅳa層）の出土遺物とその上面で検出された遺構，そして，Ⅵ層上面で検出された遺構，Ⅵ層の出土遺物，Ⅶa層中の遺構と遺物に大きく4分して報告したい。

第1節　Ⅳa層上面の検出遺構とⅣa層出土遺物

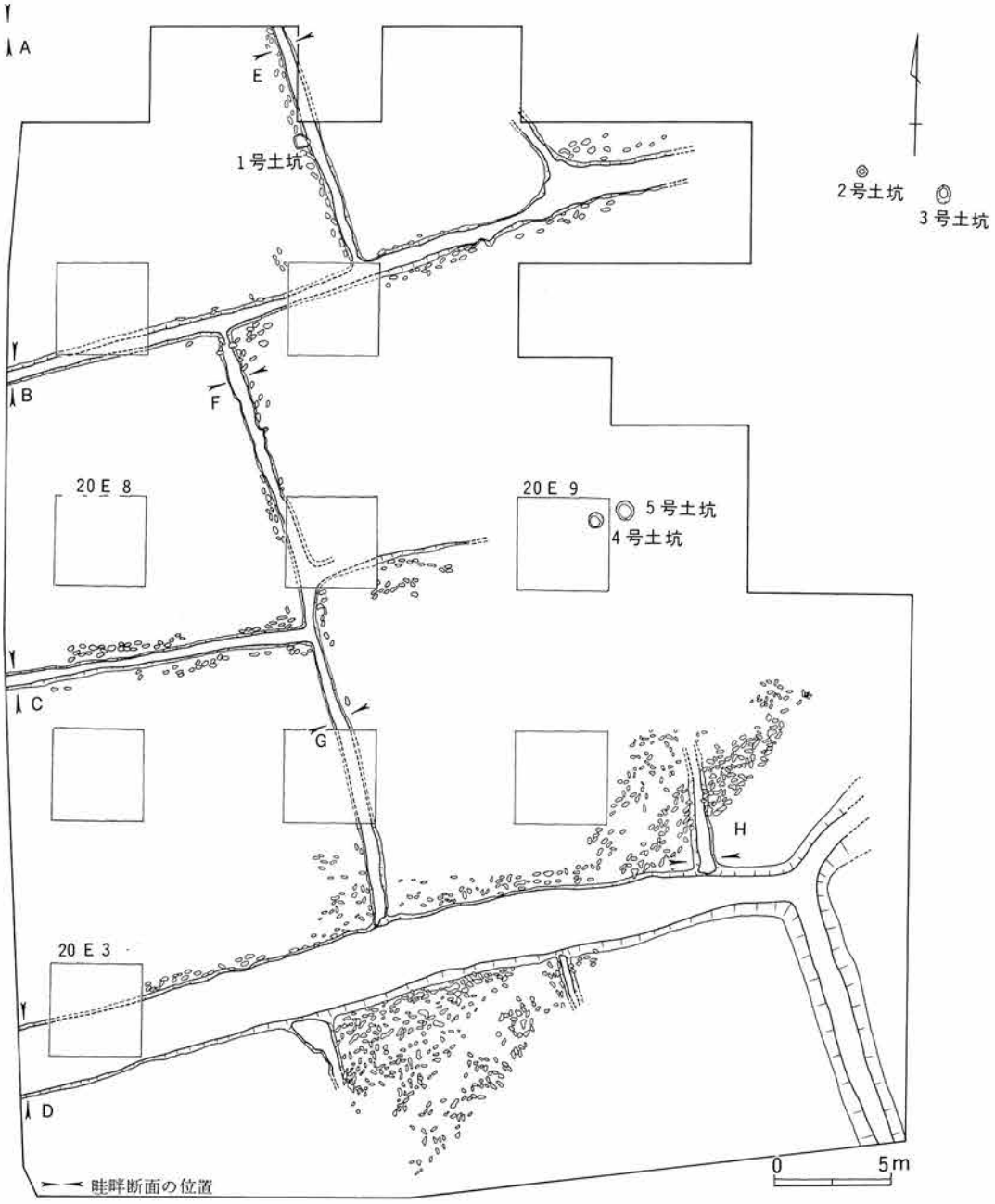
検出された遺構と出土した遺物の概数

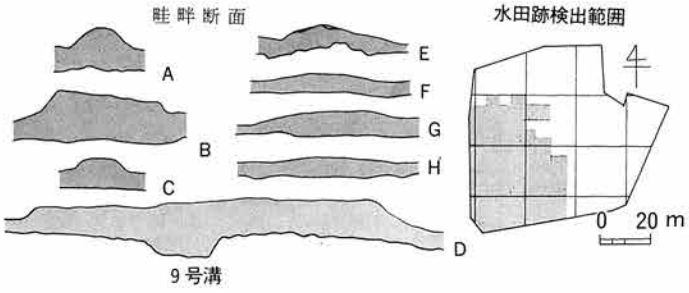
水田跡　約1,400m²・足跡　多数・土坑　5基。

須恵器片　95点・土師器片　2,000点・灰釉陶器片　3点・珠洲系陶器片　40点・陶磁器片　4点・石硯　1点・古銭　1点。

A　水　田　跡（第25図，図版1～7）

調査区の南西部で検出されており，その面積は約1400m²にのぼる。水田跡には洪水堆積物と





第25図　池田遺跡水田跡

考えられる青灰色砂質土(III層)が厚さ10cm前後で一様に覆っており，遺存状態は良好と考えられる。しかし，水田跡検出以前に重機によるⅠ～III層までの掘削を実施したため，遺構は部分的に削平され，重機の重圧により変形している。

今回の調査で水田1枚を完全な形で検出することはできなかったが，およそ1辺が9～15mの方形を呈しており，水田1枚の大きさは90～190m²のばらつきをもつものと推測される。畦畔は，およそN-15°-WとS-75°-Eの方向にほぼ直交する形で検出されており，断面形・幅・高さによって，およそ次の3つに分類される（第1表)。

大畦畔は，調査区の南側で検出されており，東に進み二又に分かれる。道幅その他，規模の点で他の畦畔とは区別される。おそらく水田の中を正善寺川に沿うように構築された道路状遺構と考えられる。またこの畦畔のほぼ中央に重複する形で9号溝(第30図)が検出されており，これについては，第2節で説明する。中畦畔は，上述の道路状遺構の北側に平行する形で検出されている。これらは田を区画することと，さらに人間の歩行とを兼ねたものと考えられる。大・中畦畔にほぼ直交する形で小畦畔が検出されている。田を区画することに第一義的な意味をもつものと思われる。また水口施設の有無は，上述した重機による水田耕作土直上までの掘削の結果，表面がかなり荒されており，明確には判断できなかった。その他，遺存状態の良好な範囲に多数の足跡状の落込みと後述する土坑数基が検出されている。

第1表　池田遺跡畦畔分類

分類名称	断面形	幅(下場)	高さ	断面図
大畦畔（道路状）	台形	3～4m	0.2～0.3m	D
中〃	〃	1	0.2	B
小〃	半円形	0.2～0.4	0.05～0.1	ACE

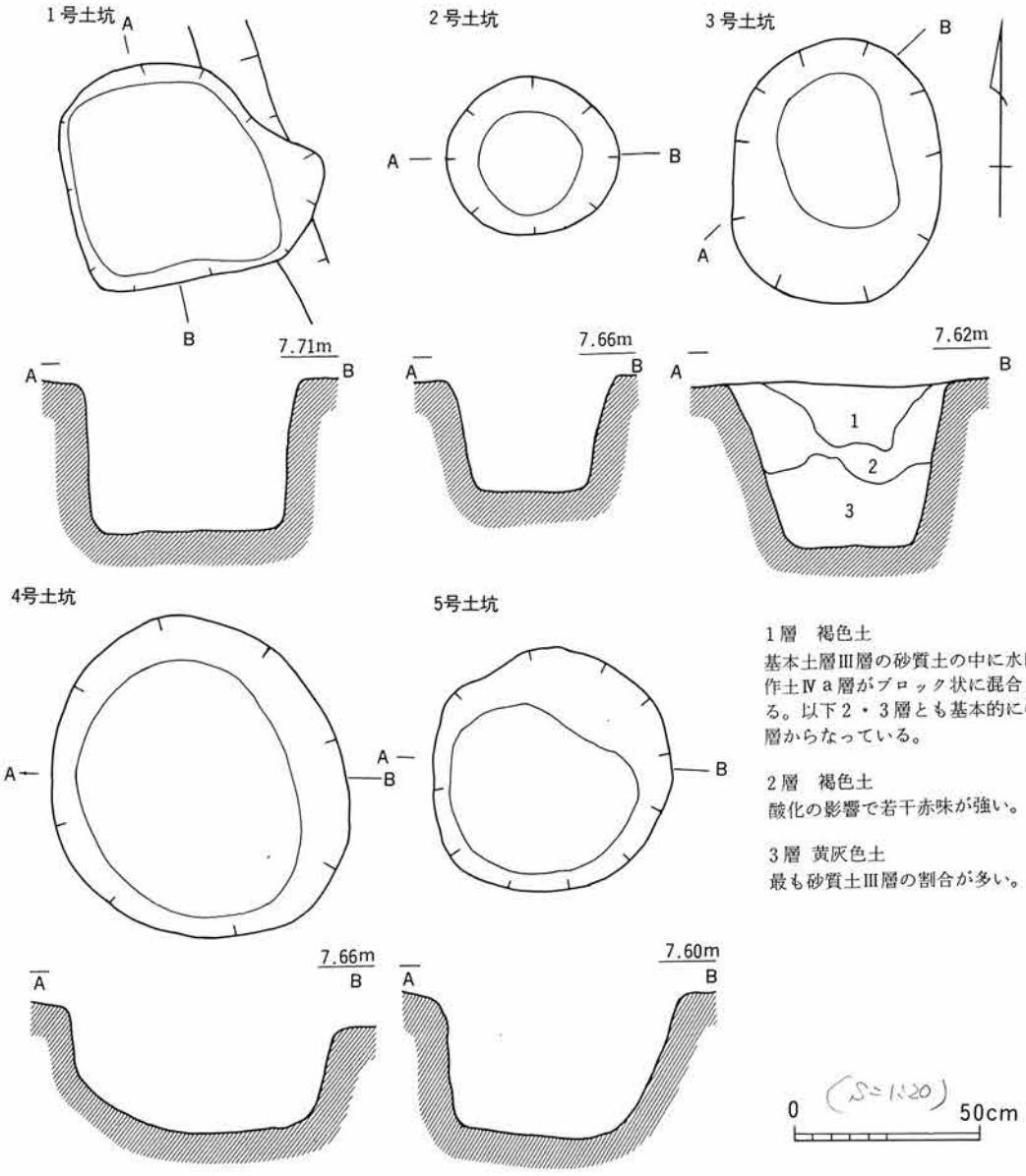
B　土　　坑（第26図，図版8）

調査区内で5基検出されている。形状・測定値は別表で示す通りであるが，覆土は水田跡を一様に覆うIII層が主体を占め，その中にブロック状にIV層が混入しているものが一般的である。3号土坑に堆積状態の一例を示した。III層が洪水堆積物で短期間に堆積したものであるならば，これらの土坑は，水田跡と同時期の所産である可能性が高い。出土遺物は3号土坑の3層中から径25cmほどの自然礫が出土したほかは，皆無である。また，水田跡の中での各土坑の位置関係は1号土坑でみられるように，畦畔と重複または隣接するものと考えられる。

なお，計測の基準として，開口部径・底部径はその最大径を，深さは確認面からの最大深をそれぞれ採用した。1号土坑に関し東側開口部の張出しは，畦畔の崩れが考えられるため，最もよく形状を表わしている部分N-13°-Wの軸線で計測している。2～4号土坑は本来ならIVa層上面で確認されるものであるが，試掘坑または重機によるIV層発掘の結果，VI層上面での確認となった。

C　出土遺物（第27・28図，図版11・12）

水田跡耕作土より出土した遺物の内訳は，須恵器片88・灰釉陶器片2・山茶椀片1・白磁片



第26図　　池田遺跡土坑（Ⅳ層）

第2表　池田遺跡土坑属性表

土坑 No.	検　出　区	平面形	開口部径	底部径	深　さ	出土遺物
1号土坑	20E 8 VIh	方　形	60cm	48cm	40cm	な　し
2　〃	20E 9 VIIgh	円　形	42	26	30	〃
3　〃	20E 9 Xg	楕円形	70	42	43	円礫1点
4　〃	20E 4 IIj	〃	89	70	35	な　し
5　〃	20E 4 IIIj	円　形	66	50	37	〃

3（内2点が接合）・青磁片2（同一個体か）・珠洲系陶器片37・越前系陶器片3・唐津焼片1・土師器片約2,000・石硯1・古銭1である。なお，土器は細片のみで，その中でも土師器は遺存状態が悪く，取り上げ作業中に内外面が剝落するものが多かった。また遺物は20E14を中心に調査区の北半分で大半が出土している。

須恵器　数片の坏・碗・坏蓋・長頸壺・短頸壺の破片のほかは，すべて甕の胴部破片である。

無台坏（第27図1～5）1～3・5は内外面ともロクロナデが施され底部は回転篦切りである。2の器体は厚く，胎土に石英その他の細粒を多く含む。4は内外面ともナデ整形で碗になると思われる。色調は4が白灰色，他は青灰色。胎土は1・3・4に白色の細粒が含まれ，焼成は堅緻。その他同種の破片が24点出土しており，底部の残存するものに回転糸切りのものが3点含まれている。

有台坏（第27図6～8）内外面ともロクロナデが施されている。底部は6・8が回転篦切り，7が回転糸切である。高台の形状は，6・7が外側に張り出す外縁接地で，8は内彎する。色調，胎土は6・8が青灰色で白色細粒を若干含み，7は灰白色である。焼成は8を除いて堅緻である。その他，同種の破片が4点出土しており，底部が回転篦切りのものが2点，回転糸切りのものが2点含まれる。

坏蓋（第27図9）3点出土しており，いずれも細片であるが，9のように縁部が高いものと平たいものがある。胎土は白色細粒を含み，焼成は悪く，色調は青灰色である。

長頸壺（第27図10・11）いずれも頸部破片である。10は肩部から若干外反し，頸部を成し，11はほぼ直上する。色調は両者とも青灰色，胎土は密で焼成は10が堅緻である。その他，同種の破片が6点出土している。

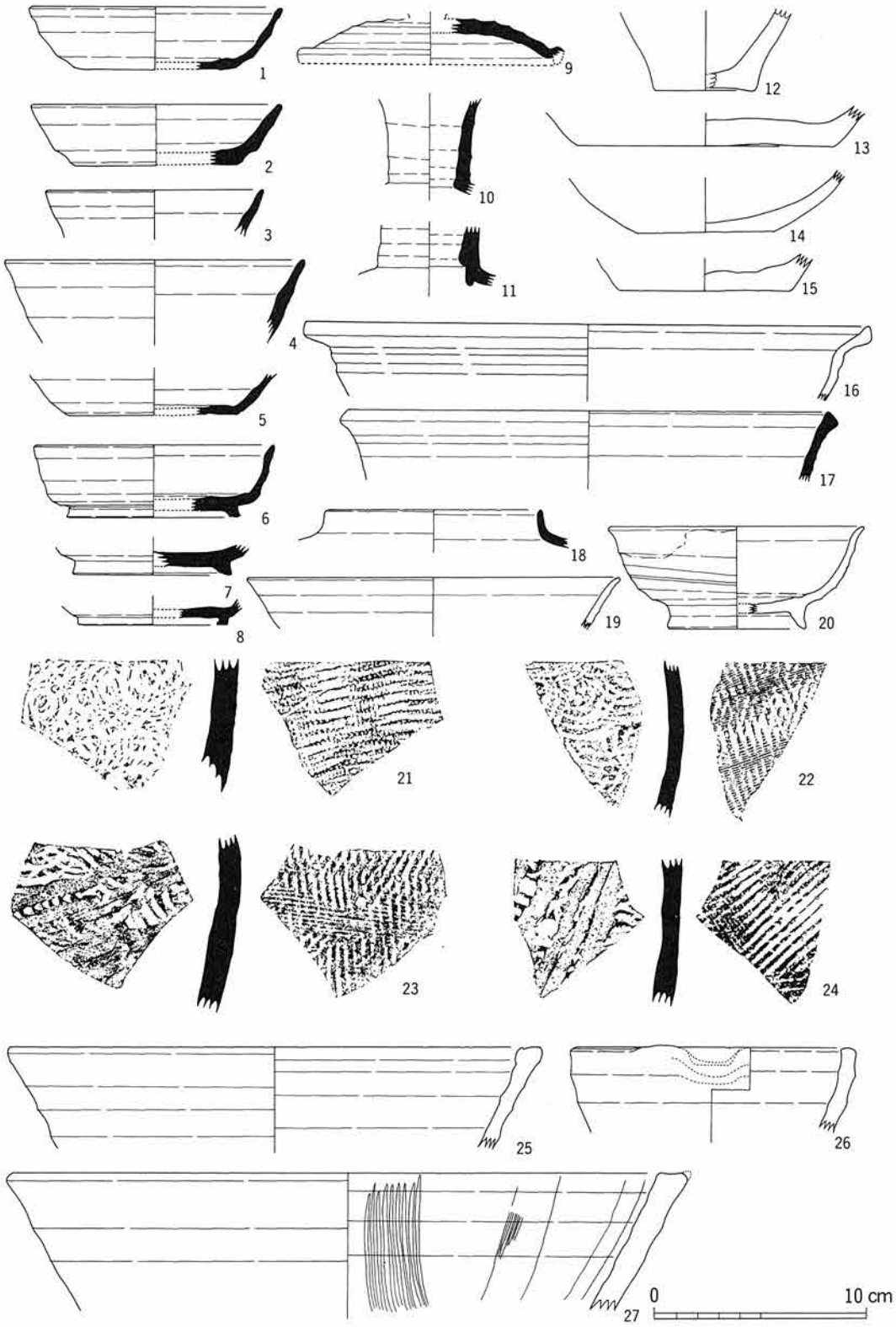
短頸壺（第27図18）肩部から口唇部にかけて若干内彎気味に立上がり，きわめて薄く丁寧な作りである。色調は灰白色，胎土には黒色細粒を若干含む。焼成は堅緻である。

甕（第27図17・21～24，図版11-1～4）17は頸部から口縁部にかけて外反し「く」の字状に屈曲して口唇部を形作る。内外面ともロクロナデで，自然釉がかかり黒灰色を呈する。胎土は密であるが焼成はあまい。ほかに同種のものが2点出土している。21～24は胴部破片であるが，それぞれ外面に平行叩き目，内面には青海波が認められる。22・23は叩き目にカキ目調整が施され，23・24の内面の青海波は，後にナデが加えられている。ほかに同種のものが29点あるが，22のように外面にカキ目調整が加えられるもの14点，内面にナデ調整が加えられるもの3点がある。それぞれ色調は青灰色，胎土は密で，焼成は堅緻である。

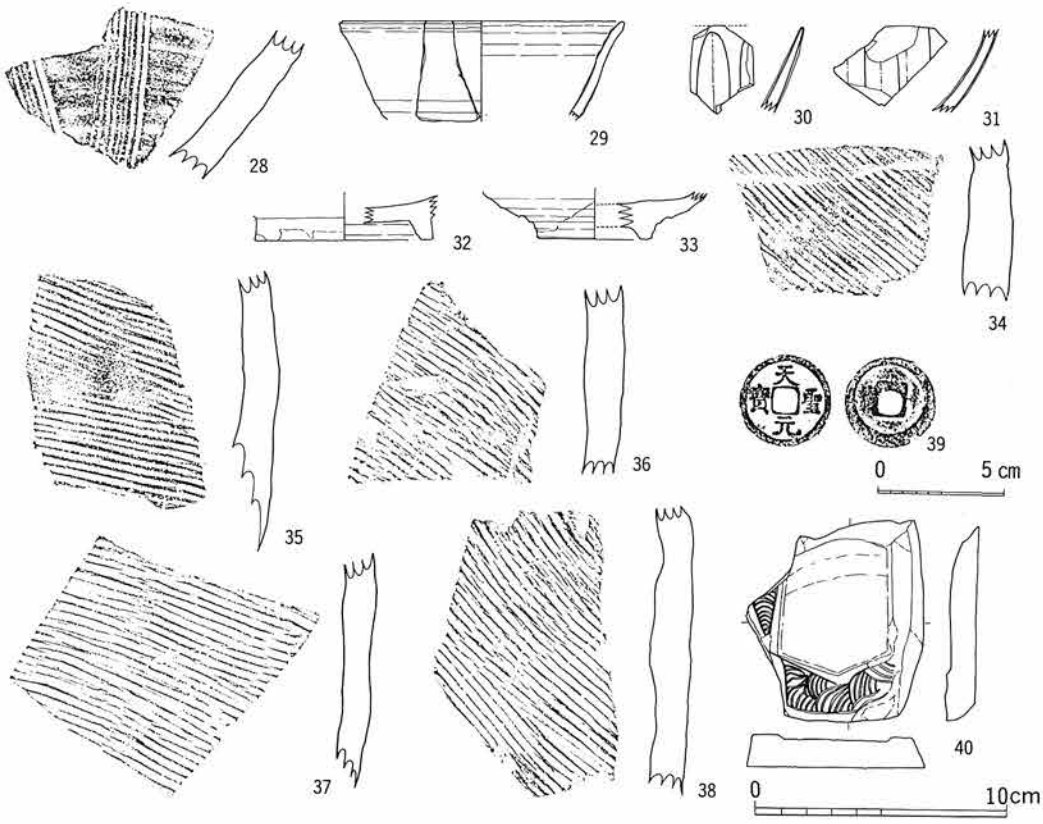
土師器　遺存状態が悪く，整形・調整は不明な点が多い。

甕（第27図12・13・15）12は底部の形状や，胎土に粗い細礫を含むことなど古式土師器と思われる。色調は黄橙色。13・15は胎土に1㎜ほどの細礫を若干含む。色調は赤褐色。

碗（第27図14）底部が薄く，大きく外反して立上がることから，ここでは碗として取り扱った。胎土は密，色調は赤褐色。



第27図　池田遺跡IVa（水田耕作土）層出土遺物(1)



第28図　　池田遺跡IVａ（水田耕作土）層出土遺物(2)

鍋（第27図16）１点のみの出土である。色調は黄褐色。

灰釉陶器（第27図19・20，図版11-５）19は器体が薄く強く外反する。色調は灰白色，胎土は密で，釉のほとんどは剝落している。20は高台付きの碗である。内外面ともロクロナデであるが，胴部中央はその後篦削りがおこなわれている。底部は回転糸切りの後，回転篦削りをおこない，さらにナデによる調整をおこなっているものと考えられる。高台は若干外反し，接地面には籾または，わらの圧痕と思われるものが認められる。色調は釉の部分が淡緑色，その他は灰色である。胎土は白色の細粒をわずかに含有し，焼成は堅緻である。

珠洲系陶器　鉢・甕の小片が出土している。

鉢（第27・28図25～28，図版11-６～９）25は器体がほぼ一直線に開き，全体的に薄く丁寧な作りであるが，胎土に細礫を含む。色調は青灰色，焼成は堅緻。26は片口の小鉢である。器体は内彎気味に立上がり丁寧な薄い作りである。胎土は精選され，焼成は堅緻，色調は灰白色。27は器体が若干内彎気味に立上がり９条１単位とする櫛歯状工具により12単位程度の卸し目を入れている。胎土には白色細粒を多く含み，焼成はきわめて悪い。色調は灰色を呈する。28は８条１単位とする櫛歯状工具を用いており，内面は使用によりかなり摩滅している。胎土は白色細粒を含み，色調は青灰色を呈する。

甕（第28図34～38，図版11-10・11　12-1～3）口縁部破片は4点出土している。いずれも細片であり傾き等が判然とせず，図化しないが，口唇部が丸く肥大するものと，肩部からほぼ同じ厚さで口唇部が角張るものとがある。34～38は胴部破片であり，外面はいずれも平行叩き目で，内面は34・35がナデにより押圧痕を消しており，36・37は押圧痕がそのまま残る。また38は押圧の後，横ナデを加えている。

越前系陶器　壺の胴部と思われるもの1点，甕の胴部と思われるもの2点がある。壺は器体が薄く，胎土は精選され焼成も堅緻である。甕は白色の細礫を多く含み，作りも粗い。色調は暗赤褐色である。

陶磁器（第28図29～33，図版12-4～7）資料はきわめて少なく，図示したものがすべてである。29は「口禿」の白磁であり，口唇部は平たく器体は若干外反気味に立上がる。30・31は同一個体と思われる青磁蓮弁碗である。蓮弁の細かな削りは淡緑色の釉が厚いため判然としない。32は焼成の悪い白磁であり，削り出し高台をもつ。33は唐津焼の碗である。高台貼り付けのためか，底部と高台の接する部分に指圧痕が認められる。

古銭（第28図39，図版12-9）「天聖元宝」で初鋳造年が西暦1023年である。

石硯（第28図40，図版12-8）原石自体の層理面を利用したもので，扁平な面に陸，海部を設け，その周辺には沈刻による青海波文が描かれている。正面以外は素材をそのまま利用している。粘板岩製である。

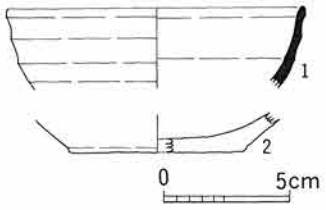
第2節　Ⅵ層上面の検出遺構と出土遺物

次にあげる資料は，層位関係から水田跡よりも古く位置付けられる。検出された遺構の概数は次の通りである。遺構の多くは調査区北側で検出されている。

畝状遺構・溝状遺構　9基・土坑　2基

A　畝状遺構（第30図，図版9）

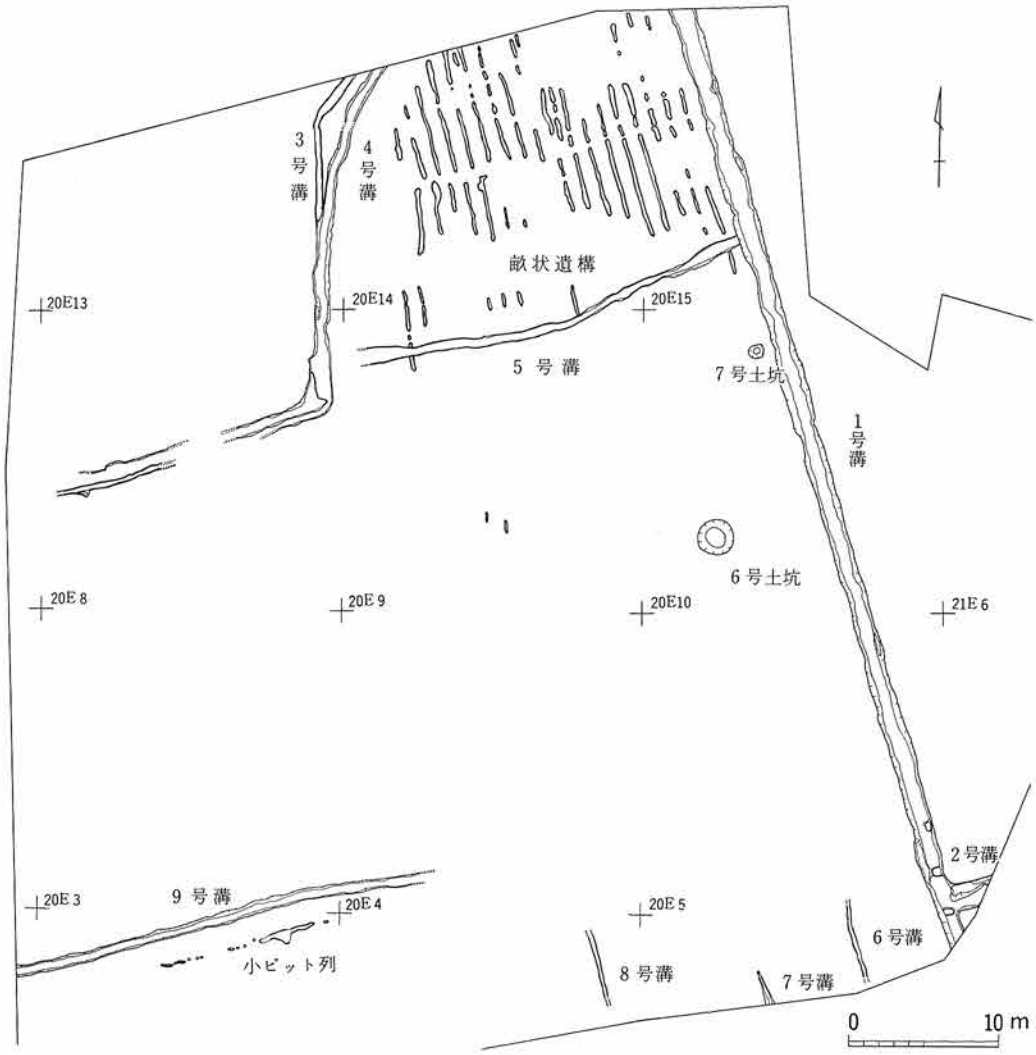
調査区北側で1～3号の各溝に囲まれた形で検出されている。第24図の柱状図BのⅣb層が覆土に相当し，これにより水田跡耕作土以前のものと把握される。



第29図　池田遺跡畝状遺構出土遺物

畝状の小溝は，幅20cm前後，確認面からの深さは5cm未満が一般的であり，溝間隔は1～1.2mである。溝の向きにはN-16°-WとN-10°-Wの2種類があり，前者は検出範囲の北・東部に分布し，後者は南西部に位置する。仮にこれらの小溝が畑耕作の結果生じたものであるならば，両者が平面的に重複しないことなどから，同時期の所産で，しかも畑内での区画を表わすものと考えられる。また，1～3号の各溝状遺構の覆土は畝状遺構のものに近似し，土地利用上での区画・排水等，両遺構の有機的関係が考えられる。

出土遺物（第29図）は，須恵器片2点，土師器片33点である。その内，土師器片は細片でしかも内外面とも風化が著しいものが多い。1は胎土が密で灰白色を呈し，内外面ともナデ整形で



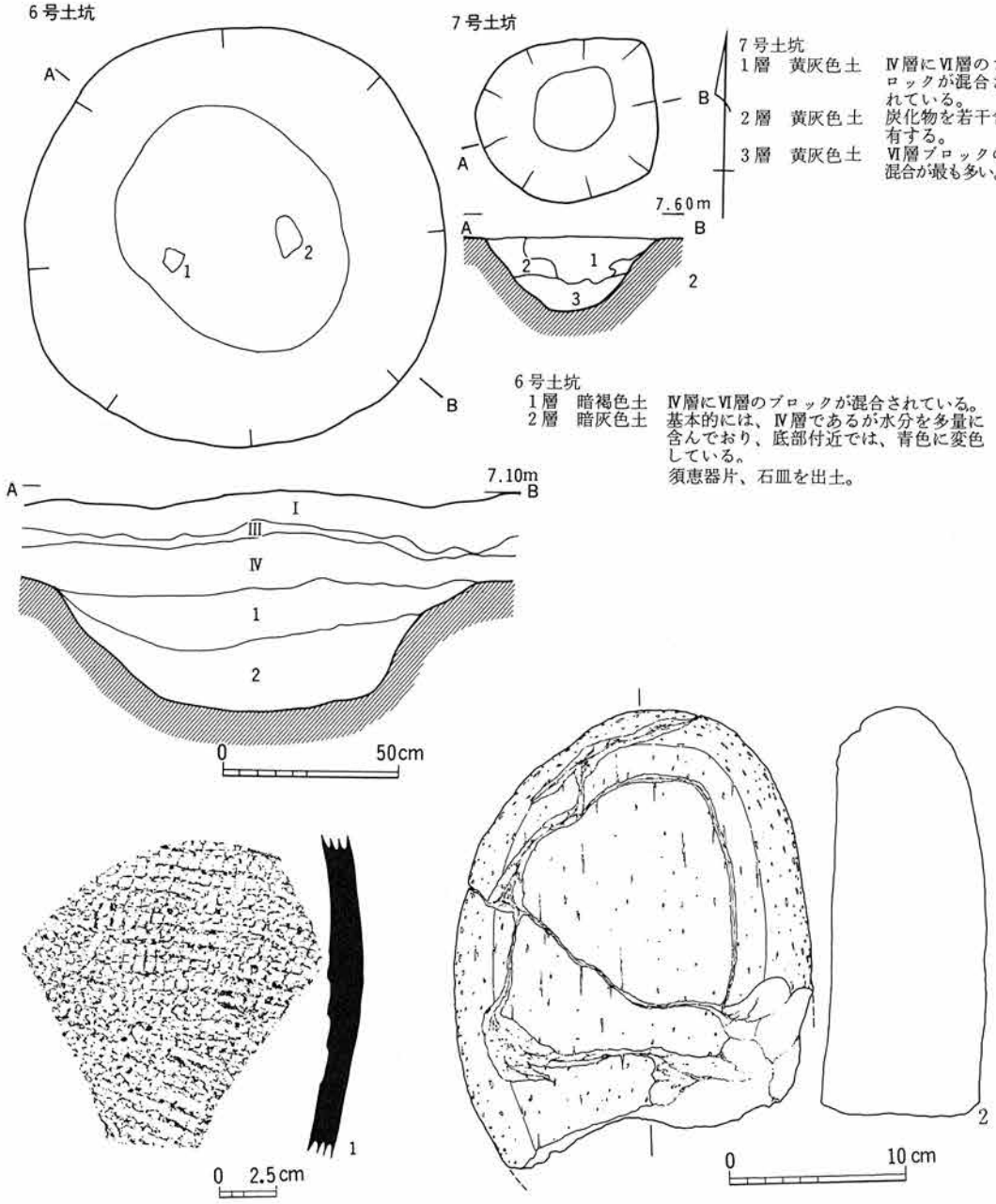
第30図　池田遺跡VI層上面確認遺構

ある。2は内外面ナデ整形，底部は回転糸切り，胎土には小礫をわずかに含み，色調は褐色を呈する。

B　土　　坑（第31図，図版9・12-10　11）

調査区内で2基検出されている。6号土坑は底部より須恵器の胴部破片（1）と石皿（2）が1点ずつ出土している。1は，外面が格子目叩きで，内面は叩きの後すり消しが加わっている。また，内外面とも黒色の付着物が目立つ。2は，長楕円形の輝石安山岩の自然礫を利用したもので，偏平な一面に使用面を有する。礫全体は，強い火気を受けたと思われ，大小のひび割れが多く，周辺には煤状の付着物がみられる（註4）。

7号土坑には，径20cmほどの自然礫が1点，底部に接して出土している。



第31図　　池田遺跡土坑（Ⅳ層）

第3表　池田遺跡土坑属性表

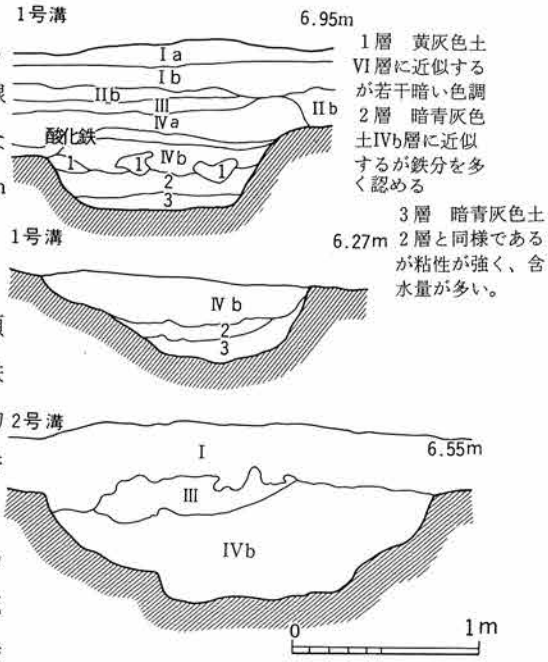
土坑No.	検出区	平面形	開口部径	底部径	深さ	出土遺物
6号土坑	20E10Ⅲc	円形	120cm	70cm	36cm	須恵器片1点・石皿1点
7 〃	20E10Ⅳi	〃	51	33	21	自然礫1点

C　溝状遺構（第32・34図，図版10）

1～9号の9基検出されている。**1号溝**は，調査区北東より南東隅にかけて，ほぼ一直線に走る。底部のレベルは北から南へと低くなり，勾配はおよそ1°5′である。溝幅は1.5m前後で深さは確認面より0.4mを計る。また，断面形は偏平なU字形を呈する。

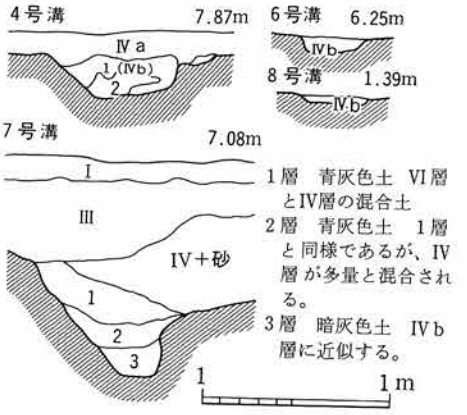
出土遺物（第34図，図版13-1～5）は，須恵器片22・土師器片85・珠洲系陶器片1・鉄製品5の計113点が出土している。また，遺物のほとんどが覆土上層よりの出土であり，若干数下層に含まれる。

1は，底部回転糸切りの後に，外面底部の外縁から胴部立上がり部分まで，篦削りが施されている。高台は，貼り付けであり外縁接地となっている。色調は灰白色，胎土は密であるが，焼成は悪い。2は底部回転糸切りの坏である。色調は，内面橙色，外面灰色であり，胎土は，密，焼成は悪い。3～6は土師器の坏であり，4・5は底部回転糸切りである。器形は3が底部から胴部にかけて内彎気味に立上がり外に広がる。6は，底部がゆるい丸底と推定され，胴部に稜をもつ土師質土器の皿である。色調は3が橙色，4は黄橙色，5は灰白色，6は褐色であり，胎土には一様に細粒を含む。焼成は悪い。7～10は甕の破片である。7は口頸部が「く」の字状に外反し，口唇部内面には，おり返しの段を有する。頸部から口縁部にかけては，ナデが施され，胴部は，叩きの後，カキ目調整が施されている。色調は青灰色，胎土には細粒を含み，焼成は堅緻である。9・10は，外面叩きの後，カキ目調整が施されている。色調は，8の外面が青灰色，内面は灰色，9・10は青灰色，胎土は一様に白色の細粒を含む。焼成は堅緻である。11は，9条1単位とする櫛歯状工具により卸し目を入れた擂鉢である。色調は青灰色，胎土には白色の細粒を多く含み粗い。12は断面が方形の釘と思われる。

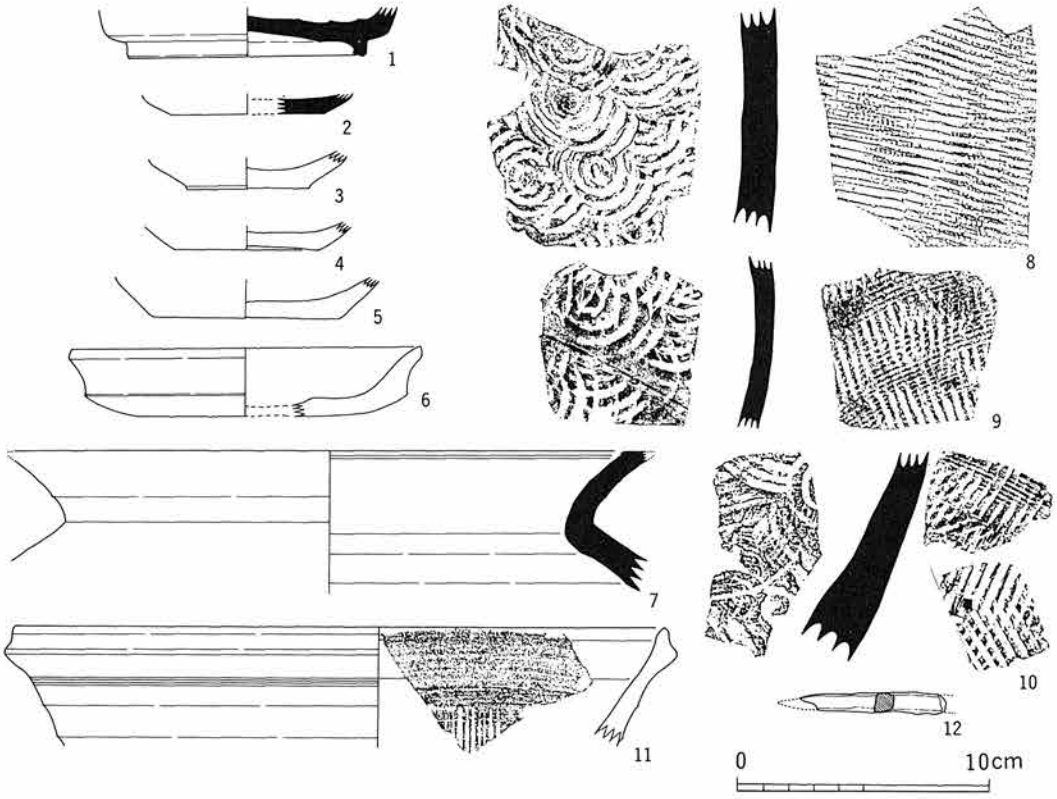


第32図　池田遺跡1・2号溝断面

2号溝は，21E1Ⅰaで1号溝に直交し北東へ伸びる。溝幅は1.9m前後で，深さは確認面より0.5mである。断面形は偏平なU字形を呈する。層序観察では，水田耕作土は存在せず，両者の新旧関係は明瞭



第33図　池田遺跡4・6～8号溝断面



第34図　　池田遺跡１号溝出土遺物

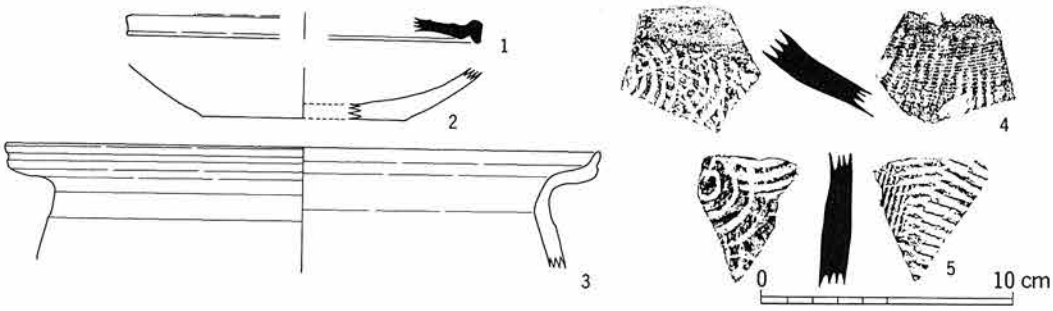
でないが，１号溝とは，規模・覆土などに近似性があり，両者の同時性・有機的結びつきが考えられる。遺物は出土していない。

3・4号溝は，調査区北部から始まり，20E13Xｃで重複し20E８Xｇ区までほぼ真南に進み，西方へ屈曲する。屈曲部より西方へは３号溝の消滅，４号溝との重複が考えられるが，断面観察ではそれらの区別が明確にできなかった。溝幅は0.9m前後，深さは確認面より0.2mであり，断面形は偏平なU字形を呈する。

出土遺物（第35図）は，20E８Xｇｈ付近でのものが主で，３・４号溝の重複がみられる。したがって，個々の遺物がどちらの溝にともなうかは看取できなかった。そこで，両者を一括して説明する。遺物の内訳は，須恵器片４・土師器片39・灰釉陶器片１（水田跡出土の資料20と接合関係にある）である。

１は，縁部が高くなる坏蓋である。色調は青灰色，胎土は密で焼成は堅緻である。２は土師器の坏で，内外面とも風化による剝落が著しい。色調は橙色。３は胴部に横位のカキ目が施されている。色調は黄褐色，胎土には小礫を含み，焼成は悪い。４・５は甕の破片であり，色調はそれぞれ青灰色，胎土は密で，焼成は堅緻である。

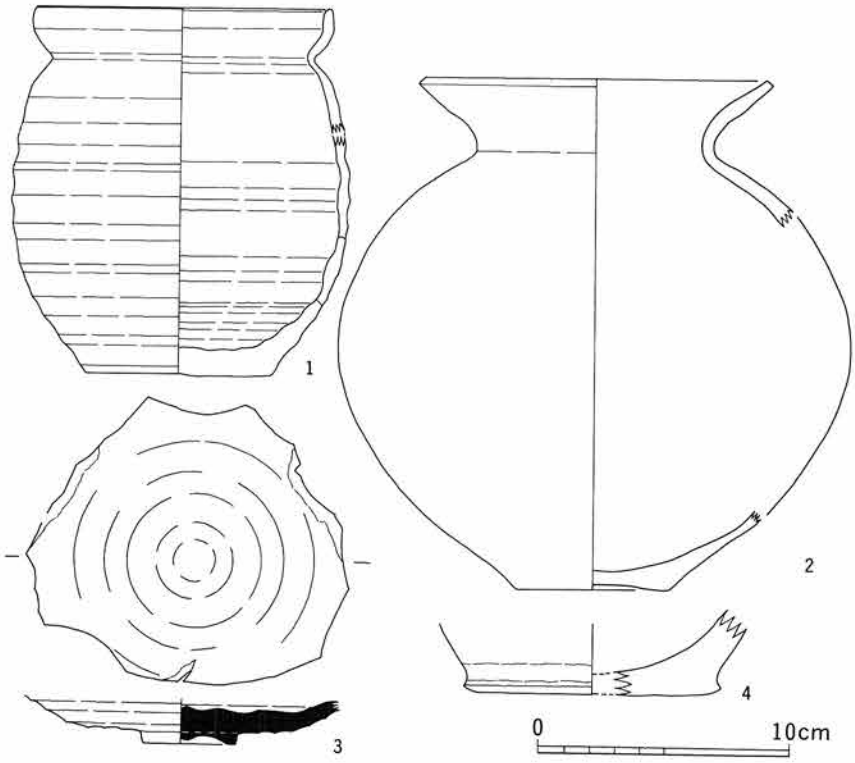
5号溝の覆土はⅦｂ層に近似するため１号溝との新旧関係をとらえることはできなかった。



第35図　池田遺跡3・4号溝出土遺物

溝幅は0.6m前後，深さは確認面より5㎝前後である。

6・8**号溝**は，それぞれの溝幅が0.6m前後，深さは確認面より5㎝前後である。7**号溝**は，溝幅が0.5m前後，調査区南側に向って深くなり，勾配は約12°である。9**号溝**は，大畦畔の主軸に沿う形で検出されている。畦畔との断面観察においても両者を分離することができず，同時に構築された可能性がある。また南側に沿う形で小ピット列が検出されており，大畦畔構築時の土留め用の杭痕とも考えられるが，9号溝同様，詳細は不明である。溝幅0.55m前後である。



第36図　池田遺跡VI層出土遺物

第３節　VI層出土遺物（第36図，図版13-６・７）

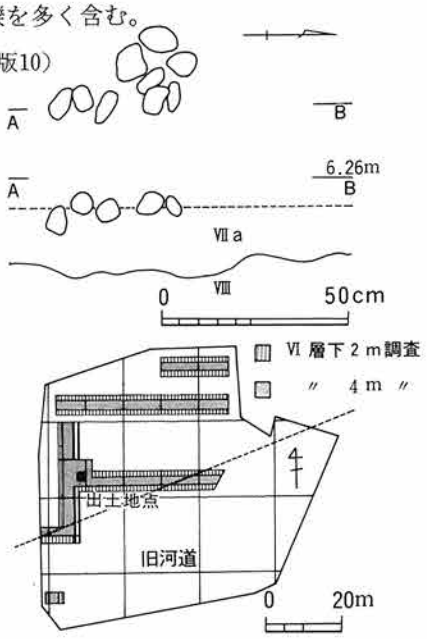
遺物は，IV層との境でVI層にくい込む形で出土している。出土区はIV層出土のものと同様に調査区北部が主体である。また，遺物量は非常に少く，須恵器片２・土師器片30のみである。

１は20Ｅ10VIIｊで残存率約1/2程度で出土している。小型のロクロ土師器の甕である。内面の口縁部と底部付近には煤状の付着物が観察される。色調は灰白色。胎土は密で，焼成は比較的良い。２は古式土師器の甕である。全体的に風化が著しく細かい整形は不明である。色調は黄橙色，胎土には若干小礫を含む。３の天井部外面は，つまみ貼り付け時にナデが加えられている。また天井部内面は，よく磨滅しており，しかも炭状の付着物が散見され転用硯と考えられる。色調は暗青灰色，胎土には小礫を若干含み，焼成は堅緻である。４は古式土師器の壺または甕の底部破片である。色調は灰褐色，胎土には小礫を多く含む。

第４節　VIIａ層の検出遺構と出土遺物（第37図，図版10）

昭和57年度の確認調査時に20Ｅ12Ｘａにおいて，縄文時代晩期の土器が出土したことから同層の調査を実施した。調査は，調査区北側よりトレンチ方式によって行われたが，調査区南半分は古墳時代以前の旧正善寺川と思われる河道が発見され，調査の対象からはずした。

発見された遺構と遺物は，20Ｅ８IV・Ｖｃで，集石１とそれを構成する礫のみであった。礫は角閃石安山岩11点と凝灰岩１点であり，長軸８～15cm程度の楕円形の自然礫である。角閃石安山岩のものの中に１点だけ火気の影響と思われる黒ずんだものが存在したが，まわりに炭化物・焼土等は発見できなかった。



第37図　池田遺跡集石（VIIa層）

第Ⅴ章　プラント・オパール分析（分析結果に関するコメント）

1.　Ⅰ層からⅡ層に稲プラント・オパールのピークが認められ，Ⅱ層堆積時から現在まで，ほぼ連続的に稲が栽培されたものと考えられる。

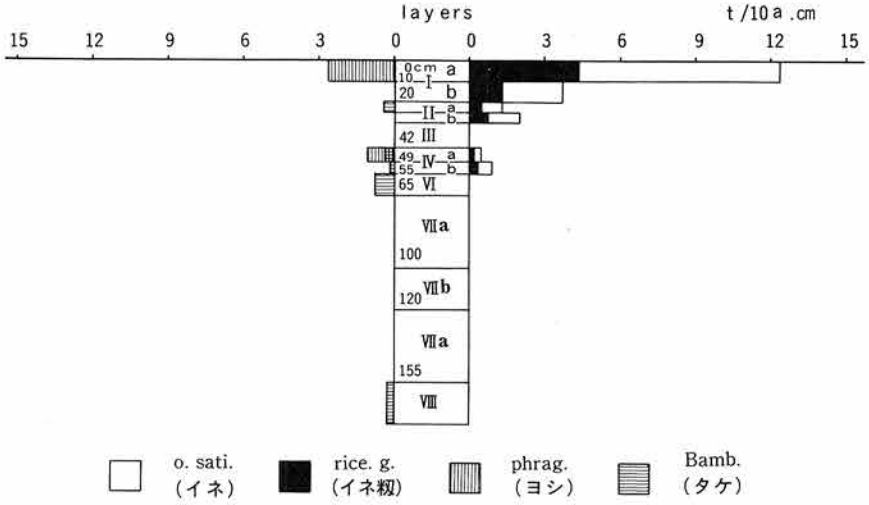
Ⅲ層では全く稲が検出されず，Ⅳ層で稲プラント・オパールのピークが現われる。このことから，Ⅳ層もまた，稲が栽培された土層であることがわかる。

2.　野草類は少なく，Ⅶ層以前の土層は洪水堆積物と思われる。

3.　Ⅳ層水田上面で採取した試料からⅣ層水田で生産された種籾乾物量を推定してみた。ただし，この場合，収穫様式を穂刈として計算した。中世であれば，おそらく株刈に移行しているはずであり，したがって，ここで計算された値より実際には多いことになる。

籾生産総量＝0.315 t／10 a・cm×13cm（Ⅳ層厚）≒4.1 t／10 a

ただし，C・Vに（変動係数）は75.4％と大きく，これはⅢ層堆積時に作土層の上面の一部が削られたためと思われる。



第38図　　池田遺跡プラント・オパール柱状図（20E14区）

グラフの見方について

1.　layers　：採取地点の土層模式図，（　）内の数字は土層番号，左すみの小数字は表層からの深さをcmで表したもの。

2.　O. sati.　：Oryza　sativa.　栽培稲の地上部乾物重。

rice. g　：Oryza　sativa の穎果（籾）乾物重。

Phrag.　：Phragmites　communis.　ヨシの地上部乾物重。

Bamb.　：Bambsaceae.　タケ亜科の地上部乾物重。

第4表　池田遺跡（20E14区）におけるプラント・オパール定量分析結果

層　名	植物体乾重（t／10a・cm）			
	イ　ネ（O. Sati.）	イ ネ 籾（rice g.）	ヨ　シ（Phra g.）	タケ亜科（Bamb.）
Ⅰa	12.335	4.322	2.643	0.000
Ⅰb	3.702	1.297	0.000	0.000
Ⅱa	1.291	0.452	0.000	0.421
Ⅱb	2.031	0.711	0.000	0.000
Ⅲ	0.000	0.000	0.000	0.000
Ⅳ－1	0.455	0.159	1.072	0.371
Ⅳ－2	0.895	0.314	0.000	0.146
Ⅵ	0.000	0.000	0.000	0.782
Ⅶa	0.000	0.000	0.000	0.000
Ⅶb	0.000	0.000	0.000	0.000
Ⅶa	0.000	0.000	0.000	0.000
Ⅷ	0.000	0.000	0.000	0.260

第5表　池田遺跡（20E 8区）におけるプラント・オパール定量分析結果

層　名	植物体乾重（t／10a・cm）			
	イ　ネ（O. Sati.）	イ ネ 籾（rice g.）	ヨ　シ（Phra g.）	タケ亜科（Bamb.）
Ⅳ—(1)	2.136	0.748	0.000	0.174
〃 (2)	0.000	0.000	0.000	0.289
〃 (3)	1.380	0.484	0.651	0.135
〃 (4)	0.460	0.161	1.084	0.150
〃 (5)	1.304	0.457	0.615	0.128
〃 (6)	1.345	0.471	0.000	0.165
〃 (7)	0.000	0.000	0.000	0.330
〃 (8)	0.897	0.314	1.057	0.000
〃 (9)	1.020	0.358	0.802	0.111
Ⅳ－1	0.455	0.159	1.072	0.371

各植物体重はそれぞれの植物により異なる珪酸体密度係数と土壌中から検出された各植物に由来するプラント・オパール密度をもとに算出されたものである。

3.　土柱模式図の右側に栽培植物，同左側に野，雑草を示している。単位t／10a•cmはその土層の厚さ1cm，面積10a（1000m²）に包含されるプラント・オパールの数から推定した各植物の乾物量をt（トン．1×10³kg）で表したものである。例えば，その土層が10cmの厚みであると，グラフで示された値に10を乗じた量の植物体がその土層の堆積期間中に生産されたことになる。生産量が年間生産量ではないことに注意されたい。

4.　水田跡が埋蔵されている土層ではO. sati.の値がピークを形成する場合が多い。土層の堆

積状況により一概にいえないが，水田跡の層位はこのピークと一致するのが通例である。

5. Phrag.（ヨシ），Bamb.（タケ）の乾物量変遷はその地点における土壌水分状況の時代的変遷を知るうえに役立つ。ヨシは比較的水分の多い湿った環境に生育し，タケ（ササ）は比較的乾燥した環境下で繁茂する。両者の消長をみると，その地点の乾湿変化を推定できる。

6. 最下段は遺跡名，採取地点，採取年月日を示す。

第Ⅵ章　花　粉　分　析

試料採集地点と層序

花粉分析のための試料は池田遺跡から採集した。その採集地点は20E14IIIhの北側の壁面に位置する。壁面の層序は，上位から下位に，Ⅰa層　灰黒色シルト質粘土（現在の水田耕土・10cm）・Ⅰb層　青灰色シルト質粘土（10cm）・Ⅱa層　褐灰色シルト質粘土（6cm）・Ⅱb層　灰色シルト質粘土（6cm）・Ⅲ層　淡灰色細砂質粘土（15cm）・Ⅳ層　淡灰色粘土（15cm）・Ⅵ層　黄灰色粘土（25cm以上）からなっている。

最下位のⅥ層黄灰色粘土は，その色調から判断して，時代はやや古く，静水域の堆積物であろう。その上位のⅣ層淡灰色粘土は近世初頭の水田耕土と推定され，有機物の細片を含んでいる。さらに，その上位のⅢ層・Ⅱb層・Ⅱa層・Ⅰb層は，おそらく沖積面に発達する後背湿地の堆積物であろう。試料は，この壁面から第39図に示されるように，14個を採集した。

試料の処理と検鏡

採集された各試料について，約10gをとり，つぎの過程で処理を施した。

弗化水素酸による処理→水洗→カセイカリ10%溶液による処理→水洗→塩化

亜鉛飽和溶液による比重選別→水洗→アセトリシス処理→水洗→封入

処理の過程では，汽水ないしは海水域の堆積物は，マンガンと推定される微粒子が混入しており，王水（硝酸1と塩酸3の混合液）による処理を必要とするが，今回はこのような処理を要しなかった。したがって，試料採集地の地層は淡水域の堆積物と考える。

検鏡にあたっては，木本種の花粉粒が200個体以上になるように努力した。しかし，5・9・11・12・13・14番の試料は花粉粒の含有量が極めて少なく，木本種だけで200個体まで数えることができなかった。けれども草本種まで含めると200個体以上に達し，14番以外は400個体以上に達している。しかし，8番の試料は花粉粒の含有が極端に少なく，分析にたえるほどの個体数を検出することができなかった。

分析の結果

分析図の表現

分析結果を表現するにあたっては，まず，木本種の個体数の合計を基数とし，それによって

木本種のみの出現率を計算した。つぎに，草本種については，木本種と草本種の合計を基数として出現率を計算した。さらに，シダ類や蘚苔類の胞子については，一括して不明種も含めた全数を基数として出現率を計算した。

なお，検鏡の際に，ワイドの接眼レンズ，1.8cm角のカバーグラスで，1走査線上に出現した花粉粒の数の平均をもって，試料の相対的な花粉含有率を表現した。

分析結果

分析結果は第39図a・bおよび第40図に示すとおりである。木本種では *Pinus*（マツ属）・*Cryptomeria*（スギ属）・*Fagus*（ブナ属）が層準によって著しく高率で出現している。これにつづいて，*Tsuga*（ツガ属）・*Quercus*（コナラ属）がやや高率で出現している。

草本種ではGramineae(いね科)が，ほぼ全層準にわたって圧倒的な高率で出現している。しかし，その他の草本種は極めて低率である。その低率な草本種のなかでも，*Fagopyrum*(ソバ属)がほぼ全層準にわたって出現している点が注目される。

全体的な出現率の変化の傾向をみると，針葉樹種は表層で高率であり，広葉樹種は全層準にわたって低率であるが，表層に向って低率になっている。草本種は逆に全層準にわたって高率であるが，下層でやや低率である。さらに，シダ類と蘚苔類の胞子は全層準にわたってPolypodiaceae(ウラボシ科)のシダ類が優占しているが，下層で著しく高率であり，表層に向って著しく低率になっている。

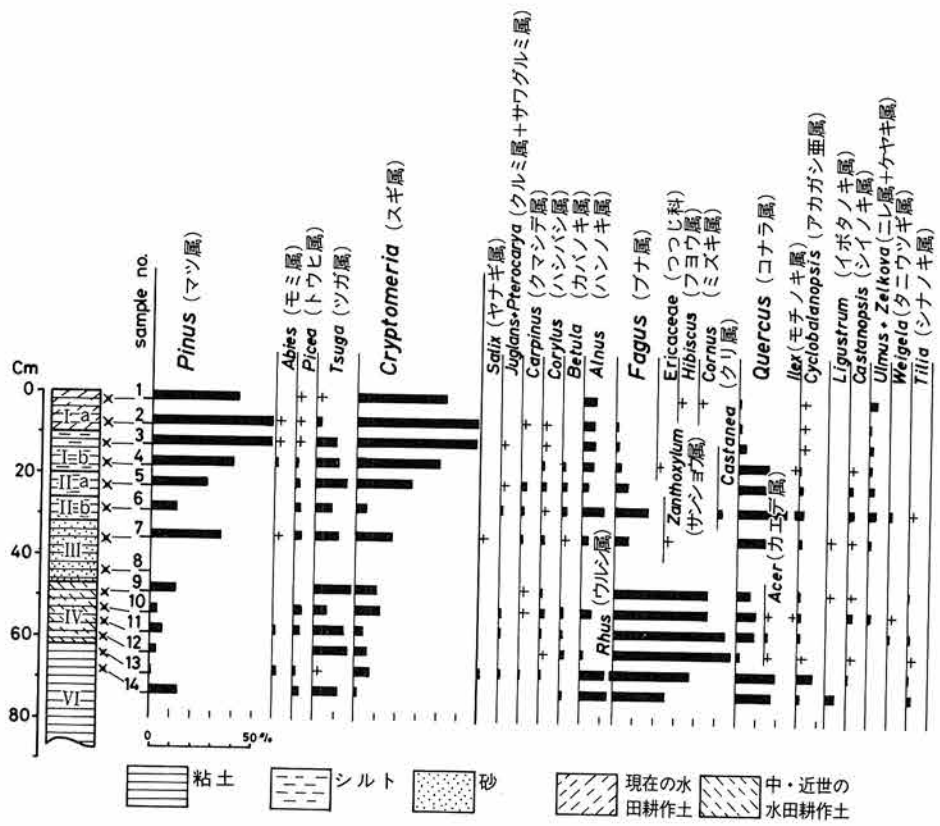
考　　察

植生と古気候について

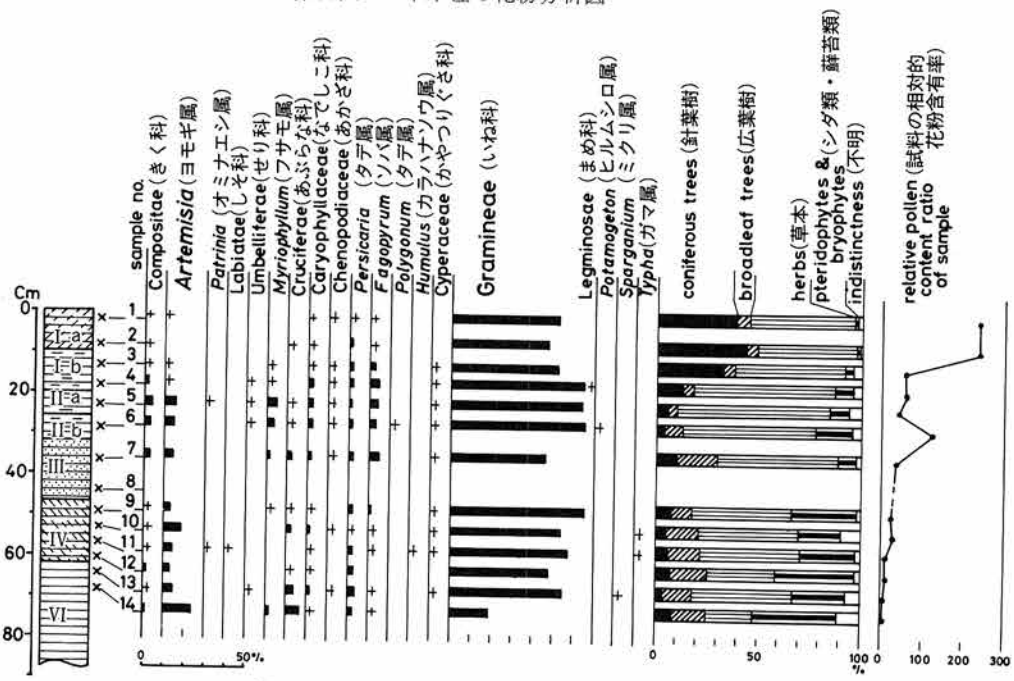
分析結果によれば，*Tsuga*（ツガ属）がやや高率で出現するが，*Abies*（モミ属）・*Picea*（トウヒ属）・*Betula*(カバノキ属)などの寒冷気候を代表する木本種の出現率が極めて低率であること，高率で出現する *Pinus*（マツ属）・*Cryptomeria*（スギ属）・*Fagus*（ブナ属）・やや高率の *Quercus*（コナラ属)などは冷温帯を代表する樹種であることからみて，古気候は現在と大差のない冷温帯の気候であったと推定される。したがって，高田平野の周辺の丘陵地帯には，ブナやコナラによって代表される落葉広葉樹にマツやスギ等の針葉樹を混じえた森林が発達していたものと推察される。

また，*Alnus*（ハンノキ属）や，*Salix*（ヤナギ属）などの湿地性の木本種の花粉が低率であり，Gramineae（イネ科）が多産し，*Artemisia*（ヨモギ属）がやや高率であることからみて，平野の表面は相当に開放的な環境条件が発達していたものと推定される。

さらに，下半部で *Fagus*（ブナ属）が優占し，上半部では *Pinus*（マツ属）と *Cryptomeria*（スギ属）が優占する点については，気候変化よりも，人為的な影響を考慮するのが妥当であろう。すなわち，近世初頭までは高田平野周辺の丘陵地帯は，ブナ林の卓越する自然植生が発達していたが，その後，自然林の破壊が進みブナ林が減少するとともに，丘陵地帯ではアカマツ，海岸地帯ではクロマツが増加し，とくに丘陵地帯ではスギの植栽が進み，今日に至ったものと推



第39図 a　木本種の花粉分析図



第39図 b　草本種の花粉分析図と花粉・胞子の出現頻度

定される。

イネ科花粉について

Gramineae（いね科）の花粉については，科レベルの識別は容易であるが，属または種間の識別は困難であり，とりわけ，粒径のみによって，このなかから *Oryza*（イネ属）を同定することは，はなはだ危険である（中村，1974）といわれている。

しかし，このような問題点を考慮しながらも，弥生時代遺跡からの炭化米の出土，現生種と化石種の粒径の頻度分布図にあらわれたピークの類似から，*Oryza*（イネ属）花粉の混入を推論する方法も試みられている（安田，1973）。

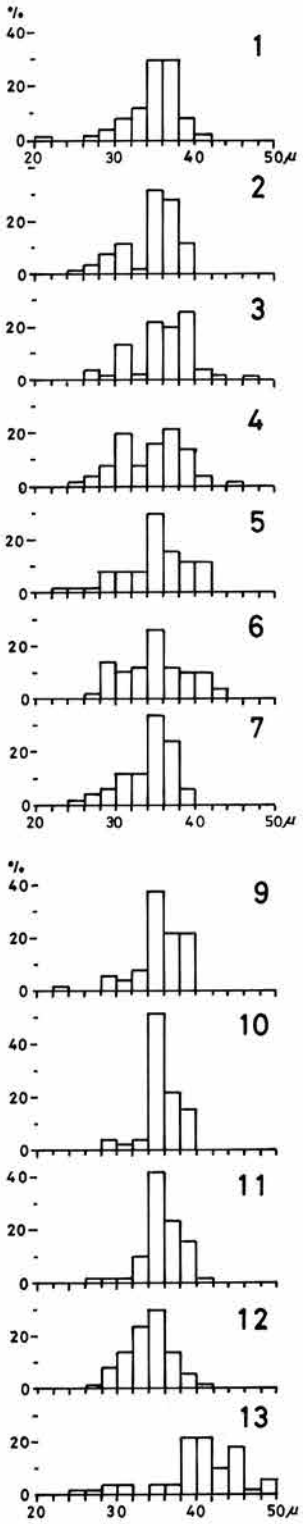
それで，今回は草本種のなかで圧倒的な高率で出現するGramineae（いね科）花粉の内容を検討するために，そのなかから無作為に50個体をとり，粒径を測定して頻度分布図を作製した。その結果は第40図に示すとおりである。これによれば，表面の現在の水田耕土（試料番号1・2）では，35～38μにピークが出現している。水田では，イネの花粉生産量が圧倒的に卓越していることを考えれば，この35～38μのGramineae（いね科）の花粉のなかには，*Oryza*（イネ属）の花粉が混入しているとみてよいであろう。この35～38μのピークは，表面の水田耕土だけでなく，その下位の試料番号12まで明瞭に出現しており，近世初頭の水田耕土と考えられ淡灰色粘土層の基底まで *Oryza*（イネ属）花粉の混入していることが推察される。

ソバの花粉について

草本種ではGramineae（いね科）のほかに，*Fagopyrum*（ソバ属）の花粉が出現している点が注目される。これはおそらく，栽培種のソバ（*Fagopyrum esculentum*）に由来するものであろう。ソバは，日本へは中国から朝鮮半島をへて8世紀までには渡来していたらしい（星川，1978）といわれている。第39図bによれば，近世初頭の水田耕土と推定される淡灰色粘土層の下位の地層からも産出しているので，高田平野の縁辺部の洪積台地や沖積地の高燥な自然堤防の上では，ソバの栽培が相当に古くからおこなわれていたものと推定される。

堆積環境について

上下の水田耕土にはさまれた層準で *Myriophyllum*（フサモ



第40図　イネ科花粉の粒径頻度分布図

属)が集中して産出している点が注目される。これは池沼・湿地・溝などに自生する多年生水草で，上記の層準の地層は後背湿地に形成された，池沼性水域の堆積物ではないかと推察される。

第Ⅶ章　ま　と　め

今回の調査は，当初，推定された遺跡範囲のおよそ1／3を実施するに留ったが，中世から近世初頭と考えられる水田跡検出を中心に数多くの成果をあげることができた。また，その反面，水田跡検出の遅れのため調査区内での平面的な広がり，正確な微地形を検出することができなかったことも事実である。これら２・３の問題はあるものの，今後，春日山城を中心とする周辺地域内での土地利用と生産技術の水準等を検討するうえで重要な資料呈示となろう。

以下，今回の調査結果を簡単に整理する。

Ⅳ層の出土遺物

古墳時代から中世のものが出土している。その中でも，中心は平安時代前半と中世中葉となろう。前者の遺物として須恵器の無台坏は底部篦切りのもの（１・２・５）が主体を占め，底部と体部の境が不明瞭なものが多く，内面の凹凸が著しい。口径は復元できるもので12cm前後，底径は7.5cm前後，器高は３cm前後である。糸切りのものは全体を知るものはないが，細片から底部と体部の境が明瞭で，器体は篦切りのものに比べ若干，外側に開いて立ち上がる。有台坏は，底部篦切りのものに，外面の底部と体部の境が明瞭なものと不明瞭なもの(６)があり，器体はほぼ直線的に立ち上がる。内面は平坦で器壁は一定している。糸切りのものは，篦切りのものとほぼ同様な特徴を示す。

灰釉陶器(20)は，高台接地面に籾または，わら状の圧痕が若干認められるものの，器形から丸石２のものに近似し，11世紀中葉のものと考えられる。

次に中世の遺物(註１)としては，珠洲系陶器が主体を占め，若干の陶磁器，越前系陶器が含まれる。珠洲系陶器には編年的（吉岡，1982）にⅣ・Ⅴ期に属するもの（25～28・36～38）とⅡ期に属するもの（26・34・35）がある。量的にはⅣ・Ⅴ期に属するものが圧倒的に多い。陶磁器は，14世紀に属するもの（29～31）と17世紀前半に属するもの（33）がある。また，石硯（40）については，青海波文の沈刻・形態より13～14世紀のものと推定される（註６）。

Ⅵ層の出土遺物

遺物は非常に少なく，古墳時代後半（２），平安時代後半（１・３）がある。

Ⅶ層の出土遺物

昭和57年の調査で縄文時代晩期後半の土器が発見され，今回の調査で集石が一基検出されている。しかし，集石付近から土器片等，両者を積極的に結びつける資料は出土していない。また，層序観察において，本層が，短期・長期を問わず，生活面となった痕跡も見出すことができない。したがってここでは，事実の記載にとどめ，今後の資料の増加を待ちたい。

以上，各層出土遺物の時期的なことを中心に概観してきたが，IV・VI層出土のものにかなりの時期的な幅があることが分かる。また，古墳時代から平安時代にかけての遺物包含層は，本来，層序図A（第24図）のVIb層にみられるように，非常に薄く堆積していたものと思われ，これらの期間，生活面は，ほぼ同一レベルに存在したと考えられる。その後，水田耕作により，前時代の遺物はローリングを受け，耕作土中に混合されたものと推定される。

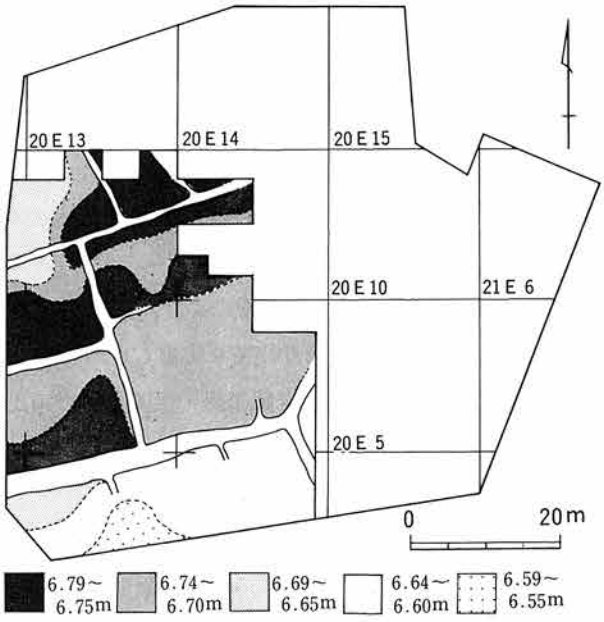
水田跡の時期，形状，広がりについて

前文において水田跡耕作土中に前時代の遺物を含む可能性が指摘された。したがって，単純に耕作土中に含まれる遺物の時代幅を水田耕作期間とすることはできない。そこで，ここでは耕作土出土の遺物の中で最も時期の新しいものを水田跡の下限とし，水田跡によって破壊された遺構の出土遺物によって上限を推定したいと考える。

水田耕作土出土の遺物で，最も新しい時期のものに唐津焼片(33)があげられる。また，III層は，57年度の調査では，遺物が検出されておらず，その上層であるI・II層には，近・現代の陶磁器類が含まれている。したがって水田耕作の下限は17世紀前半と推定されよう。同時に水田跡を覆うIII層は近世の初めに堆積したものと考えられる。なおIII層に関しては，分析の結果プラント・オパール，花粉化石の検出がなく，短期間に堆積した洪水堆積物と思われる。

上限の問題であるが，水田跡に切られている遺構のうち，最も新しい時期の遺物を出土するものに1号溝があげられる。第34図6・11は，中世の所産で，特に11は，III期（13世紀後半）に比定される。したがって水田跡の上限は，少なくとも13世紀後半以降に求められよう。

次に水田跡の形状については，特徴とされるものに大畦畔として分類された道路状遺構と，整然と区画された大規模水田の存在である。第41図は，水田耕作土上面での5㎝コンタを表わしたものである。これによると大畦畔を境にかなりの比高差が認められ，水田1枚に対しては，調査区西側に接する水田でみられるように，南が高く北が低いという状況である。これらの微地形は，用水の取入れ，排水に関係すると思われるが，何分，検出面積が狭いため，これ以上のことは判然としない。



第41図　水田跡高低図

最後に水田跡の範囲を推定してみたい。池田遺跡の東側には下江（しもえ）用水をはさみ木田遺跡が存在す

る。両遺跡は内容がまったく異なり，前者は水田・畝状遺構という生産地の色彩が強いのに対し，後者は，中世から近世にかけての建物群が検出され，居住地域と考えられる。これらは土層断面からも判断でき，第24図層序図AのIV a 層（水田耕作土）が調査区の東側ではIV b 層（遺物包含層）にとって変わっている。このことは，水田跡の東側での範囲が下江用水付近であることを示している。南側においても層序図Hにみられるように，正善寺川の手前がその範囲となろう。西側へは，国鉄信越線をはさみ，一之口遺跡が存在する。調査の所見では古墳時代から平安時代の遺物包含層が池田遺跡に比べ1m以上も高所に存在し，水田検出の大きな要因となるIII層の存在も不明瞭であった。そして中世の遺物遺構も検出されていないことから当時の生活面がつかめず，水田範囲を限定することはできない。場合によっては，近・現代の水田と重複する可能性も存在する。北側は，判断する材料に欠けるが，地形的には，調査区外，北東に向い，関川に至るまで標高が徐々に低くなり，水田跡範囲はこれに沿って伸びていくものと考えられる。

註

1. 過去に佐渡において竹田沖条里（畑野町・真野町教育委員会　1978）の調査がおこなわれているが，現存している条里の記録保存を中心に実施されたもので，今回のような，完全に埋没した水田遺構を発掘したものではない。
2. グリッドの設定，標示等は第III章第3節を参照されたい。
3. V層は一之口遺跡で確認されている層で，VI層中またはVI層上面に位置し，色調は暗灰色，主に古式土師器を包含する。本遺跡では明らかなV層が確認されておらず，他遺跡との比較のため，この層名は使用しないこととした。
4. 後の木田遺跡等の発掘の所見によると，当初，深さが1m前後で土坑としていたものの中に，断面立割り作業中，底部がさらに下方に伸び，最下部より，使用結果を物語る多量の植物遺体・遺物等が出土し，土坑から井戸に一変したものが数基存在した。これらは生活面である地盤が含水量の多い，非常に軟質な土壌のため，遺構使用時の壁ぎわの崩れによって埋没したものが，永年の地下水の影響により，変色し，壁と大差なくなるためと思われる。6号土坑の場合は，最後の立割り作業を実施しておらず，上述した状況を確認できなかった。
5. 中世の遺物に関しては吉岡康暢・伊藤正義の両氏からの御指導を賜った。
6. 石硯に関しては水野和雄氏の御教示による。

引用文献

朝倉氏遺跡調査研究所（1980）：石製品　特別史跡　一乗谷朝倉氏遺跡 XII

五島美術館（1978）：日本の陶硯

新潟県教育委員会（1984）：第VI章まとめ　上新バイパス関係遺跡発掘調査報告 I

田口昭二（1983）：考古学ライブラリー17　美濃焼　ニュー・サイエンス社，p.11～32

中村純（1974）：イネ科花粉について，とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として，第四紀研究13-4，p.188-198

星川清親（1978）：栽培植物の起源と伝播，二宮書店

畑野町・真野町教育委員会（1978）：竹田沖条里　新潟県佐渡郡竹田沖条里緊急発掘調査概報

安田喜憲（1973）：瓜生堂遺跡の泥土の花粉分析，瓜生堂遺跡II，p.76～103

吉岡康暢（1982）：北陸・東北の中世陶器をめぐる問題，庄内考古学第18号

発　掘　風　景（池田遺跡）

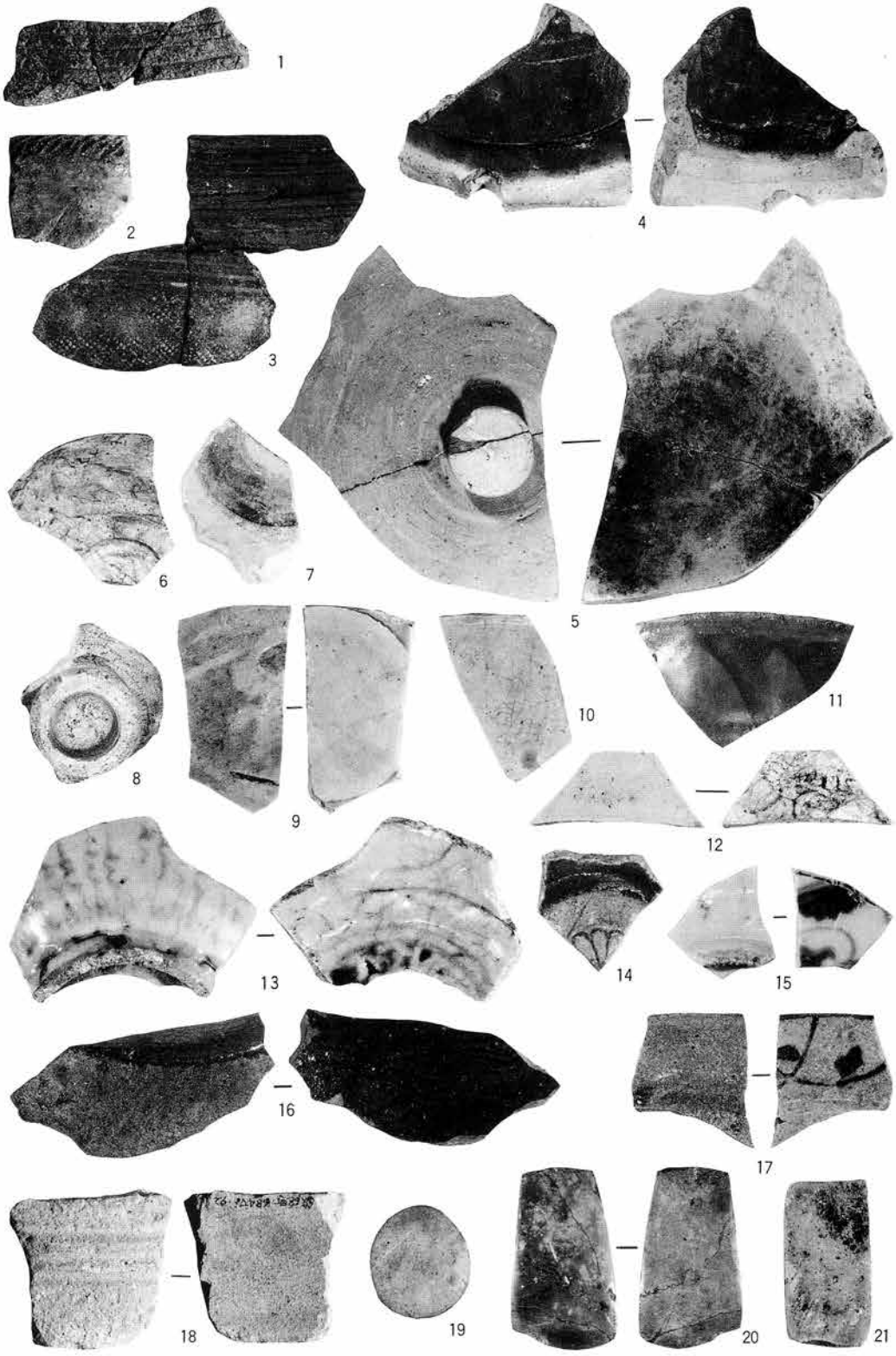
発　掘　風　景（一之口遺跡）

発 掘 風 景（八反田遺跡）

トレンチ完掘状態（一之口遺跡）

遺構検出状態（鉄砲町遺跡）

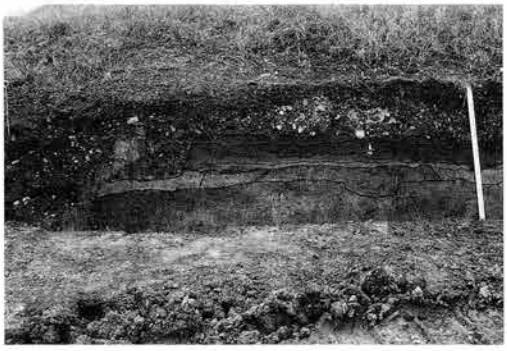
遺構検出状態（鉄砲町遺跡）



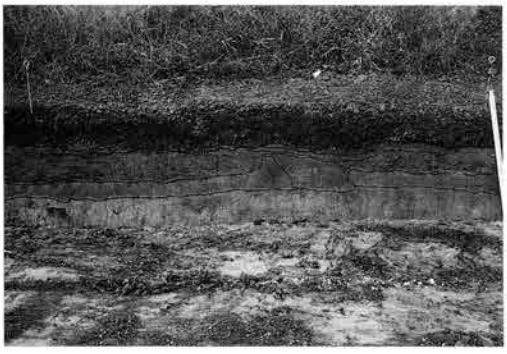
春日・木田地区 出土遺物（$\frac{1}{2}$）

遺 跡 遠 景（西から）

土層断面（20E2Ⅹ f・g）

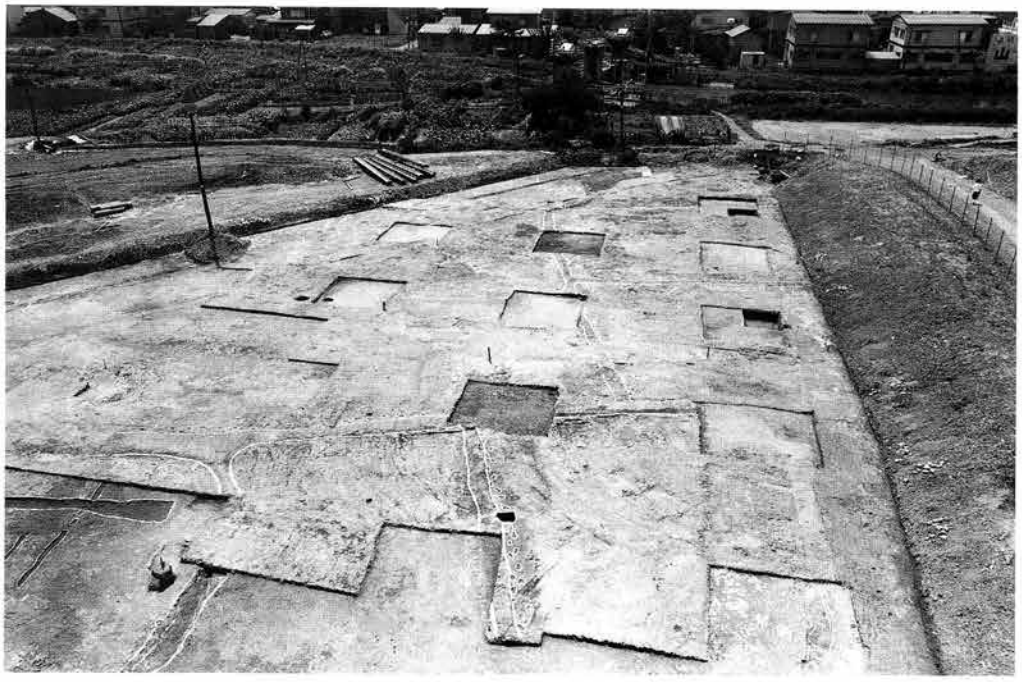


土層断面（20D22Ⅹ hi）

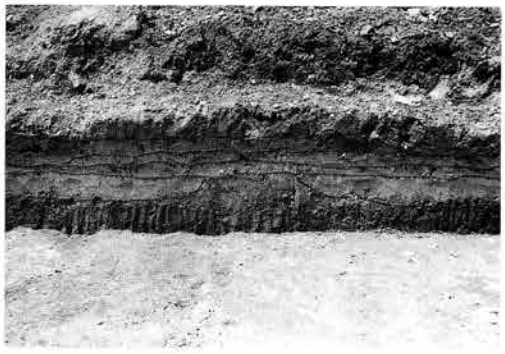


土層断面（20E7Ⅹ c）

土層断面（20E13Icd）

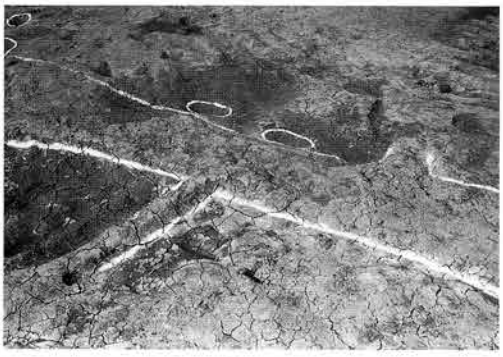


水 田 跡 遠 景



土層断面（20E14Ⅱi）

畦畔（20E4Ⅰ・Ⅱa）



畦畔（20E8Ⅳb）

畦畔（20E8Ⅳd）

畦畔と足跡（20E4）

足跡（20E3Ⅷg・h）

畦畔断面

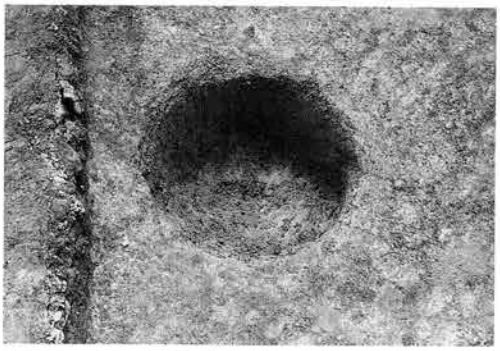
畦畔断面

大畦畔断面

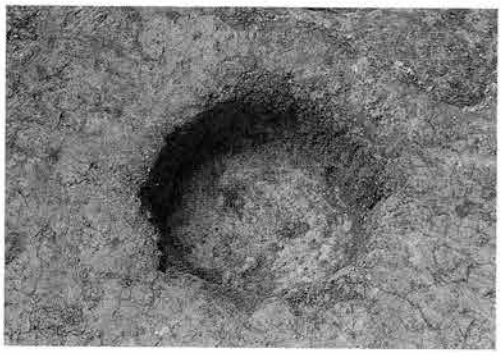
小ピット列

水田跡発掘風景

1号 土坑



4号 土坑



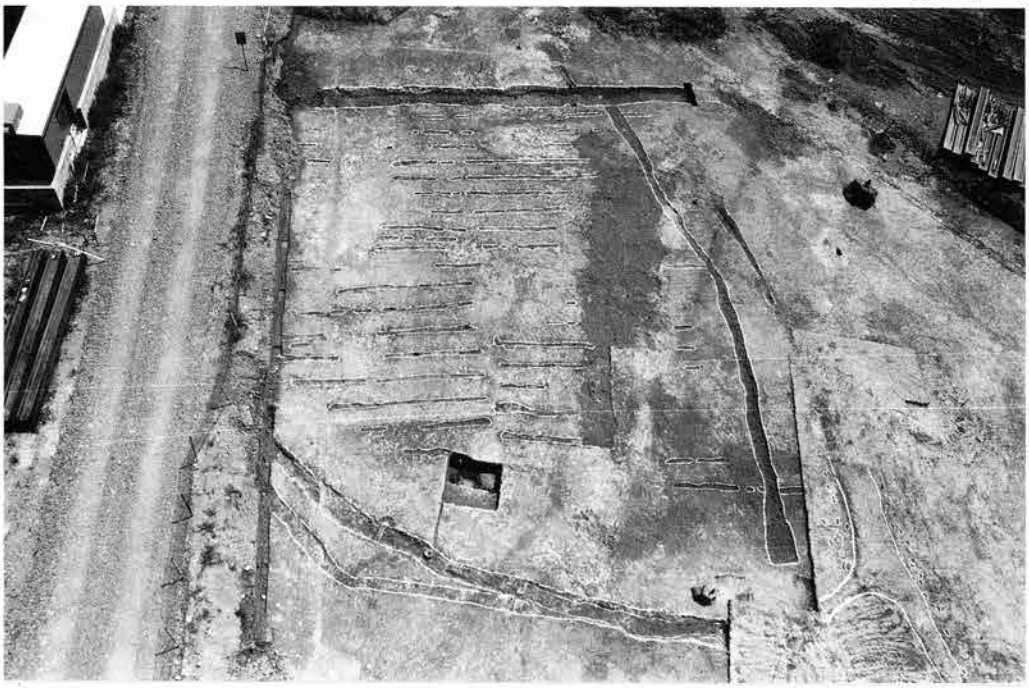
5号 土坑

3号 土坑断面

足跡石膏型取り作業

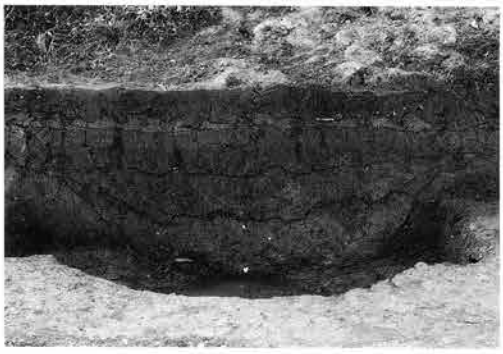
プラント・オパール分析採土作業

畝状遺構発掘風景



畝状遺構遠景

6 号 土坑



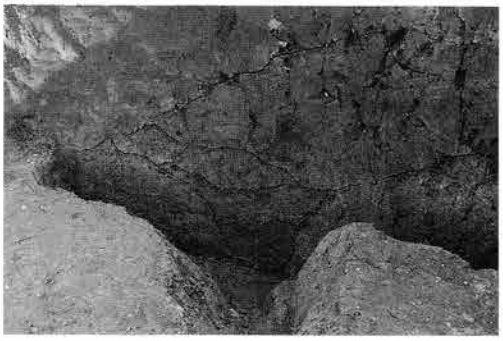
6 号 土坑断面

7 号 土坑

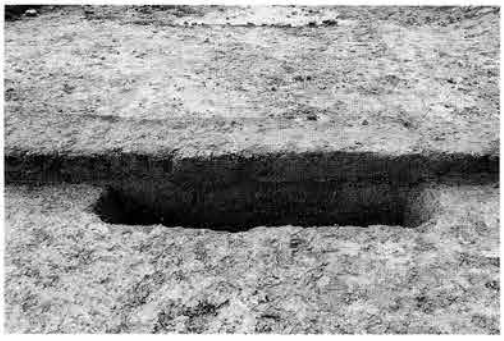
7 号 土坑断面

1号 溝

1号 溝断面（20E15Ⅱi）



7号 溝断面



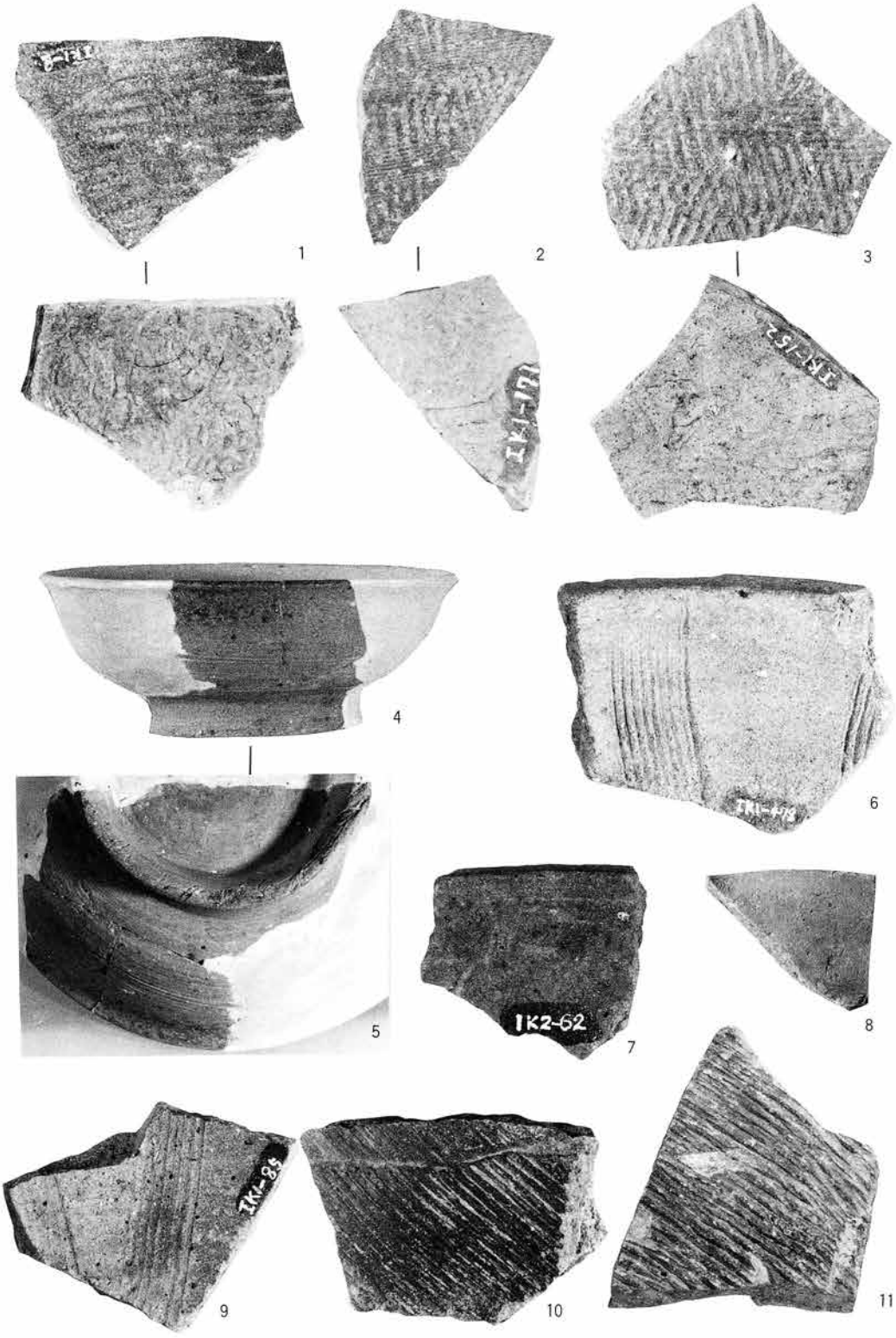
4号 溝断面

Ⅶ層 発掘風景

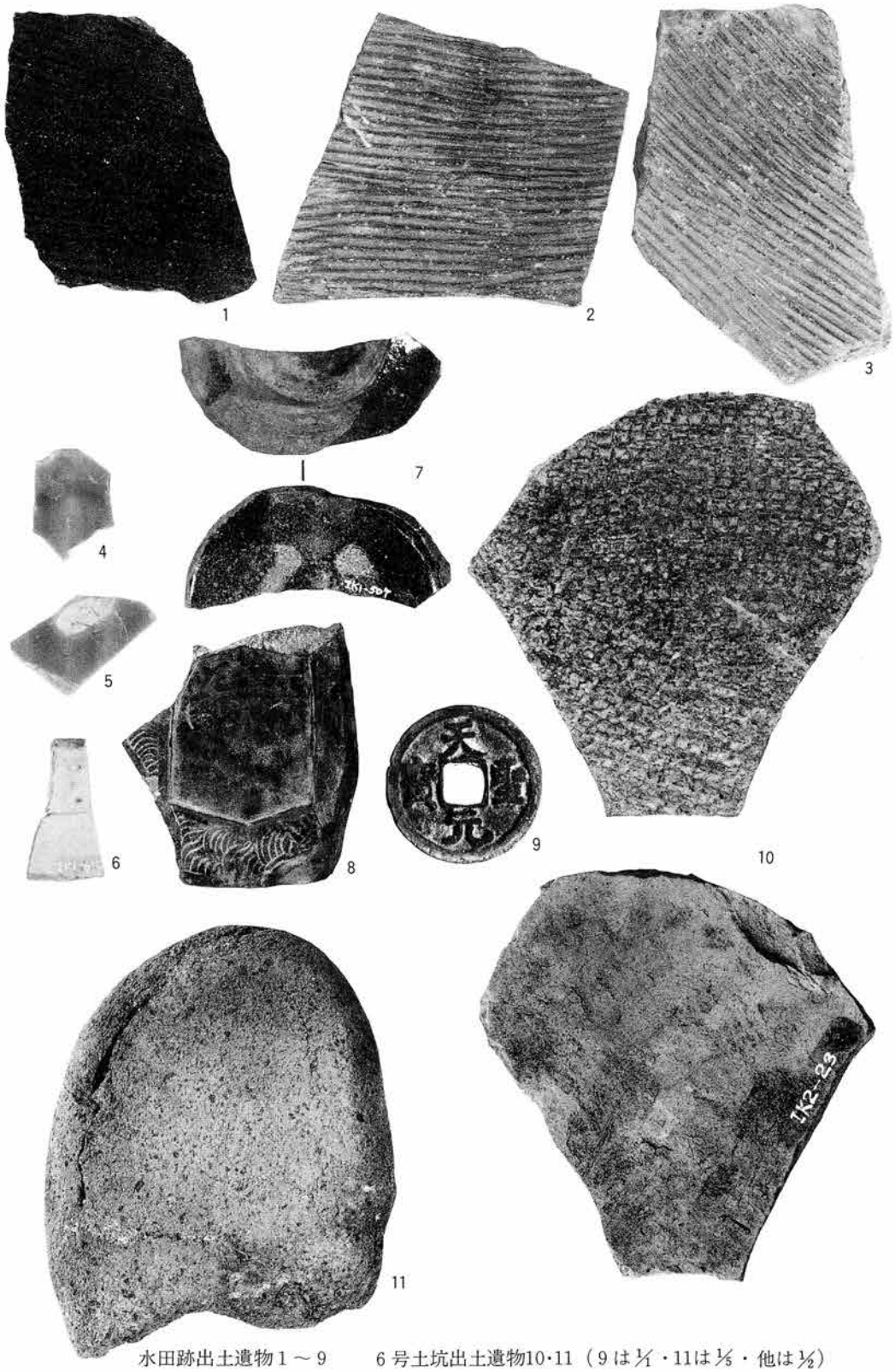
集 石

集石断面

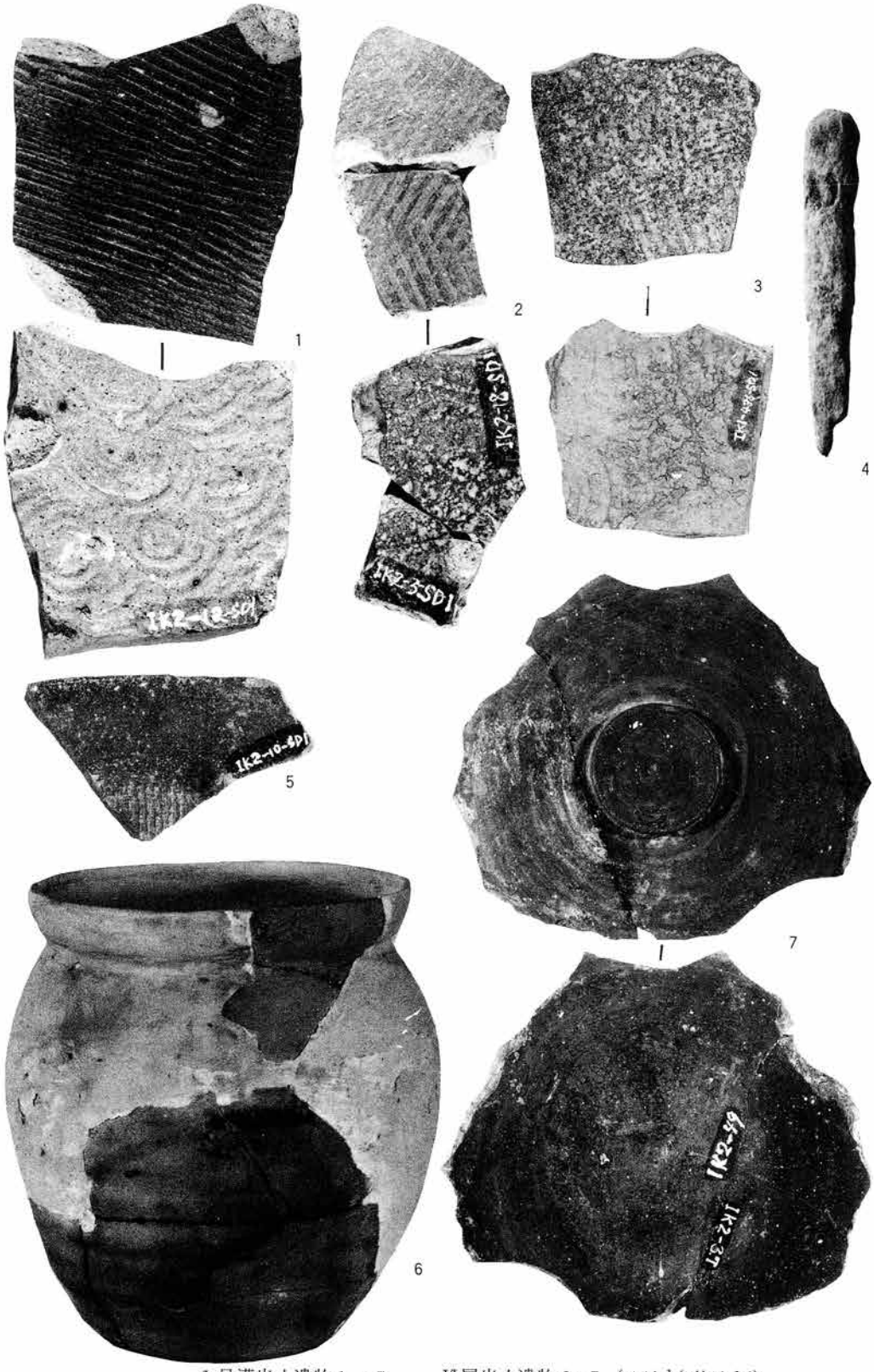
旧正善寺川



水田跡出土遺物（½）

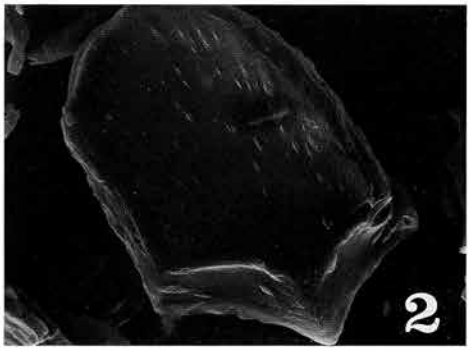


水田跡出土遺物１～９　　６号土坑出土遺物10･11（９は1/1・11は1/3・他は1/2）

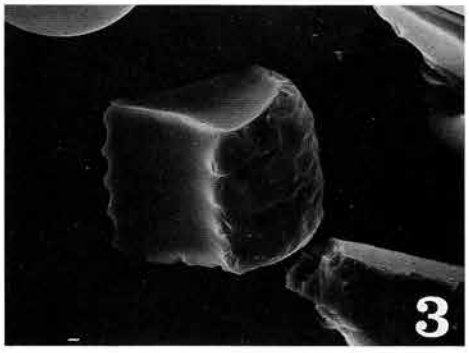


1号溝出土遺物1～5　　Ⅵ層出土遺物6・7（4は1/1 他は1/2）

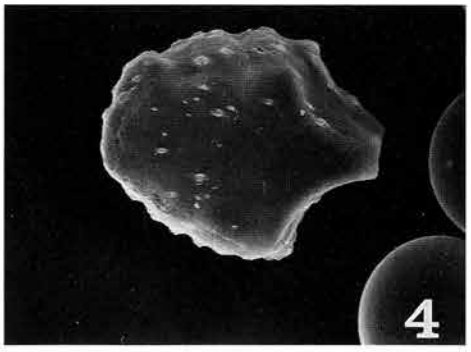
1．イネ機動細胞珪酸体（×1000）
(Oryza sativa L.)



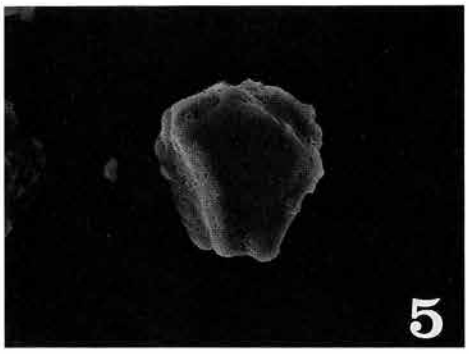
2．ヨシ機動細胞珪酸体（×1000）
(Bambusaceae)



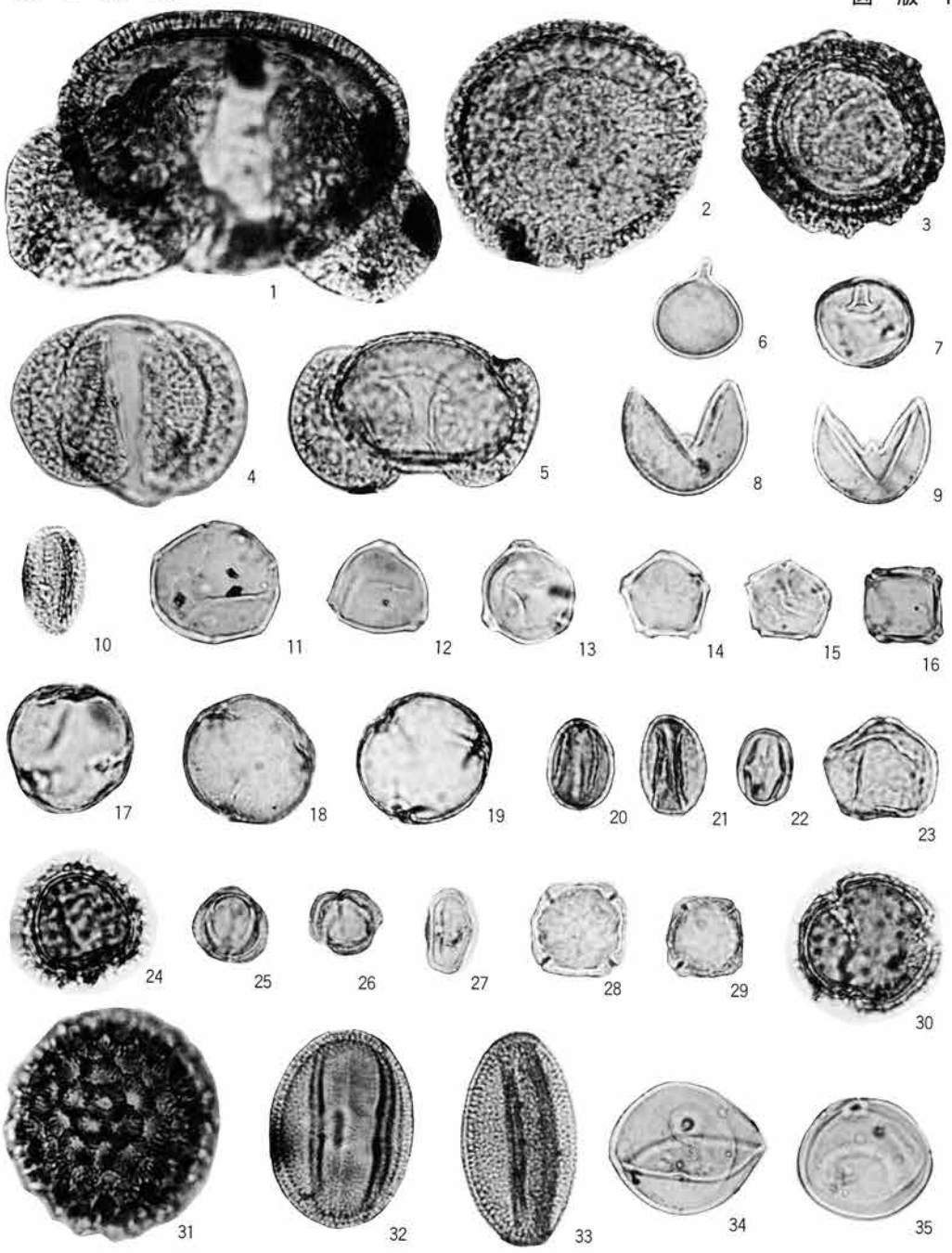
3．検出されたイネ機動細胞
プラント・オパール（×1000）



4．検出されたヨシ機動細胞
プラント・オパール（×1000）



5．検出されたタケ機動細胞
プラント・オパール（×1000）



（花　粉）

1：*Abies*（モミ属）　2・3：*Tsuga*（ツガ属）　4・5：*Pinus*（マツ属）　6～9：*Cryptomeria*（スギ属）　10：*Salix*（ヤナギ属）　11：*Juglans*（クルミ属）　12：*Corylus*（ハシバミ属）　13：*Betula*（カバノキ属）　14～16：*Alnus*（ハンノキ属）　17～19：*Fagus*（ブナ属）　20・21：*Quercus*（コナラ属）　22：*Castanopsis*（シイノキ属）　23：*Ulmus*（ニレ属）　24：Compositae（きく科）　25・26：*Artemisia*（ヨモギ属）　27：Umbelliterae（せり科）　28・29：*Myriophyllum*（フサモ属）　30：*Patrinia*（オミナエシ属）　31：*Persicaria*（タデ属）　32・33：*Fagopyrum*（ソバ属）　34・35：Gramineae（いね科）

（付編）

一之口遺跡4区

河川跡出土遺物

一之口遺跡4地区（15D，16D）で確認された河川跡は，道路法線内を南から北へ貫流していた。規模は幅約6m，確認面からの深度約1.5mを測る。覆土は7層に分層できたが，遺物の中には層位を問わず接合するものがあることから，投棄から埋没までの時間差は，短期間であったと考えられる。以下，出土遺物について報告する。

土器　（第1，2図　図版1　図版番号は実測図の番号に合せてある。）

河川跡より出土した土器の大部分を土師器が占める。同時期と思われる須恵器の存在は，現在までのところ不詳である。

坏（1～21）全てが回転糸切り離し，無調整である。胎土は精選され，焼成も良好である。口径・器高比で分類すると，4群に類別できる。1群（1～4）器高2.7～2.8cm，口径9.3～10cm。体部は厚めで，開き気味の浅い器形をとる。2群（5～11）器高2.8～3.2cm。口径10.4～10.9cm。1群よりひとまわり大きい。1・2群は小皿と呼ぶことができよう。3群（13～15）器高3.5～3.8cm，口径10～10.9cm。口径に比して深い器形をとり，体部が直斜的に立ち上る。4群（12，16～21）器高3.5～4.4cm，口径12.6～13.4cm。17は丁寧なナデ調整が施され，体部は内彎気味に立ち上る。他に体部から口縁部にかけて直斜的な器形をとるものと外反するものに分類できる。

有台碗（22～27，第2図28）有台碗は黒色処理されたものが，ほとんどを占める。大きさによって2群に分類できる。1群（22，26，27）器高4.9～5.4cm，口径11～12cm。22は口径に比較し，大きな高台を有し器厚で，体部に稜を持ち急角度で立ち上る。26，27は体部が内彎気味に立ち上り，口縁端を外反させる。胎土には砂が多いが器壁は薄く，焼成は堅緻である。このタイプの碗に暗文が多く施される。2群（23～25，28）器高5.7～6.5cm，口径14.6～14.8cm。23，24は体部は深く丸味を持って開き，短い高台を貼り付ける。内面はよく磨かれ，外面は粗い。23は底部篦削りされる。25は口縁部を外側につまみ出している。本例のような黒色処理されない有台碗は数少ない。28は器高6.2cm，口径14.6cm。体部は直斜的に開き，口縁部を細めている。内面は口縁部を磨き，十字に4分割し，各区画に波状線で「×」印の暗文を加える。

灰釉陶器碗（29）器高6.3cm，口径14.1cm，高台径7.1cm。底部回転糸切り痕を残し，付高台の部分をナデる。体部は丸味を持ち口縁部は若干外傾する。丸石一2に比定される（註1）。

甕（30～32）30は器高8.5cm，口径13.4cm，底径4.6cm。内面と外面上部は磨かれ，外面下半は手持ち篦削り。色調は黒色を呈す。31は器高14.2cm，口径19.6cm，底径10.8cm。外面上部と内面はナデ調整，外面下方は篦削りを施す。32は口径約22cm。内外面とも篦磨きで，外面に篦状工具による連続刺突痕を残す。

鍋（33）口径29.4cm。体部から口縁端部へ屈曲もなく，そのまま連続する器形をとる。色調は茶褐色で焼成は堅緻である。

木製品（第3，4図　図版2　図版番号は実測図の番号に合せてある）

この河川跡より多量の日常生活用具や祭祀用具等が発見された。一部をここに示し説明する。

生活用具

皿・椀（1～5）皿類の出土が椀を上回っている。1は口径約13cm，厚さ2mm程で黒漆塗りの精巧な作りである。2～5は薄く漆が塗られているが，素地は見える。**下駄**（6）踵にあたる部分が突き出た形と思われる。大きさから子供か女性が使用したものか。**火鑽臼**（7）長さ16.2cm。一端は焼け切れている。発火孔が片面の7ヶ所に穿たれる。**火鑽棒**（8）長さ34.1cm。棒を丸く削り一端は細めている。**コモヅチ**（9）長さ15cm。樹皮の残る自然木をそのまま使用している。中央部に2ヶ所刻みをつける。コモヅチの出土は多い。**砧**（10）長さ23.9cm。打つ部分は約10cmと短いようだが，製作時からのものと思う。**織物製作部品**（11）長さ29.2cm。一端は破損している。材の両側面に刻みがあり，さらに10刻みで1単位となるよう線刻によって区画される。各単位の長さは4～5.7cmと一定しない。用途は，越後では「アンギン」と呼ばれてる布を織る際に，物指しとして使用された可能性が指摘されている（註2）。**扇**（14～18）完型品の長さ31.5cm。先細りの作りから紙を張ったものと思われる。**櫛**（19）遺存長4.9cm。**用途不明木製品**（20）遺存長5.5cm。槍の穂先状である。俵の目通しの可能性もある。（12）膳の脚部か。（13）飾り具の一部と思われる。

祭祀・呪術用具

舟形木製品（21，22）21は長さ35.8cm。22は長さ22cm。丸木を刳り貫いたものである。この他に，数点出土している。**櫂**（24）長さ35cm。柄に枘穴があり削った端部をはめ込めるように造られている。**刀形木製品**（25）遺存長15.7cm。途中で欠損している。**人形**（26，27）26は長さ6.5cm。27は長さ10.2cmで烏帽子が造り出されている。2点とも横向きの姿で中世的な様相を示す。**墨書呪符**（図版2）長さ13.2cm。片面のみ墨書がある。文字は現在判読されていない。

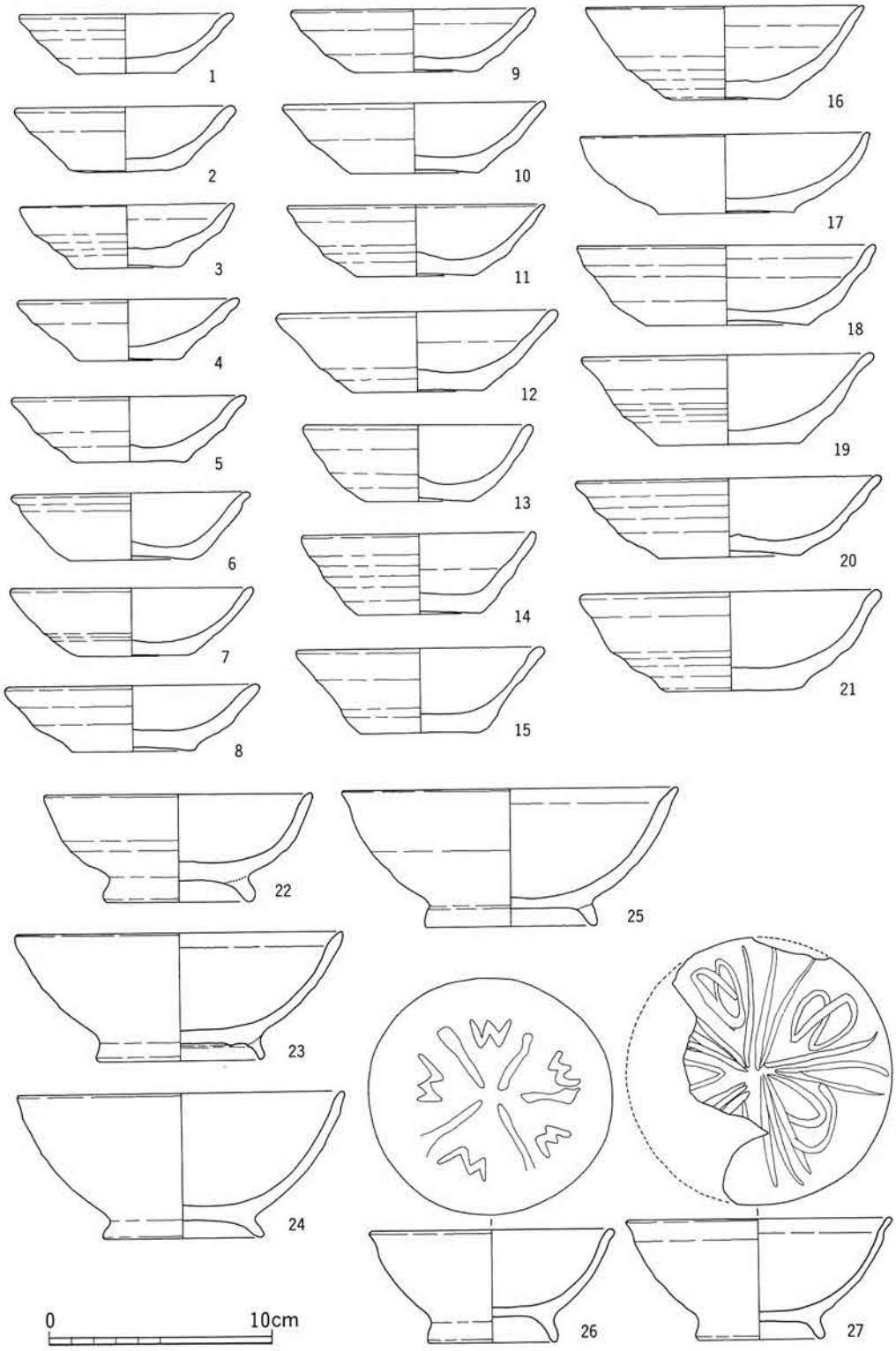
（註1　斉藤孝正・田口昭二・楢崎彰一各氏並びに奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部第2調査室の方々より御教示を得た。註2　渡辺誠氏より御教示を得た。）

結　び

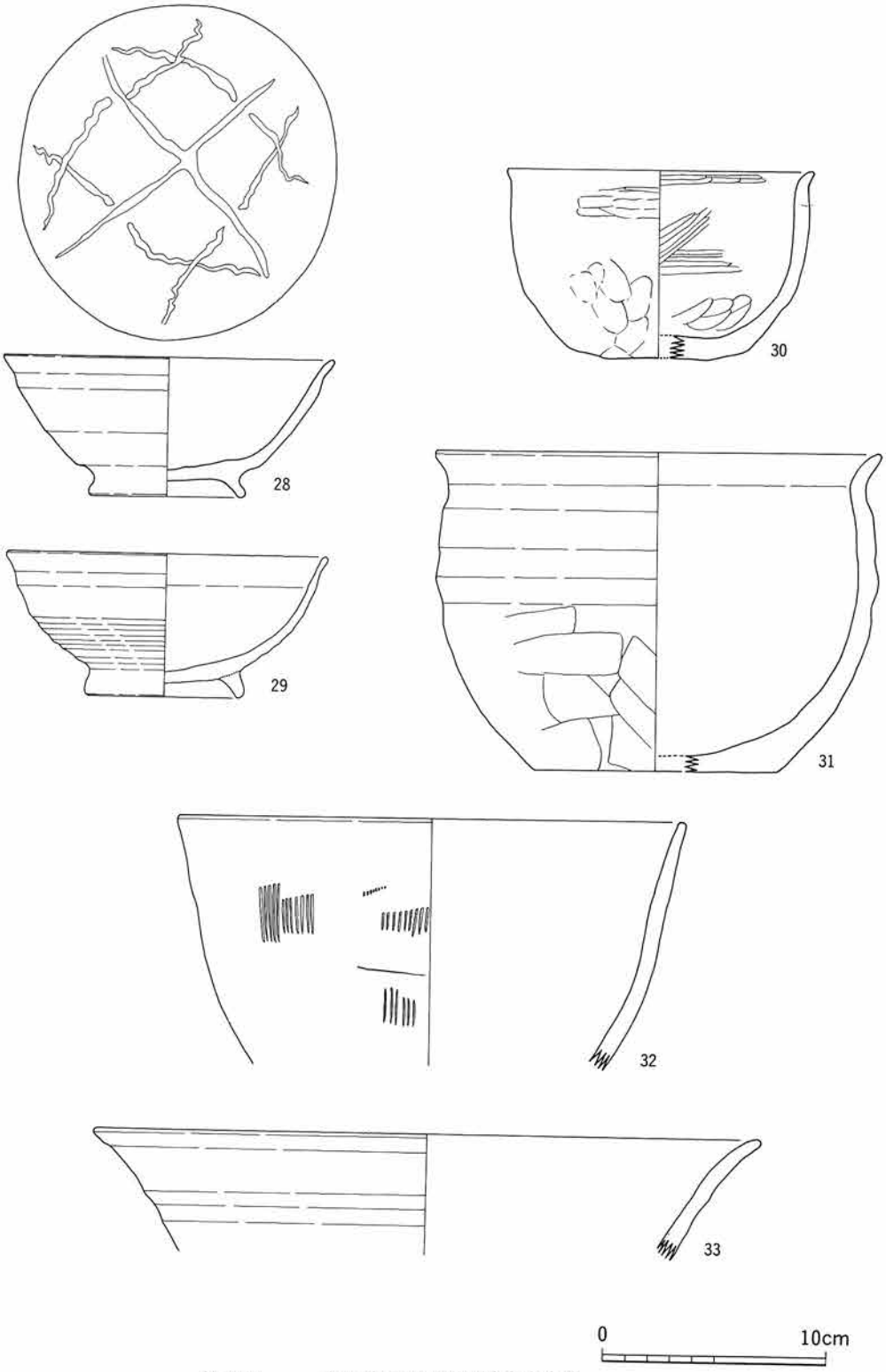
遺物の概略を説明してきたが，次に資料の特色を簡単にまとめてみる。土器についてみると，供膳形態の全てを土師器が占めている。小皿に類する坏はあるが，底部と体部の区分は明瞭である。これらの土器は全て底部回転糸切り離し，無調整である。有台碗には内面黒色処理されたものが圧倒的に多く，黒色有台碗に付される特徴的な暗文は，きわめて類例が少ない。土器群の年代は，共伴した灰釉碗の年代から11世紀後半と考えられる。北陸では，石川県加賀市田尻シンペイダン遺跡の土器群（11世紀末）に類例を求められる（註3）。次に木製品で注目されるものに，祭祀・呪術用具の出土がある。これに伴って燈明皿として使用された坏が多量に出土しており，これも祭祀に使用された可能性が濃い。これらは使用後の廃棄資料という制約を受けるが，古代末期の祭祀・呪術の一端を窺い知ることができる。

以上，報告書作成の途中であるが，資料の重要性を考え，その一部を報告した。

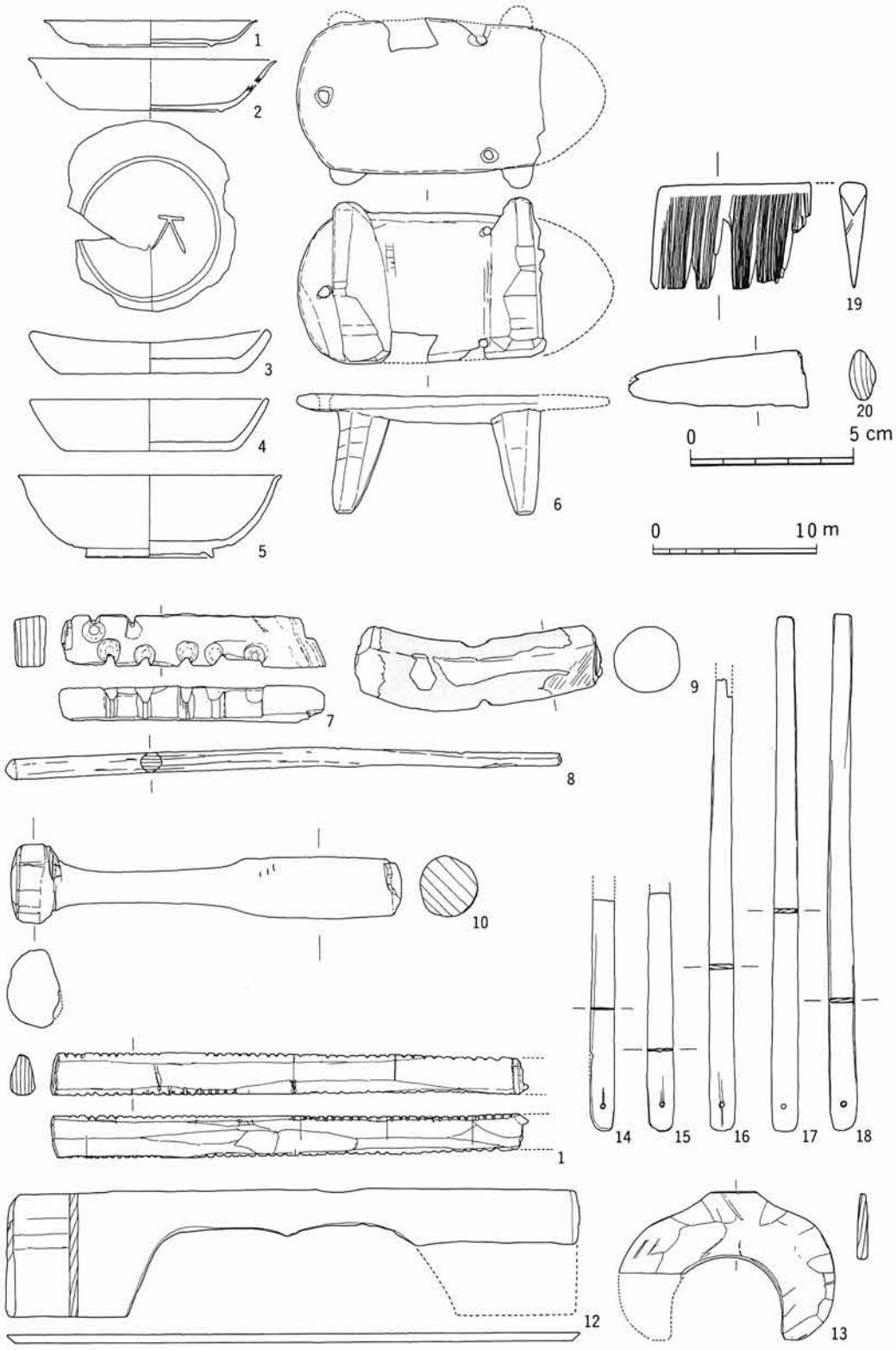
（註3　田島明人　『加賀市田尻シンペイダン遺跡発掘調査報告書』1979　石川県教育委員会）



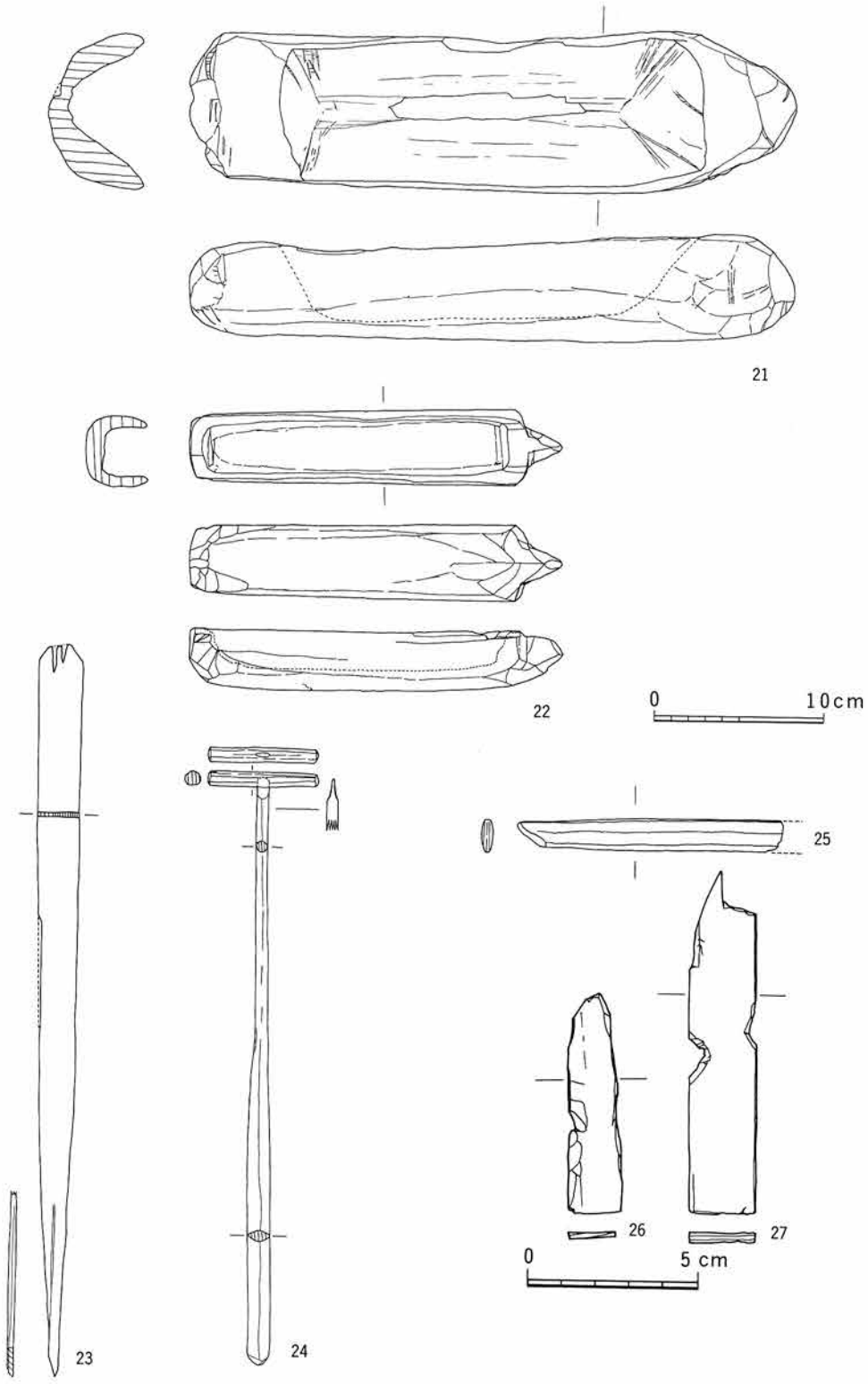
第１図　　一之口遺跡４区河川跡出土土器



第 2 図　　一之口遺跡 4 区河川跡出土土器

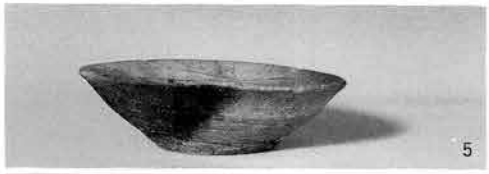


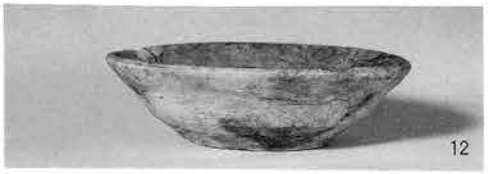
第3図　一之口遺跡4区河川跡出土木器

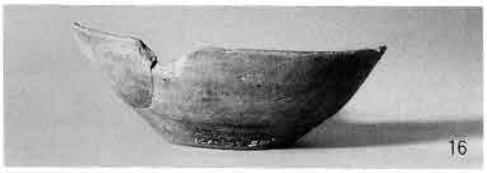


第4図　一之口遺跡4区河川跡出土木器

図 版 1

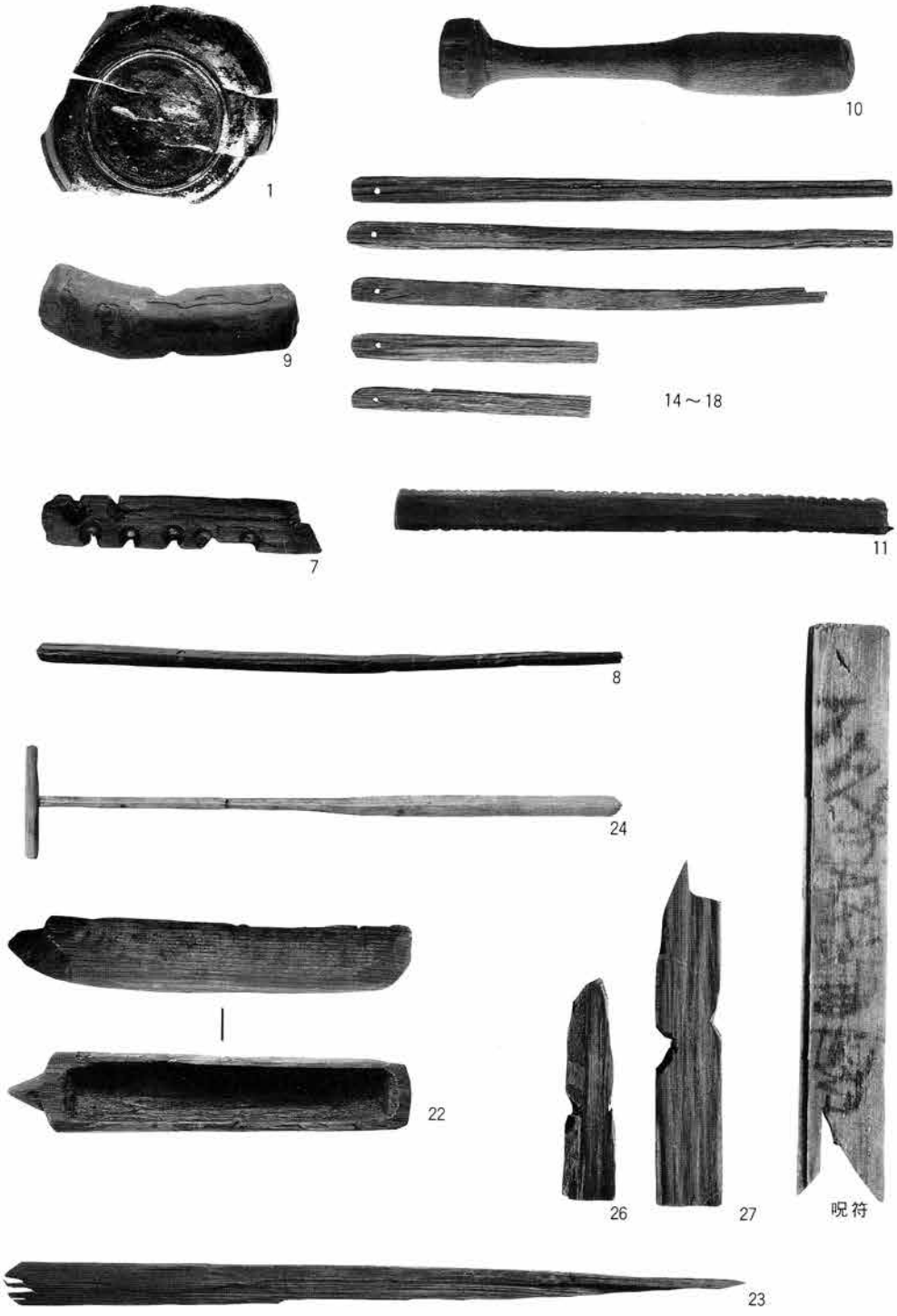






一之口遺跡 4 区　　河川出土土器

図 版 2



一之口遺跡４区　　河川出土木器

新潟県埋蔵文化財調査報告書第38

北陸自動車道

上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅰ

57年度発掘調査，池田遺跡

（付編）一之口遺跡4区河川跡出土遺物

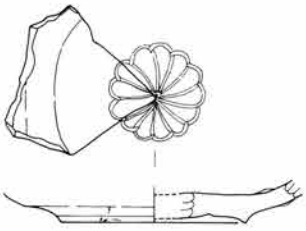
昭和60年3月30日　印　刷

昭和60年3月30日　発　行

発　行　新潟県教育委員会

印　刷　㈱第一印刷所

ページ	行	誤	正
13	上15	奈良・平安時代の	主に奈良・平安時代の
15	下 4	外面ば	外面は
16	上11	約46,000 ㎡	約 42,000 ㎡
16	下 1	下記のような	右記のような
17	下 3	図版 4 — 9	図版 4 —19
19	上 4	面積は 23,000 ㎡	面積は約 23,000 ㎡
19	上 4	試掘グリットは	試掘グリットを
19	上 5, 6	自然堤防上では堤防がとぎれるまでと	段丘上ではそれがとぎれるまでと
19	上13	第18図21	第17図21
	第18図	遺物範囲	遺跡範囲
21	上6	14は 8 C12から	15は 8 C12から
21	下 6	遺物包含地と考えられる	集落跡と考えられる
34	下12	図版11— 1 ～ 4	図版11— 1 ～ 3
36	上 2	図版11— 5	図版11— 4 ・ 5
37	下12	北側で 1 ～ 3 号の	北側で 1 ・ 4 ・ 5 号の
37	下 4	また、 1 ～ 3 号の	また、 1 ・ 4 ・ 5 号の
40	上 1	第32・34図	第32・33図
41	下 1	覆土はⅦb 層に	覆土はⅣb 層に
48	第39図 b	Umbelliferae（せり料）	Umbelliterae（せり料）
50	下11	（25～28・36～38）	（25・27・28・36～38）



第17図、16と差替